建築文化資源の評価と利活用

森　雅秀・矢口　直道

1. 調査概要

建築文化資源として、インド・マハーラーシュトラ州の石窟寺院の評価と利活用の可能性と現状を評価する資料を提供することを目的に、3 次元実測を中心とした調査を行った。調査対象とした石窟は西インドのベドゥサー、クダー、アジャンターの各石窟群である。石窟を文化資源として考えると、仏像などの彫像、壁画や、扉口、窓枠、壁面、柱頭など建築部位の彫刻装飾は、比較的小規模な美術工芸品的な評価をすることができる。また石窟単体は、その造営方法から全体が彫刻作品としても評価できるものであるが、規模からは建築遺産として評価できる。さらに石窟が集合して構成している石窟群全体としてみると、橋やダム、閘門などの土木遺産的な要素も加わる。本調査では、建築遺産的、土木遺産的要素を中心に実測を行った。実測調査日程は、2011 年 2 月から 4 月、および 7 月から 9 月にかけてである。

本報告書は、まず調査全体の概要と、建築文化資源の利活用に関する報告を述べ、調査日程を記した後、対象とした調査地の報告を調査順に行う。

石窟寺院について

石窟という建築形式は世界各地に見られるが、インドでは西インドに特に数が多く、その数は 1000 を超えている。インドの石窟の最大の特徴のひとつに、自然にできた洞窟を利用したものがほとんどなく、人工的に造られたものだということが挙げられる。宗教的にも主に仏教が中心として広まり、ヒンドゥー教、ジャイナ教の石窟寺院に展開している。厳密に言うと最古の石窟は紀元前 3 世紀半ばと考えられる、ビハール州バラーバル丘のローマス・リシ窟（アージーヴィカ教）であるが、その後、仏教さらにヒンドゥー教、ジャイナ教に引き継がれる。

仏教石窟は、最初は教団の修行施設として造られたものであるが、通常石窟単体で造営されることは希で、礼拝のための祠堂窟（チャイティヤ窟）と僧侶の住居としての僧坊窟（ヴィハーラ窟）が組み合わされて石窟群を形成している。2 つから 3 つの石窟で 1 つの石窟群を形成する場合から 50 を超える石窟で形成する場合がある。

石窟は岩盤の中に穿たれているという構造上、暑期には岩盤が自然の冷媒となって暑さを防ぎ、寒期には逆に岩盤が石窟内の保温効果を高めるように作用する。詳細なデータは ASI（Archaeological Survey of India／インド考古局）が保持しているが、外気温よりも 2 ～ 3℃程は快適のようである。

石窟はおそらく、僧の修業のため、人里から適当に距離を保った山間部に仏教が中心となって開窟が始まったものであると考えられる。西インドに石窟が集中しているが、中でもデカン高原西部のマハーラーシュトラ州には美術・建築的価値の高いものが多い。石窟をつくるのに適した玄武岩による地形があったことに起因するが、仏教に帰依した商人が行き来する、アラビア海沿岸と内陸の王朝の都とを結ぶ通商路にあたる地域だったことも原因のひとつである。修行僧は托鉢によって生活していたので、人や物資との、付かず離れずの位置関係を微妙に保ちながら仏教教団が維持されていたのであろう。

建築的には通常の平地に建てられた建築物の正面ファサードと内部空間を断崖の中に写したものということができる。石窟は紀元前 3 世紀から 7 世紀頃まで造営されられていたと考えられているが、建築学的に編年する際、造営された年代が不明確な石窟を考える視点として、木造建築的表現に忠実で、平面形が単純であるものがより古いという考え方が根強く残っている。

仏教石窟は単独で存在するものがほとんどなく、いくつかの石窟がまとまって存在している。石窟には礼拝の対象である仏陀の象徴であるストゥーパを奥にまつるチャイティヤ窟と、僧侶の居住空間として開窟されたヴィハーラ窟がある。チャイティヤは、「聖なるもの」を表し、仏教の場合、仏陀を象徴するものをさす。ストゥーパの他に法輪、菩提樹、仏足石などを指すことがある。しかし、仏舎利を祀ったストゥーパが礼拝

の対象となり、これがチャイティヤの代名詞となった。そのストゥーパを祀るお堂をチャイティヤ堂、石窟をチャイティヤ窟と呼ぶようになっている。ヴィハーラは、もともと平地に木造またはレンガ造で建てられていた僧院のことでそれを石窟の建築形態に置き換えたものである。柱庭の 4 面を囲うように僧房と呼ばれる小室を配置するが、石窟では採光、掘削の関係上ホールへの入口を外部に開いて正面廊としているのが一般的である。小規模なものでは 1 室の僧房に正面廊がついたものから、列柱で囲まれた広間を中心として左右後廊を介してそれぞれの壁に 7 から 8 の僧房を配した大規模なもの、また後壁の中央に仏殿などの祠堂を祀るものまでその平面類型は多様である。

調査目的

従来の研究では、石窟内に残された碑文からその年代を特定し、そこに施された主に建築的な彫刻意匠、彫像の図像的解釈とその裏付けとなる文献との整合性から、彫像の形態的、図像的展開を見ることなどに主眼が置かれてきた。建築的には、柱や扉口に見られる装飾的展開の研究、建築空間の発展などについての研究が進められている。石窟には、通常の建築とは異なる存在上の特徴があります。建築部材を組み立てる通常の建築物とは異なり、岩壁を穿って空間を削り出す石窟では、一度削ったところを改変、修復、交換することはできず、全ての作業にその痕跡が残る。取り替えのきかない素材を用いた彫刻のような感覚で建築空間を構築するものだと言える。

西インドの石窟寺院は、大きく分けて紀元前後に開窟された前期窟と中断期をはさんで 5 世紀以降に開窟された後期窟に分けられるのが一般的である。アジャンター、バージャーなどの代表的な石窟寺院は、詳細な調査報告とともに修復保存の体制がとられている。一方、前期の後半に開窟されたと考えられている石窟寺院の中には、その重要性にもかかわらず、保存修復が十分ではないものも見受けられる。これらの遺跡の現状について調査し、建築的価値を評価するもととなる資料を提供することを目的とする。

調査方法

西インドに広く分布する石窟寺院の中からベドゥサー、クダー、アジャンターの 3 つの石窟群を選定し、それらの現在の保存状況を把握するために現地調査を行い、遺構を考古学的、建築学的に評価する。現地調査の際には、写真撮影、石窟の実測を行った。実測は Topcon 製レーザースキャナー GLS1500 を用いて 3 次元実測を行った。

インド、デカン大学院大学、考古学部、助教授、シュリーカント・ジャドウ博士（Shreekant S. Jadhav）の助言をいただき調査を進めた。

調査対象

西インドの石窟寺院で、プネー近郊のベドゥサー石窟群、コンカンの海岸地方のクダー石窟群、西ガート山脈の北縁にあるアジャンター石窟とした。

ベドゥサー石窟は、西暦 1 世紀に比定されている石窟群で、貯水槽などの小さいものを含めると 15 の石窟で構成される。大規模なものは、第 7 窟のチャイティヤ窟と第 11 窟のヴィハーラ窟である。チャイティヤ窟は正面廊の建築モチーフの浮き彫り彫刻と柱上のミトゥナ像が特徴的で、ヴィハーラ窟は、インドで唯一、馬蹄形平面をもつことが特筆されている。

クダー石窟群は、ブラフミー文字で刻まれた多くの碑文が残ることで有名な石窟群であるが、小規模で装飾が少ない石窟が多いため、石窟自体の評価は高くない。主に碑文の様式から紀元前 2 世紀から 4 世紀の間に開窟されたと考えられている。石窟には下から順に番号がつけられていて、第 1 窟から 14 窟がほぼ同じ高さに、少し階段を上がって第 15 窟、さらに階段を上がって第 16 窟から第 19 窟で構成されている。この他に、急な斜面を登ったところに、さらに 7 窟確認されているが、器材の運搬等に支障を来すため、調査対象には含めなかった。これらの石窟には、ストゥーパをまつるチャイティヤ窟が 4 つ（第 1、6、9、15 窟）あって、そのほかはヴィハーラ窟である。石窟相互の関係を見る観点からは非常に興味深い石窟群で、特に第 1 窟から第 9 窟にかけては、大小の石窟がいくらかの高低差を持って密接に集合している。

アジャンター石窟は、石窟群のほぼ中央に位置する前期石窟（第 9、10、12、13 窟）と、その両側に開窟された後期石窟で構成されています。前期石窟は紀元前後、後期石窟は第 16 窟に残る銘文から 5 世紀後半に開窟されたものと考えられている。実際に実測調査を行ったのは、ASI から許可の下りた石窟群の西側の壁画のあまりない 21 窟から 27 窟までである。これらの石窟は隣り合う石窟が入り組んでいて、石窟相互の関係から非常に興味深い。

建築文化資源の利活用

調査対象とした石窟群は、西インドの石窟群の中でも比較的知名度のある石窟である。これらの石窟には、彫刻、絵画作品としての美術的価値、石窟単体としての建築的価値、石窟群全体としての土木的価値があると考えられる。この複合した価値評価を歴史的文化資源ととらえ、その観光的利活用について現状を報告する。調査した遺跡は観光的利活用の観点から 2 つに分類することができる。1 つは数多く訪れる観光客を以下に効率よく観光してもらい、遺跡を保存するかが課題となっているアジャンター石窟である。もう一つは、ほとんど観光客が訪れず、遺跡の維持のために最小限の人材をさいているクダー石窟、ベドゥサー石窟である。

アジャンターはインド中央政府のインド考古局（Archaeological Survey of India）の管理下に置かれ、さらに世界遺産に指定されており、観光客も多い。また日本政府の JAICA の支援を含め、世界各国から修復の技術提供が行われている。

アジャンター石窟へは、主に国内線の空港のある主要都市オーランガバード（Aurangabad）から主要高速州道（Major State Highway）8 号線で 97km 移動するか、もしくは鉄道の主要駅であるジャルガオン（Jalgaon）またはブサワル（Bhusawal）より高速州道（State Highway）186 号線から主要高速州道 8 号線でアプローチする。ムンバイ、デリー等の大都市からは距離があるため、鉄道、空港、道路を一体として整備することが観光資源として活用するためには必要な措置であろう。

アジャンターでは主要州高速道 8 号線沿線に、建設された T- ポイントと呼ばれる施設で、バスを乗り換える必要がある。オーランガバード（Aurangabad）からムクタイナガル（Muktainagar）を経て、マディヤ・プラデーシュ州との州境に至る、主要高速州道 8 号線にアジャンターからの観光道路が T 字形にぶつかっているためにこう呼ばれる。自家用車で訪れた場合にもここで、アジャンターまでの 7km を往復する環境に配慮した低公害バスに乗り換える。環境に配慮したパークアンドライドである。T ポイントには、駐車場に隣接して大きなショッピングモールがあって、さらにアジャンター石窟の主要な石窟の壁画を展示する施設も建設中である。第 1、2、16、17 窟と同じ規模のレプリカを建設し写真撮影した壁画の展示を行うものである。中国の敦煌遺跡にも同様の施設がある。実際の石窟は壁画保護のために証明が制限され、懐中電灯などを用いない限りほとんど見えない。観光客が身近に壁画に触れるにはよい試みであると思われるが、建設に既に 10 年かかっており、未だに躯体工事が完成していない。様々な試みがなされているが、全てがうまくいっているわけではない。

アジャンター石窟では、第 1、2、16、17 窟の壁画の保存、修復が第一義で、以下、その他の石窟を含めた彫刻、建築、外構の順に重要度が決められている。したがって、壁画、天井画に近づくことは厳しく規制されているが、実際に手に触れることのできるところに遺跡があって、比較的自由に彫像に触れることができる。

アジャンター石窟には、石窟の管理と保存修復のために 100 人以上の人材が従事している。従事者は 4 つの部署、すなわち石窟全体の管理をする部署（administrative branch）、主に壁画と彫刻の修復を担当する部署（chemical branch）、観光施設としての石窟の防犯や規律保持のための部署（security branch）、落石を防ぐ工事や歩道の拡幅整備などを行う部署（maintenance branch）に分かれてそれぞれの職務を果たしている。

一方、クダー石窟、ベドゥサー石窟は州政府の考古局（Archaeological Survey of Maharashutra）が管理する遺跡で、入場料は徴収していない。この管理上の差異は、インド考古局の遺跡の保存に関する重要度によって決定されているものであるが、これが観光資源としての重要度とも密接に関係している。

クダー石窟は、コンカン地方の地方都市ローハ（Roha）から、ロハ・ムルド街道（Roha-Murud Rd）を 20km ほど南に行ったところにある。山道を自動車で石窟の眼前まで行くことができるが、定期バスの運行している近隣のクダー村からは徒歩で 30 分程度山道を登る必要がある。遺跡としての評価が高くないため、観光客はほとんど訪れない。常駐する管理業務に従事する人材は 1 名で、村の農業と兼業で毎日石窟に来るわけではない。実際の作業は定期的な清掃と雑草の除去である。

ベドゥサー石窟は、ムンバイ・プネー高速国道（National Highway）4 号線とほぼ並行して走るムンバイ・プネー高速道（Mumbai-Pune Highway）から地方道であるパヴァナナガル・カムシェット街道（Pavananagar-Kamshet Rd）に入り、1km ほど南西に向かい、ベドゥセ・ガオン街道（Bedse-Gaon Rd）を 2km 程北西に行った、ベドゥサー村からアプローチする。この村から山の斜面の急な階段を 400 段ほど上る。駐車場はなく、観光客はほとんど訪れない。観光のためのアクセスが十分整備されているとは言えず、ベドゥサーからムン

バイの方向に約 9km のところにカールラー石窟（Karla Caves）、バージャー石窟（Baja Caves）に至る分岐点がある。左右に分かれて進むとそれぞれの遺跡に到達するが、これらの遺跡は、双方とも ASI の管理下にある。いずれの石窟も大規模で、前期石窟の代表として挙げられている。さらにカールラー石窟は、主要なチャイティヤ窟の前庭に、女神アーイ・エクヴィーラ（Aai Ekveera）を祀るヒンドゥー教寺院があって、現在でも信仰を集めている。石窟自体の遺跡としての評価に加えて、現在も信仰対象とされている寺院の存在も重要であろう。ベドゥサー第 11 窟の最も奥の僧房左側には、ヒンドゥー教の女神のレリーフがあって、現在でも礼拝は続いているが、礼拝する人々はごく限られている。

クダー、ベドゥサー石窟に限らず古代仏教遺跡は、まず遺跡として保存することが必要で、それ以外の活用方法は考えられない。アジャンターを訪れる観光客の中に、インド国内はもとより、東南アジア、東アジアからの巡礼者が見受けられる。仏教の巡礼と関連付けることによって観光資源としての利活用をはかることができるかもしれない。

2. 調査日程

実測調査期間は、2011 年 2 月から 4 月、および 7 月から 9 月にかけてであるが、調査日程は以下のとおりである。

2010 年度 実測調査（2011 年 2 月から 4 月）

2 月15日　ムンバイ着
2 月18日　アジャンター石窟 26, 24, 23, 21, 17, 16, 1 窟調査
2 月19日　アジャンター石窟 16 窟調査
2 月20日　アジャンター石窟 17, 21, 16, 11, 2 窟調査
2 月21日　データ整理
2 月22日　アジャンター石窟 17, 6L, 1 窟調査
2 月23日　アジャンター石窟 17, 20, 15, 4 窟調査
2 月24日　アジャンター石窟 2 窟調査
2 月25日　アジャンター石窟 10 窟調査
2 月26日　アジャンター石窟 9, 2 窟調査
2 月27日　アジャンター石窟扉口調査
2 月28日　ガトートカッチャ石窟調査
3 月 1 日　アジャンター石窟扉口調査
3 月 2 日　アジャンター石窟 6U, 1 窟調査
3 月 3 日　アジャンター石窟 17, 16, 1 窟調査
3 月 4 日　アジャンター石窟 1, 26, 14, 4, 2 窟調査
3 月 5 日　アジャンター石窟→プネー
3 月 6 日　調査打ち合わせ
3 月 7 日　ベドゥサー石窟ヴィハーラ窟 3 次元実測調査
3 月 8 日　ベドゥサー石窟ヴィハーラ窟 3 次元実測調査
3 月 9 日　ベドゥサー石窟ヴィハーラ窟 3 次元実測調査
3 月10日　ベドゥサー石窟チャイティヤ窟 3 次元実測調査
3 月11日　ベドゥサー石窟チャイティヤ窟 3 次元実測調査
3 月12日　ベドゥサー石窟チャイティヤ窟 3 次元実測調査
3 月13日　ベドゥサー石窟チャイティヤ窟 3 次元実測調査
3 月14日　ベドゥサー石窟ヴィハーラ窟調査
3 月15日　ベドゥサー石窟チャイティヤ窟調査
3 月16日　ベドゥサー石窟チャイティヤ窟調査
3 月17日　プネー→ローハ（クダー石窟近郊）
3 月18日　クダー石窟 6 窟 3 次元実測調査
3 月19日　クダー石窟 6 窟 3 次元実測調査
3 月20日　クダー石窟 1 窟 3 次元実測調査
3 月21日　クダー石窟 1 窟 , 4 窟 3 次元実測調査
3 月22日　クダー石窟 4 窟 , 5 窟 3 次元実測調査
3 月23日　クダー石窟 2 窟 , 3 窟 , 7 窟 3 次元実測調査
3 月24日　クダー石窟 8 窟 3 次元実測調査
3 月25日　クダー石窟 9 窟､ファサード 3 次元実測調査
3 月26日　クダー石窟 15 窟 3 次元実測調査
3 月27日　クダー石窟 16 窟－19 窟 3 次元実測調査
3 月28日　クダー石窟→プネー
3 月29日　バージャ石窟、カールラー石窟調査
3 月30日　プネー大学にて特別講義
4 月 3 日　ムンバイ発

2011 年度 実測調査（2011 年 7 月から 10 月）

7 月19日　プネー
7 月20日　デカン大学院大学調査打ち合わせ
7 月21日　プネー大学調査打ち合わせ
7 月22日　データ整理
7 月23日　データ整理
7 月24日　データ整理
7 月25日　データ整理
7 月26日　デカン大学院大学講演
7 月27日　デカン大学院大学調査打ち合わせ
7 月28日　データ整理

7月29日　デカン大学院大学調査打ち合わせ
7月30日　データ整理
7月31日　データ整理
8月1日　データ整理
8月2日　デカン大学院大学調査打ち合わせ
8月3日　プネー→オーランガバード
8月4日　ASI 調査打ち合わせ（オーランガバード）
8月5日　データ整理
8月6日　データ整理
8月7日　データ整理
8月8日　ASI 調査打ち合わせ（オーランガバード）
8月9日　データ整理
8月10日　データ整理
8月11日　データ整理
8月12日　ASI 調査打ち合わせ（オーランガバード）
8月13日　データ整理
8月14日　アジャンター石窟 19, 17, U6 窟調査
8月15日　データ整理
8月16日　アジャンター石窟 19, 17, 16 窟調査
8月17日　アジャンター石窟 2, 1 窟調査
8月18日　アジャンター石窟 15, 11, 7, L6 窟調査
8月19日　アジャンター石窟 26 窟調査
8月20日　アジャンター村
8月21日　エローラ石窟調査
8月22日　ASI 調査打ち合わせ（オーランガバード）
8月23日　ASI 調査打ち合わせ（オーランガバード）
8月24日　データ整理
8月25日　豪雨により調査中止
8月26日　アジャンター石窟 26 窟 3 次元実測調査
8月27日　アジャンター石窟26 窟, 25 窟3 次元実測調査
8月28日　アジャンター石窟 23 窟正面廊 3 次元実測調査
8月29日　アジャンター石窟全景 3 次元実測調査
8月30日　アジャンター石窟 27 窟 3 次元実測調査
8月31日　アジャンター石窟 27 窟 3 次元実測調査
8月1日　アジャンター石窟 24 窟 3 次元実測調査
9月2日　アジャンター石窟 26 窟左翼（LW）3 次元実測調査
9月3日　アジャンター石窟 26 窟右翼（RW）3 次元実測調査
9月4日　アジャンター石窟 26 窟右翼（RW）3 次元実測調査
9月5日　アジャンター石窟全景 3 次元実測調査
9月6日　アジャンター石窟 21 窟正面廊, 24 窟 3 次元実測調査
9月7日　アジャンター石窟 23 窟 3 次元実測調査
9月8日　アジャンター石窟 24 窟 3 次元実測調査
9月9日　データ整理
9月10日　データ整理
9月11日　データ整理
9月12日　データ整理
9月13日　データ整理
9日14日　データ整理
9日15日　データ整理
9月16日　データ整理
9月17日　データ整理
9月18日　アジャンター石窟 17 窟調査
9月19日　データ整理
9月20日　アジャンター石窟 10 窟調査
9月21日　アジャンター石窟ファサード , 27, 24, 26 窟調査
9月22日　アジャンター石窟ファサード , 23 窟調査
9月23日　アジャンター石窟 23 窟調査
9月24日　アジャンター石窟 23, 24 窟調査
9月25日　アジャンター石窟 1, 10 窟調査
9月26日　アジャンター石窟 29, 21 - 26 窟調査
9月27日　データ整理
9月28日　アジャンター→プネー
9月29日　アジャンター石窟
9月30日　デカン大学院大学調査打ち合わせ
10月1日　データ整理
10月2日　データ整理
10月3日　プネー→ムンバイ
10月4日　ムンバイ発

3. ベドゥサー石窟（Fig. 1-39）

ベドゥサー石窟はカールラー、バージャー石窟とともにプネー近郊の前期仏教石窟で、バージャー石窟群から 9km 南東に離れた、同じ山脈の東側に位置する小規模な石窟群である。海抜 660m 程度の位置で、山の中腹にあるため、直下のベドゥサー村からは 400 段以上の階段を上る必要がある。

ベドゥサー石窟群はごく小規模な貯水槽まで数えあげても全部で 15 の石窟群で南から順番に番号が付けられている。主な石窟はチャイティヤ窟の第 7 窟とヴィハーラ窟の第 11 窟である。造営年代はサータヴァーハナ時代の前期石窟の隆盛期である西暦 1 世紀前

半頃とみられる。

第 1 窟と 3 窟はストゥーパを持つチャイティヤ窟であるが、いずれも未完である。第 1 窟は前廊を彫り込み、円形平面の祠堂に荒削りのストゥーパが残っている。第 3 窟は奉献塔（votive stupa）のように、露出したストゥーパが掘り出されている。

第 10 窟は未完の僧房であるが、ほぼ同じ大きさの室が前後に計画されていたものと考えられる。前室にあたる室の右壁に、第 11 窟左前室僧房との間に貫通孔がみられる。

その他の第 2, 3, 4, 5, 6, 8, 9 窟は、貯水槽である。

第 7 窟　チャイティヤ窟（Fig. 4-25）

チャイティヤ窟である第 7 窟は、細いアプローチの奥に石窟が造営されている。ベドゥサーに限らず、チャイティヤ窟は必要な高さを確保するためにファサードをセットバックする必要がある。他の石窟群では（例えばクダー石窟）、ファサードまでの岩塊を全て取り除いているが、ベドゥサーの場合は、石窟中央と上部だけの岩塊を取り除き、その他はそのまま掘り残している。そのため、外部からみると僅かに正面廊正面の列柱の柱頭だけをうかがうことができる。この通路を奥に進むと正面廊に至る。

正面廊は 2 本の柱と左右の付柱で、列柱廊を構成している。この列柱は石窟内部の柱よりも正面廊の天井が高く柱間がある分だけ太く造られている。石窟内部の列柱が単純な八角柱で無装飾であるのに対し、これら正面廊列柱は、柱身こそ八角柱であるが、柱礎が水瓶型となり、複雑な柱頭装飾を持つ。柱頭は鐘型蓮弁の上に枠入りの溝彫付きアーマラカ（円盤）を置き、逆ピラミッド型の層を重ねて、その上に騎馬供養者を載せている。馬や象に乗った供養者は男女一対のミトゥナ像で自然で整った表現となっている象の牙や逆ピラミッドの層などに欠損がみられ、木片で補った痕跡がみられる。供養者像の上には垂木を象った表現がみられるが垂木尻にも同様の欠損を補修した痕跡がある垂木尻の間と、逆ピラミッドの層の装飾の最上部には等間隔に金具を用いた痕跡があり、これは花綱などをかけて石窟正面を荘厳したものではないかと考えられる。

正面廊奥壁と側壁全体は建築モチーフが施され、4 層の構造物を想像させる。各層には大きなチャイティヤ窓と小さなチャイティヤ窓が一組になってこれに欄干の装飾や迫り出しのモチーフが組み合わされて、各層で異なった様相を呈している。左右のモチーフは層ごとに同じであるが、細部をみると垂木尻の数、欄干の数、格子模様の有無などが異なっている。

正面廊奥壁には中央に主扉口、右側に縦長の擬似格子窓、左には格子窓と同じ幅の入口がある。擬似格子窓の下には欄干のレリーフが設けられている。これらの開口部は、入口上部にチャイティヤ窓と同じ装飾を持つ。左側の入口は上部の装飾が擬似格子窓と同じであること、下の欄干が不自然に不連続なことから、格子窓が入口に改変されたものであると考えられる。開口部の上部には大きなチャイティヤ窓が設けられ、その周囲に側壁から連続するチャイティヤ窓と欄干の建築モチーフが続く。チャイティヤ窓の枠の直下は、擬似格子窓となっている。実際の建築では、大きな荷重を受ける窓枠が開口部のすぐ上に来ることは合理的ではない。枠を支える柱などを用いるべきところに、枠を支えることのできない開口部が存在するのである。もともと大きな岩塊から比較的自由に造形することができる彫刻的要素を含んだ石窟独特のデザインといえよう。開口部の上のチャイティヤ窓の装飾はその頂部が削り取られており、木造の部材をはめ込んだものだと考えられる。大きなチャイティヤ窓との関連性も考慮に入れる必要があるかもしれない。

側壁にはそれぞれ二つずつの僧坊が設けられている。右壁はそれぞれ 2 つずつの寝台が彫り出され、ほぼ完成しているが、左壁の僧房は、手前の僧房が扉口とその周辺部しか完成していない。一方、チャイティヤ堂内左廊最前部には扉口装飾はない未完の僧房が開けられている。この堂内の僧房からは断層から水が出るので、造営当時に水はけのための排水溝が手前の僧房への貫通孔として開けられている。

チャイティヤ窟の内部は計 26 本の列柱があり、手前の矩形断面を持つ 2 本の柱を除き、すべて 8 角柱の列柱で、いずれも柱礎・柱頭はなく、左奥の 5 本の柱の柱身に微かに数種類の吉祥文が認められるだけで、正面廊の列柱にみられたように装飾は見られない。

ストゥーパは高い二重の基壇で、段の変わるところに欄干のモチーフが設けられ、下段の基壇が高くなっている。この上に球状の伏鉢がのり、平頭部には逆ピラミッド形のモチーフが用いられている。その上には造営当初の木製の傘竿が現在まで残り、その傘竿頂部には傘蓋を支えていた蓮華が彫られている。

天井には木製の輪垂木をはめた痕跡が、チャイティヤ窓には、窓枠をはめた痕跡もみられる。

また、左側の列柱の手前 2 本に、剣を執る男性像と、四角い白い扇をもった人物が描かれていたとの報告があるが、現在は鮮明に確認することはできない。なお天井画は不鮮明で図像の痕跡は確認できない。J. バージェス（調査時）は列柱に仏陀の三尊像が描かれていたことを伝えている。ただ、全体を覆っていた白い漆喰と一緒に、窟を洗浄するという理由で全て取り除かれてしまったようである（J.Fergusson & J.Burgess（1969）：230-231）。

第 11 窟　ヴィハーラ窟（Fig. 26-39）

第 11 窟は、西インドで唯一の馬蹄形プランのヴィハーラ窟である。天井もヴォールト状になっていて、チャイティヤ窟と形状が非常に類似しているが、以下の 2 点がチャイティヤ窟と大きく異なっている。一つは、ヴォールトの曲率がチャイティヤ窟ほど強くないことである。身廊と側廊の区別のないこの石窟では、側廊より一段高く幅が狭くなる身廊の曲率を、石窟全体に用いることは合理性に欠けていたのかもしれない。もう一つは輪垂木を用いた痕跡がなく、天井画も確認できないことである。どのような理由で、チャイティヤ窟に類似した平面、断面形状でヴィハーラ窟を造営したのは定かではないが、礼拝空間であるチャイティヤ窟とは、用途が異なるため、居住のためには必要以上に高い天井高は必要なかったこと、礼拝空間と同じ天井装飾は用いることができなかったことが考えられる。

この馬蹄形プランの広間を 13 の僧房が囲んでいる。ファサードは崩落しているが、木造ファサードの痕跡がみられる。木造の壁の痕跡が 2 重にみられることから、正面廊のあるファサードの構成をうかがうことができる。一番外側の僧房と 2 列目の僧房の間には、上部のみにみられる覆い状の木造部材の痕跡がみられる。2 列目と 3 列目の間には、壁を構成していた木造部材の痕跡がみられる。一番外側が前室僧房、2 列目が正面廊僧坊、3 列目以降が広間の僧房と見ることができる。

ヴィハーラ窟前庭右側手前に貯水槽が設けられているため、前庭右僧房は僧房の幅が狭く寝台も側壁ではなく後壁に造られている。また前庭左僧房（CL）は、岩塊の状況からかセットバックして開窟されている。さらに正面廊僧坊（PL）も十分な幅が得られなかったためか縦長もプロポーションとなっている。特に正面廊左僧房は、石窟内部の壁面とは傾いて開窟されている。このため、第 10 窟と CL, PL, L1 の付近は混雑しており、CL と第 10 窟、CL と PL との間にそれぞれ貫通孔がある。広間の僧房は特に、馬蹄形になって角度のついている奥の僧房で、相互の距離に余裕がみられる。

石窟側壁をみると、奥に行くにしたがって広がっている。初期石窟にみられる特徴で、建築的に初期の未発達の開窟技術の痕跡を示すものである。ヴォールト天井の下の側壁の装飾は、僧房扉口の装飾としてチャイティヤ窓より上のエンタブラチュアとさらに下の壁面というように分けてみることができる。エンタブラチュアは、天井と壁面より一段迫り出している。エンタブラチュアの最下層は垂木尻の上に欄干のモチーフが連続し、僧房の扉口の上だけチャイティヤ窓の装飾で中断されている。最上層は、最下層より細かい欄干がめぐっている。欄干の間は平坦な壁がめぐっている。僧房の扉口は、チャイティヤ窓のモチーフの下に扉枠を設け、チャイティヤ窓の外側に付柱を設けている。隣の僧房の付柱との間に格子窓を設けているが、これは偽窓である。付柱、格子窓はそれぞれの僧房ごとにデザインが異なっている。

壁の最下部に着目すると、左壁にのみ雑巾摺がみられる（Fig. 37, 38）。石窟最深部の L5 付近でなだらかに雑巾摺の高さが減じて、段差が解消し雑巾摺のない右壁との矛盾を解決している。

左壁第 3 僧房（L3）を例に僧房内部をみると、扉口上部に扉を開閉する回転軸を支えた木材を嵌め込んだ痕跡があり、内開きの扉が取り付けられていたことがわかる（Fig. 34）。中央の床をはさんで左右に寝台が彫り出されている（Fig. 29）。この寝台には側面はもとより天板にも、宝物に類したものか、儀式に用いたものか分からないが、収納のためになされた工夫が見受けられる（Fig. 36）。

最深部の僧房（L5）の扉口には、扉枠の左側にヒンドゥー教の女神像を置くニッチが設けられている。女神像が黒く変色し、所々原色の色粉がつけられており、現在でも燈火と香油によるプージャ（礼拝）が行われていることが分かる。またニッチの左側には燭台があってこちらも煤けている。これらの像や燭台は当初のものかどうかは分からない。

4. クダー石窟（Fig. 40-91）

グダー石窟群は、ムンバイの南、直線距離で 100km 程のところにあるラージャプーリー湾を望むなだらか

な丘の西面に開窟されている、どこまで細かく数えるかによって異なるが、大小合わせて 20 以上の石窟が存在する。後述の第 6 窟を除いては彫像がなく、ほとんどの石窟は建築装師もないため、早くからその存在を知られていたにもかかわらず、脚光を浴びることは少なかった。一般的に用いられている石窟番号を用いると、第 1 窟から 14 窟までが北から南に向かってほぼ同じ高さに連続して開窟されており、第 15 窟が第 14 窟から 50m 程南に、そして残りの石窟は第 15 窟の上の階段を上った所に開窟されている。これらの石窟のうち、チャイティヤ窟が第 1, 6 ,9, 15 窟の計 4 窟、その他はほぼ同じ形式で大きさの異なるヴィハーラ窟である。

第 1 窟（Fig. 43, 46-50）

ラージャブーリー湾を望む丘の西側に沿って登っていくと最初にあるのがこの石窟である。石窟は正面廊と広間、その奥に祠堂前室とストゥーパをまつる祠堂が一列に配置されている。正面廊左に僧房があって、扉を取り付けた痕跡のある扉口の上に刻文が刻まれている。正面廊の柱は柱頭、柱礎に装飾のない 8 角柱で、両端にピラスターを置く。このピラスターは、いわゆる砂時計型（hourglass pattern）といわれるもので、ピラスターの上端に下に張り出した半円形、中央部に上に張り出した半円形が彫り込まれている。これはナーシクなどに見られる蓮華を象った蓮華柱の輪郭のみが描かれた簡略形であろうと考えられている。広間の扉口は大きく開き、扉を取り付けた痕跡はない。柱のない平天井の広間には壁際にもベンチは設けられていない。広間と祠堂前室は 2 本の 8 角柱と、砂時計型のピラスターで隔てられており、これらは低いプラットフォームに載る。左側の柱は床、天井に接する部分のみが残る。前室の左右奥壁にはベンチが設けられている。前室の柱間とほぼ同じ幅の大きな開口部を持つ祠堂はほぼ正方形であるが、奥に行くに従って幅が広がっている。また祠堂前室よりも一段床が高く、平天井も高くなっている。ストゥーパは祠堂の中央奥に掘り出され、ハーミカーは天井に達する。アンダは扁平の卵形で、基壇に載っている。

第 2 窟（Fig. 43, 51）

第 1 窟の右側にあるこの石窟は、正面廊とその奥の僧坊で構成されている小規模なヴィハーラ窟である。寝台が正面廊と奥の僧坊にそれぞれ一つずつ設けられている。正面廊には左側に大きな開口部と右側に入口がある。第 1 窟に非常に近い位置に開窟されているため正面廊の寝台が第1窟の前庭との間に貫通孔がある。

第 3 窟（Fig. 43, 52-55）

第 2 窟同様、正面廊とその奥の僧坊で構成されている小規模なヴィハーラ窟である。正面廊中央よりやや右に幅の狭い入口があり、両側に窓が設けられている。この入口に扉の痕跡はない。右側の窓の外の側壁にはストゥーパの浮き彫り装飾がある。正面廊右にはニッチが設けられているが柱形などの装飾浮き彫りはない。奥の僧坊には左側にニッチが設けられており、寝台として用いられていたことは想像に難くない。

ヴィハーラ窟は、概して無装飾で、前庭の奥に正面廊を介して、さらにその奥に僧坊を設けるものがほとんどである。正面廊は右側に入口、左側に窓を設けるものが多く、正面廊入口には第 16 窟から 19 窟に扉を取り付けた痕跡がみられるが、その他にはない。しかし、僧坊入口には必ず扉が取り付けられた痕跡が残っており、僧坊の左右奥壁のいずれかには修行僧の寝台として用いられたと考えられるニッチが設けられている。クダー石窟の寝台は、ベドゥサー、アジャンター前期窟などその他の石窟の寝台と比べると高い位置に設けられている。

第 4 窟（Fig. 56-60）

正面廊と比較的広い広間で構成されている。前庭と正面廊は二本の八角柱と、両端の砂時計型ピラスターで隔てられ、中央から階段で入る。柱とピラスターの間には外側に欄干があって、正面廊側はベンチとなっている。正面廊奥壁は中央に肩口、左右にそれぞれ大きな窓を持つ。中央の扉口に扉を付けた痕跡はない、広間の左右奥壁にベンチが設けられている。奥壁は平坦ではなく、開窟が放棄された祠堂前室とするための列柱と考えられる痕跡が残る。石窟の規模と左右の壁に僧房がないことを考え合わせると、チャイティヤ窟の開窟を意図していたものではないかと考えられる。

第 5 窟（Fig. 43, 44, 61-63）

第 4 窟に近接したこの石窟は、クダー石窟群の小規模なヴィハーラ窟の中では際だって複雑な平面を呈している。広い前庭の左には貯水槽が設けられており、正面廊のファサードは倒壊しているが、2 本の矩形断面の柱のうち右側が残る。敷居を超えた正面廊は横長

のホールになっていて右壁に寝台状の壁龕が設けられている。この奥にはさらに一段高い廊が左右に設けられ、それぞれ僧坊につながっている。左側は解放された廊で、右側に壁龕があり、正面右側の扉の痕跡残る入口を入ると正面に寝台と左側にもう一つの僧坊への入口があり、奥の僧坊にも寝台が設けられている。右側は、小さな前室状の廊で、奥に奥壁に寝台状の壁龕のある僧坊が設けられている。

第 6 窟（Fig. 44, 64-74）

クダーで唯一彫像の残るチャイティヤ窟で最も規模が大きい。クダーの他のチャイティヤ同様、正面廊、広間、前室、祠堂で構成されているが、正面廊ではなく祠堂前室の左壁に僧房が穿たれている。正面廊中央には階段があって、その脇には四角形断面の柱礎を持ち柱頭のない八角柱かおる。八角柱と壁際にある四角形断面のピラスターとの間には欄干のレリーフかおり、正面廊側はベンチになっている。ピラスターには後世に彫られた仏像のレリーフがある。正面廊に房室は設けられていないが、左壁上部に刻文が刻まれている。

奥壁には中央に大きな肩口とその左右にほぼ正方形の窓が設けられている。ほぼ正方形の広間には左右奥壁にベンチが設けられている。左右側壁の後部には後世に彫られた仏像がレリーフされている。奥壁は中央に両側に八角柱のある階段のついた大きな開口部があり、柱と砂時計型のピラスターの間には像のレリーフのある欄干か設けられている。ピラスターの外側には、男女のほぼ等身大の像があるが、左右の壁の奥を彫り込んで彫像の領域が確保されている。

祠堂前室には左壁に房室が開窟されている。房室の右側にはベッドが掘り出されていてその奥にニッチが設けられている。縦長の祠堂の奥の方にストゥーパがあって、その前に柱を立てて、梁を支えた痕跡が残る。

おそらく祠堂の開口部が広いため、ストゥーパを聖化するための幕が張られたものではないかと推察される。

第 7 窟（Fig. 44）

この窟は、第 6 窟に非常に近接しているが、1.5m 程床が高い位置に開窟されている。小さな前庭の奥にある正面廊のファサードは 2 本の八角柱と両端の付柱で区切られているが、階段が中央ではなく左端の付柱と左柱の間に設けられている。付柱には砂時計形の装飾がみられる。その他の柱間はカクシャーサナ（背もたれ付きベンチ）が付けられている。正面廊には右壁に寝台が設けられ、寝台の前に奥の僧坊への入口が開いている。僧坊には左壁に寝台が設けられている。

第 8 窟（Fig.44）

正面廊とその奥の僧坊で構成された石窟であるが、正面廊のファサードは倒壊している。正面廊右壁にニッチが設けられ、さらに奥壁に扉口の痕跡のある入口の奥の僧坊にもう壁にニッチが設けられている。この石窟は、外側の岩の角度にしたがって、両側の第 7, 9 窟より左に傾いて開窟されている。

第 9 窟（Fig.44, 74-77）

正面廊と祠堂のみで構成されたチャイティヤ窟で、他のチャイティヤ窟より規模が小さい。前庭はなく、他の石窟よりも 5m 程高いところに開宴され、当初は階段がついていた。正面廊の柱は八角柱で柱礎に壷飾り、柱頭にベル形の装飾があるが、ピラスターは八角柱で柱礎にも柱頭にも装飾はない。正面廊左壁には、その前面が崩壊しているが僧房が穿たれており、右壁上部には刻文が残る。祠堂は奥行きの長い長方形平面で、後方にストゥーパがある。

第 10 窟（Fig. 44, 78）

この石窟は、正面廊とその奥の僧坊で構成されている。正面廊のファサードは倒壊しているが、右側の入口と左側の大きな開口部の痕跡はうかがうことができる。正面廊にはニッチはない。扉の痕跡のある入口の奥には、奥壁に寝台のある僧坊がある。

第 11 窟（Fig. 44, 79）

もともとこの石窟は奥壁に寝台のある僧坊とその手前の正面廊で構成されていたが、正面廊は右壁にあるニッチを残してほぼ倒壊している。正面廊は右側に入口、左側に開口部の痕跡がみられる。

第 12 窟（Fig. 44, 79）

この石窟は、ファサードが倒壊しているが、薄い壁で隔てられた 2 つの室で構成されている。左側にある幅の広く奥行きの浅い石窟が 12 窟 a は、クダーでは唯一の平面形で、僧坊として用いられたとは考えられない。集会等の目的に用いられていたと考えられている、カンヘリー、エローラなどにみられる横長平面の石窟との関連性があるかもしれない。この右隣にある 12 窟 b は、クダーに典型的なヴィハーラ窟の平面を

呈している。右壁にニッチのある小さな正面廊の奥に、右側に開口部左側に入口のある僧坊が続き、僧坊の奥壁にニッチが設けられている。

第 13 窟（Fig. 44, 79）

この石窟は、正面廊とその奥の僧坊で構成される。正面廊のファサードは倒壊しているが、右壁にニッチを持つ。僧坊にもう壁にニッチが設けられている。

第 14 窟（Fig. 44, 79）

この石窟は、第 13 窟と隣り合って非常に近接しているばかりか、窟の構成まで非常に類似している。

第 15 窟（Fig. 45, 80-81）

第 14 窟から、50 m程離れ、6 m程上ったところにある第 15 窟は、正面廊と祠堂で構成されるチャイティヤ窟で、正面廊の左右に僧房が設けられている。これらの僧房には奥にそれぞれベッドとして用いられたと思われるニッチが設けられており、扉を取り付けえた痕跡がある。正面廊には 4 本の八角柱があって、柱列の両端には砂時計型のピラスターがある。

祠堂入口には広く開けられており、扉を取り付けた痕跡はない。祠堂は平天井で奥行きの深い長方形平面であり、奥にストゥーパが設けられている。

第 16 窟（Fig. 45, 82-84）

第 15 窟の前で折り返してさらに 6 m程上り、第 14 窟と第 15 窟の中間に第 16 窟から 19 窟までの小さなヴィハーラ窟が一列に並んでいる。第 1 窟から 14 窟までの石窟と比べると、開窟された岩盤の傾斜が緩やかなので、内部空間に必要な高さを得るために、広い前庭が設けられている。前庭の隔壁を隔てた左側には貯水槽がある。前庭の奥には右側に入口と左側に小さな開口部を持った正面廊があり、この左壁にはニッチが設けられている。第 2 窟から 14 窟までの僧坊窟と異なり、正面廊の入口にも扉の痕跡がみられる。正面廊奥壁右寄りに扉の痕跡のある入口の奥にある僧坊は、左壁に寝台が設けられている。

第 17 窟（Fig. 45, 84-86）

第 16 窟の右側にある 17 窟は、これとほぼ同じ形式のヴィハーラ窟であるが、正面廊の窓が大きく設けられている。また僧坊奥壁のニッチには、小壁が設けられている。このニッチにはおそらく赤土を原料とする赤色のプラスターが残っている。

第 18 窟（Fig. 45, 87-88）

ヴィハーラ窟の構成は他の石窟と同様であるが、この石窟は正面廊の中央に入口を設けその両側に大きな開口部を配している。正面廊には左壁にニッチがあるが、第 17 窟との間に貫通孔が開いている。正面廊奥壁には扉の痕跡のある入口とその左側に小さな開口部の痕跡がある。入口を入ると、奥壁にニッチを持つ僧坊に至る。

第 19 窟（Fig. 45, 89-91）

奥行きのある前庭の奥に、右側に入口、左側に大きな開口部を持つ正面廊がある。正面廊にニッチはない。奥壁右側には、僧坊に通じる入口があるが、左側には扉がなく廊下状に曲がった先にニッチが設けられている。

第 20 窟から 26 窟

第 19 窟から 50 m程離れた山中に第 20 窟が、さらに 30 m程斜面を登ったところに第 21 窟から第 26 窟がある。器材の運搬等に支障を来すため、調査対象には含めなかった。

5. アジャンター石窟（Fig. 91-150）

アジャンター石窟は、インド中部、マハラーシュトラ州のデカン高原の北端に位置している。数十メートルの高さに隆起するガートを南から下ったその先に、街道から西にはずれた山中に隠れるように開窟されている。

古代、仏教が栄えた頃のインドには数多く見ることのできたであろう仏教寺院、僧院、ストゥーパ（仏塔）は、そのほとんどが失われてしまったのに対し、石窟寺院はその立地と材質の特殊性のために多くが現存している。アジャンター石窟寺院は主要街道に近く、そこから少し離れた場所に立地した仏教僧の修業の場だった。仏教が衰退し、一旦放棄されると深いジャングルに覆われた。土着の民か、ヒンドゥー教の修行僧が住み着いたり、エローラ石窟のように近世になってイスラム軍隊が駐屯し、改変と彫像の破壊が為された石窟もあるが、多くはそのまま放置された。また木造やレンガ造に比べ、残りのよい石造の構造物の中でも、岩盤の中に内部空間だけを穿った建築である石窟寺院は、風雪にさらされて摩滅することも少ない。アジャ

ンターのある地域の岩質は、比較的堅く、かといって彫刻が出来ないほど堅くない玄武岩（火山岩の一種）であるため、内部空間はほとんど摩滅がないばかりか、テンペラ画系統の画法で描かれた壁画も多数残っている。アジャンターは 5 世紀の壁画を有するインド唯一の遺跡であるため、壁画に関心が集中しがちであるが、壁画の他にも、彫刻をはじめとした美術的遺産、また建築装飾も多く残されており総合的に考察する必要がある遺跡である。

アジャンター石窟寺院群は 1819 年 4 月 28 日、虎狩りに来ていた英国の騎兵隊員ジョン・スミスによって発見され、世界の注目を集めるようになると石窟の実測、壁画の模写などが開始された。現在は、インド考古学、建築、美術の最も重要な遺跡のひとつと位置づけられ、調査研究が続くとともに、1983 年には世界遺産にも登録された（Fig. 92, 93）。

30 を越える石窟は、ワゴーラー川が大地を浸食して出来た馬蹄形の断崖の南に面した壁面を中心に穿たれている。石窟群は、紀元前後に開窟されたと考えられる前期石窟と、数世紀の間隙を経て開窟された、5 世紀後半の後期石窟に分けられる。前期石窟（第 9、10、12、13A、15A）は、石窟群の中央部にほぼ南面しており、最も低く河床に近いところつまり開窟や開窟後の生活に最も適したところに開窟されている。これらはサータヴァーハナ朝の庇護を受けて開窟された。サータヴァーハナ朝はローマ帝国との海上貿易で知られるインド南東部アーンドラ地方の王朝で、豊富な資金を得た商業階級が、身分差別のない仏教を支援していた様子が窺える。

後期石窟はヴァーカータカ朝に関係のある施主によって開窟されたと考えられている。ヴァーカータカ朝は古代インドの建築、美術、文学を含めた総合芸術を開花させたグプタ朝と婚姻関係にあった王朝で、アジャンターにもグプタ芸術が色濃く残されている。ただしヴァーカータカ朝の中心地はアジャンターの東方、ラームテークであり、中心地の芸術作品と比べると、アジャンター芸術は地方芸術の感がぬぐえない。

石窟寺院はストゥーパ（仏塔）を祀るチャイティヤ（祠堂）窟と、ヴィハーラ（僧院）窟に大別される。チャイティヤ窟は、馬蹄形の壁面もしくは列柱に囲われた空間の奥に、ストゥーパを安置する。ストゥーパはもともと釈迦の遺骨を安置したものであるが、石窟のストゥーパは形態を写したもので、実際に釈迦の遺骨は発見されていない。ヴィハーラ窟はほぼ正方形の広間の左、右、後壁に、修行僧の住居である小さな房室（僧房）を設けた石窟である。前期窟は、広間の周りに簡素な装飾を施された僧房のみが設けられている。後期窟では、後壁中央にストゥーパもしくは仏像が安置され、華やかに荘厳されている。これは修行僧のための房室と置き変わる形で設けられたものである。これに伴い崇拝物を飾るための世俗習慣としての彫刻や壁画も導入され装飾的空間へと変化していった。アジャンターの場合、第 9、10、19、26、29 窟がチャイティヤ窟で、残りがヴィハーラ窟である。

今回の調査では、馬蹄形の渓谷に沿って開窟された石窟群のうち、西側に位置する第 21 窟から 26 窟複合体を調査対象とした。これらの石窟をアジャンターの西にあることから西群と呼ぶことがある。これら西群の石窟群は 5 世紀後半にヴァーカータカ朝の下で開窟されたもので、第 26 チャイティヤ（祠堂）窟の他は全てヴィハーラ（僧房）窟である。これらの石窟は全て未完成であるが、ほぼ完成し、信仰を集めていたと考えられる第 26 窟から、内部空間はほとんど前廊を除いて床が全く整えられておらず、仏殿も開いていない 24 窟まで、その完成度には差がある。主に正面廊、前廊に着目して記述する（Fig. 94-97）。

第 21 窟（Fig. 102-107）

第 21 窟は、西群の一番北にある石窟で、前庭には右側に貯水槽がある。正面廊は 4 本の柱で支えられた構造だが柱は全て 20 世紀の修復である。正面廊奥壁には中央に広間につながる扉口と左右に正方形の窓を持つ。左右端部はそれぞれ二本の柱で区切られた前室を持つ二重僧房がある。

広間は 12 本の柱とそれにつながる梁形と敷居によって前廊、左右廊、後廊、広間に分割されている。左廊と右廊には 5 つの僧房が開いているが、中央の僧房のみに前室が設けられている。後廊には中央に前室付きの仏殿の他、左右に前室付き僧房が配置されているが、左の前室には僧房が 2 室設けられる。

仏殿の入口装飾にアーチ状の枠があるが、彫刻装飾はない。仏殿内部には坐仏三尊像が安置されているが、右側の菩薩像は、上半身しか彫刻されていない。
左廊第 4 僧房上部に椅坐仏三尊像の壁画がある。その反対側の右廊第 4 僧房の上部にはモルタルで仕上げられた壁面はあるが壁画は描かれていない。

第 23 窟（Fig. 108-114）

第 23 窟は、第 21 窟とほぼ同じ構成であるが、貯水槽が前庭右側ではなく左側にあること、右廊と左廊の前室付き僧房のないこと、後廊の前室付き僧房が左右とも僧房が 1 室である点が異なる。また仏殿は完成しているわけではなく扉口はまだ整形されておらず、扉口の装飾もみられない。さらに仏像は全く掘り出された形跡がない。石窟内に漆喰を塗った壁面はなく、一部成形されているに過ぎない。

正面廊は、4 本の柱で構成され、左右両端部に前室付き僧房がある。

第 21 窟と第 23 窟の正面廊の位置関係（Fig. 95-101）

ほぼ同じ規模の第 21 窟、23 窟と、これらより一回り大きい第 24 窟は全てヴィハーラ窟で、もともと前庭で互いに往来可能であったが、第 24 窟前庭が他よりも約 70cm 高い。第 21 窟と 23 窟の間には、一段高くなったところに、第 23 窟前庭につながる階段からアプローチする小さな石窟、第 22 窟がある。第 24 窟の左側には、この水平面から下がって第 26 窟の前庭がある。

第 21 窟の正面廊には、左右にほぼ同じ規模の前室付き僧房が設けられている。右側の僧房は前室の幅が 3,140mm、奥行が 3,092mm、奥室は幅 3,146mm、奥行 2,961mm のほぼ正方形である。これに対し左側は前室（幅 3,165mm、奥行き 2,645mm）、奥室（幅 3,164mm、奥行 2,650mm）ともに奥行きが小さい。

第 23 窟の正面廊にも左右にそれぞれ列柱付前室が設けられ、左側には奥に僧房がつけられているが、右側は房室の扉口とその奥のごく一部が粗削りされているに過ぎず、奥壁中央には第 21 窟正面廊左房室との間に貫通孔が開いている。まさに房室の掘削が始まった時点で中断されているのである。前庭右には幅 2,718mm に渡って垂直の壁がある。また前庭左側には放置された岩盤が残るが、現在の前庭左壁との間の距離は、3,095mm である。この垂直壁は、開窟の初期の段階で正面廊として計画された痕跡であると考えられる。換言すると、第 23 窟は現在よりも右側に計画されていたが、貫通孔の開いている第 21 窟正面廊左僧房及び 23 窟の正面廊右僧房が前室付き僧房に計画変更されたことにより、現在の位置に開窟されたと見ることができるのである。

第 24 窟（Fig. 115-122）

第 21、23 窟は石窟内の右壁、左壁にそれぞれ 5 つの僧房を設けるよう計画された石窟であるが、第 24 窟はこれらよりも大きくそれぞれ 7 つの僧房を設けるように計画されたことがわかる。ただし完成度は高くなく、前廊の床が両端を除いてほぼ整えられているのみで、その他の廊と広間は手つかずの岩塊が多く残っている。

第 24 窟正面廊は、内部に比べてほぼ完成に近い完成度を示す。6 本の列柱で支えられた正面廊の奥壁には中央の主扉口のほかに左右端にそれぞれ扉口が設けられ、仏立像を中心とした扉口装飾がなされているこれらの扉口の間には正方形の窓が設けられている。正面廊の左右端には、前室付きの僧房が設けられている。柱はおおよそ削り出されているが、エンタブラチュアの彫刻装飾は彫り込まれていない。

第 24 窟前庭には、左壁に貯水槽が設けられている。右壁には、前室付き小祠堂第 24A 窟がある。第 24A 窟は 3 尊形式の仏椅坐像を本尊とする小祠堂で、祠堂の左右壁および前室左右壁にも仏立像があって、全部で 6 体の仏立像が本尊の両側に設けられている。アジャンターでは最も後期の仏像の形式であるとされる。

第 24 窟は正面廊左右に前室付き僧房が設けられているが、第 21 窟及び 23 窟の間のような問題はない。第 21 窟正面廊左端の付柱と第 23 窟正面廊右端の付柱の間隔は 11,464mm であるが、第 23 窟正面廊左端と第 24 窟正面廊右端の付柱の間隔は 15,207mm である。前述のように前庭左に設けられた第 24A 窟は第 25 窟前庭の下に穿たれており、これと同様に正面廊僧房も第 25 窟の下に開窟されている。

第 25 窟（Fig. 131-136）

第 25 窟は、主窟であるチャイティヤ窟の右上方に位置する未完の石窟である。前庭と正面廊、それから僧房のない広間で構成されている。前庭へは、第 24 窟前庭から細い階段でアプローチする。この前庭は、他の石窟と異なり、岩塊の表面から中に彫り込まれている。あたかも天井のある前庭になっているのである。この前庭の右壁には、基壇のような台とその奥に一段彫り込まれたニッチが設けられている。

単純な八角柱 2 本で構成される正面廊は、前庭から一段上がったところにある。この正面廊には左側に空間が廊下状に拡張されている。その先に房室が 2 室設けられている。左右非対称であり、廊下状の空間の奥

に設けられた未完の房室 25PLb は、第 26 チャイティヤ窟との間に貫通孔がある。また 25PLa も未完であり、これらの房室は、当初から計画されたものだとは考えられない。

第 26 窟（Fig. 137-145）

第 26 窟の正面廊は 4 本の柱で構成されている。正面廊左端には、前室付き僧房があるが、僧房が前室の奥にあるのではなく、右壁に設けられている。右端には奥壁と左壁に 1 つずつ計 2 つの僧房が設けられている。正面廊奥壁には中央の主入口の他に左右に 1 つずつ入口があり、右入口の上部にチャイティヤ窟造営に関わる刻文が刻まれている。ファサードは、庇の下には目立った装飾はないが、庇の上には中央に大きなチャイティヤ窓があって、その両脇のニッチに小さなクベーラの像が、その外側の大きなニッチに仏立像が置かれている。その上部には二層の壁龕の中に仏坐像のレリーフが供養者、踊り子などをともなって描かれている。

石窟内部には、28 本の柱があって中央にストゥーパが置かれる。柱は左右それぞれ 14 本ずつ配置されるが、柱は大きく三種類に分けられる。1 つは中央入口脇にある正方形断面の柱で、上部に女身像の持ち送りがある。身廊のストゥーパ横までの 10 本の柱は、8 角形、16 角形、32 角形、円形断面を組み合わせた複雑な柱である。ストゥーパ横から後にかけては単純な 8 角形断面の柱となる。この柱の上部のエンタブラチュアには、仏龕を並べた装飾がみられる。個々の仏龕を枠取りする祠堂建築は複雑で、壁龕の基壇、柱、持ち送りの様式が仏龕ごとに異なっている。天井には輪垂木が石で掘り出され、格天井を組むように描かれた格子の中に様々な文様が描かれる。

左廊の彫刻には、釈迦涅槃像は涅槃像としてはインド最大の規模を持つ。顔面は一部修復されているが、ほぼ造営当時の様相を示す。寝台の下には背を向けた弟子達の姿を、寝台の側に沙羅双樹、上空には飛天の姿を描く。上部の飛天の中には漆喰に描画されただけのもの、沙羅双樹には緑色の顔料が残る。

この涅槃像の奥には降魔成道の場面を描いたパネルがあるが、この他は仏像がしめる。右廊には等身大以上の仏像が、等間隔で並ぶが、礼拝のための彫像としての性格が強く、3 尊形式で説法印を結ぶ椅坐像が多い。側廊は奥に行くにしたがって、彫像の大きさなどがまちまちになり、統一感に欠けるようになる。

石窟の全体像について左右のプログラムと建築ディテールをみると、柱の上部で差異が見られる（Fig. 140, 141, 142）。左廊側では、柱頭持ち送りの上に台輪をおいて、一段段差をつけたような形状となっているが、右廊側では柱頭から直接側廊の平天井につながっている。この矛盾は後廊で露見するが、左右の廊で、なるべく目立たないように調整しているのがわかる。ベドゥサー第 7 窟、第 11 窟でもみられたことであるが、左右のプログラムは同じでも、建築的詳細が異なっている。異なる地方出身、また異なる伝統を受け継いだ技術者集団が同時に石窟の造営に従事していたことが想定される。

第 26 窟右翼（Fig. 137）

第 26 チャイティヤ窟の右側に、開窟されているこの石窟は、広間の天井まで倒壊しているが、正面廊と広間で構成される石窟として計画されたものと考えられる。現状は、26 窟と共有する前庭から階段で僧房のない正面廊にアプローチする。階段を上った框の左壁、正面廊左壁には彫像が彫られている。框の左壁は 2 段に分けられていて、上段に仏立像、下段に八難救済観音菩薩像が彫られている。正面廊左壁には仏三尊像の立像がある。正面廊奥壁の装飾の痕跡のある扉口を広間に入ると左壁奥と右壁手前に僧房がある。左壁奥の僧坊 L1 は扉を取り付けた痕跡が残っている。またこの僧坊は通常の僧房と異なり、広間より一段低く造られている。この僧坊には扉口と反対側にニッチが設けられている。左壁中央には三尊形式の仏椅坐像のレリーフがあり、左壁手前には、枕を彫りだし、脚を彫りだした寝台状のニッチが設けられている。

後壁、右壁奥には僧坊は設けられていないが、右壁手前の僧房 R1 は扉口の前に一段踏み段が設けられ広間より高い位置に床が設けられている。現在は床の 2/3 を残して倒壊している。この石窟には正面廊の右側に石窟外からアプローチする貯水槽が設けられている。したがって正面廊僧坊は当初は設ける計画がなかったものと考えるのが妥当である。

第 26 窟左翼（Fig. 146-147）

第 26 チャイティヤ窟の左側の階段を上った所に開窟されているこの石窟は、正面廊、広間、前室付き仏殿が一直線上に設けられ、正面廊、広間の右側に僧房が残る。第 26 右翼と比べ幅の広い框を過ぎて、2 本の柱の痕跡のある正面廊に至る。広い框の右側には建

立とは異なる時代と考えられる刻文が刻まれている。正面廊には右端に前室付き僧房が設けられている。正面廊奥壁派左半分が倒壊しているが、右側には小さな正方形の窓が設けられている。中央には半円状の床装飾であるチャンドラシラーが付いた装飾された扉口があって、幅は広くないが、内側の痕跡から両開きであることがわかる。左壁は倒壊しているが、右壁には3つの僧房があって中央の僧房のみ前室が設けられている。後壁には前室部分が張り出した前室付き仏殿がある。仏殿には3尊形式の仏椅坐像が安置されているが、扉の左半分より上は修復されたものである。前室の両脇は細い通路状になっていて、それぞれ一つずつの僧房が設けられている。

第27窟（Fig. 148-150）

第26窟左翼の上部にある第27窟は、現在広間と奥壁に4つの僧房、右壁中央に未完の前室状の室とその両脇に一つずつの僧房、正面廊右僧坊で構成されている。第26窟前庭より勾配の強い階段などで、正面廊にアプローチしたものであろう。広間の左側1/4ほどが倒壊し、正面廊もない。僧房は正面廊右僧坊を除いて全て未完で、後廊左側の二つの僧房は壁が倒壊している。

正面廊右端にある前室付き僧房は、僧房奥壁にニッチと天井に同心円状の天井画の痕跡がある。この天井画には中央に金具を指した痕跡があるので、アジャンターの他の石窟と同様に花綱を掛けて礼拝のために用いたものではないかと考えられる。その場合奥壁のニッチに礼拝のための彫像などをおいた可能性がある。

第26窟複合体（第25窟、26窟右翼、26窟左翼、27窟）と第24A窟の関連性について（Fig. 123-150）

アジャンター第26窟はチャイティヤ窟を中心にして、その左右にヴィハーラ窟を上下二層に配置している複合窟であると考えるのが妥当である。つまり5つの石窟によって、中央に礼拝のための祠堂とその左右に上下二層のヴィハーラ窟で構成される修道施設と見なすことができる。中央の祠堂窟を第26チャイティヤ窟、下層のヴィハーラ窟をそれぞれに第26窟右翼、第26窟左翼、上層にあるヴィハーラ窟は右側を第25窟、左側を第27窟と呼ぶ。この複合窟の正面廊僧房は、第26チャイティヤ窟には左右にそれぞれ前室付き僧房が設けられている。正面廊左僧房には前室の右側にのみ僧房が設けられているが、右側は前室の左側と奥にそれぞれ僧房が設けられている。

第26窟右翼には正面廊僧房はなく、正面廊の右側には貯水槽が設けられている。また石窟広間の僧房も右壁前部と左壁後部にそれぞれ1室ずつ設けられているに過ぎない。第26窟左翼は、石窟の左側が崩落しているので僧房の状態は不明であるが、正面廊右側には前室付き僧房が設けられている。

これらの配置を見ると、前庭に面して第26窟と左翼、右翼の正面廊が設けられ、それぞれの中央に階段が取りつけられている。第26窟右翼は第26チャイティヤ窟正面廊の右のピラスター付近に上がり框状の幅の狭い踏み段を取ってすぐに列柱のある正面廊が続いている。ところが左翼はこの上がり框状の踏み段の幅が広く、左翼の正面廊は、右翼に比べて2mほどセットバックしている。これらの位置から、第26窟右翼が計画され、正面廊が掘削されていた時点では、正面廊僧房は計画にはなかったことが分かる。つまり、第26チャイティヤ窟の正面廊右僧房前室が、第26窟右翼の正面廊左僧房のあるべきところに存在しているのである。第26チャイティヤ窟と第26窟左翼を見ると、第26窟左翼の上がり框がセットバックしているため、第26チャイティヤ窟の正面廊左僧房前室と、26窟左翼の正面廊右僧房前室の両方を設けることができるのである。

次に上階の正面廊を見ると、第27窟は渓谷側が崩落しており、アプローチすら明らかでないが、第26窟左翼の正面廊僧房と同じ位置に列柱の柱礎の痕跡が見られるため、こちら側に正面廊が設けられていたものと推測できる。

第25窟は、第27窟よりも断崖から奥まったところに前庭が開窟され、正面廊は奥まった岩肌の中にある。正面廊右には僧房はないが、左側には変則的な前室の奥と右側に開窟と中の僧房が設けられている。奥の僧房は、第26窟チャイティヤ窟のヴォールト天井との間に貫通孔が開いている。

また通常は広間よりも高い位置に僧房の床が設けられるが、第26窟右翼の左壁の僧房は床が広間よりも低い。これは直上に第24窟前庭左側に設けられた第24A窟と呼ばれる小祠堂があるためで、この小祠堂内部は前庭よりも床が高い。この小祠堂の上には第25窟の前庭があって、前庭の右側壁際に基壇が設けられている。つまり、第26窟右翼左壁僧房の上に第24A窟、その上に第25窟前庭が積み重なっているのである。

参考文献

Alexander, James Edward, "Notice of a visit to the Cave Temples of Adjunta in the East lndies," *Traansactions of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 2(1880), pp. 362-70.

Bakker, Hans, The Vâkâþakas：An Essay in Hindu Iconology, Egbert Forsten, Groningen, 1997.

Begley, Wayne Edison, *The Chronology of Mahayana Buddhist Architecture and Painting at Ajanta*, Ann Arbor：University Microfilms, 1966.

Behl, B.K., *The Ajanta Caves*, *Paintings of Ancient Buddhist India*, *London*, 1998.

Bhattacharyya, Gouiswar, "*Buddha Sakyamuni under the Mango Tree*." *Oriental Art* 36. n0.1(1990).

Brown, Percy, *Indian Architecture Buddhist and Hindu Periods*, Bombay, 1965, 5th edn.

Burgess, James, *Memorandaum on the Buddhist Cave Temples at Junnar*, Archaeological Survey of lndia, Bombay, 1874.

Notes on the Buddhist Rock-Temples of Ajanta, *their Paintings and Sculptures*, *and on the Paintings of the Bagh Caves*, *Modern Buddha Mythology*, &c, Archaeologica1 Survey of Western India No.9, Bombay：Government Centra1 Press, 1879.

Caves of Elura and other Brahmanical and Jaina Caves in Western India, *Archaeological Survey of Western India*, vol.V, London, 1883

Report on the Buddhist Cave Temples and their Inscriptions, Archaeological Survey of Western India, vol. IV, Varanasi：Bharatiya Publishing House, 1975.

"The Ajanta Caves", *Indian Antiquary*. 3 (1874)：pp. 269-274.

Burgess, James and lndraji, Bhagwanlal, Inscriptions from the Cave Temples of Western India, *Archaeological Survey of Western India*, vol.IV, Varanasi, 1970.

Burgess, James and Pandit Bhagwanlal Indraji, *Inscriptions from the Cave Temples of Western India with Descriptive Notes*, &c, Delhi：lndian lndia, 1976.

Chakravarti, N. P., "A Note on the Painted lnscr1Ptions m Caves vl-XVII," Appendix to Ghulam Yazdani, *Ajanta*. vo1.3. London：Oxford University Press, 1946.

Chakravarti, N. P. & B. Ch. Chhabra,"Notes on the Painted and Incised Inscriptions of Caves XX-XXVI" Appendix to Ghulum Yazdani, *Ajnata*, vo1.4.London：Oxford university Press, 1955.

Codrington, K. de B., "The Culture of Medieval India as Illustrated by the AJaòþâ Frescoes." *Indian Antiquary* 59,(1930),pp. 159-172.

Cohen,Richard Scott, "Setting of the Three Jewels：The Complex Culture of Buddhism at the AJaòþâ Caves", PhD. diss., University of Michigan. 1995.

Coomaraswamy, Ananda K., "Ajaòþâ, Fresco Fragment in the Boston Museum." Rupam 12(October 1922)：pp. 121-123.

"The Painter's Art in Ancient India：Ajaòþâ," *Journal of the Indian Society of Oriental Art 1*(1933)：pp. 26-29.

"The Time Factor in Indian Wall Painting." *Technical Studies* 6. no.2 (October 1937)：pp. 106-108.

Cousens, Henry, An Account of the Caves of Nadsur and Karsumbla, *Archaeological Survey of Western India*, vol.XII, Bombay, 1891

Daji, Bhau, "Ajunta Inscriptions," *Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society*, 7(1863)：pp. 53-74.

Dehejia, Vidya, "Early Buddhist Caves at Junnar," *Artibus Asiae*, vol. XXXI(1969), pp. 147-166.

Early Buddhist Rock Cut Temples：A Chronology. Ithaca：Cornell University Press, 1972.

"Patron, Artist and Temple.", *In Royal Patrons and Great Temple Art*, ed. Vidya Dehejia, pp.3-8. Bombay：Marg, 1988.

"On Modes of visual Narration in Early Buddhist Art." *The Art Bulletin* 72. no.3(September 1990)：pp. 374-392.

"Narrative Modes in Ajaòþâ Cave 17：A Preliminary Study." *South Asian Studies* 7(1991)：pp. 45-57

Discourse in Early Buddhist Art：*Visual Narratives of India*. Delhi：Munshiram Manoharlal. 1997.

Deshpande, Brahmanand, "Dating of Ajintha Caves in the context of Vakataka Decline." *Pathik*. 3-4(1992)：pp. 8-14.

Deshpande, M. N.,"The Rock-cut Caves of Pitalkhora in the Deccan" *Ancient India*, No.15, 1959, pp. 66-93.

Dey, Mukul, *My Pilgrimage to Ajanta and Bagh*, reprint, 1950.

Dhavalikar, M.K., *Ajanta – A Cultural Study*, Poona：University of Poona, 1974.

"New lnscriptions from Ajanta," *Ars Orientalis*. 7(1968)：pp. 147-153

"Sri Yugadhara：A Master Artist of Ajaòþâ," *Artibus Asiae* 31 (1969)：pp. 301-308.

"Evolution of the Buddhist Rock-cut shrines of Western India", *Journals of the Asiatic Society of Bombay*, vols. 45-46, 1974, pp. 50-61.

Late Hinayana Caves of Western India, Deccan Colledge, Poona, 1984.

Divakaran, Odile, "Avalokltesvara – from the North-West to the Western Caves," *East and West*, 39(1989)：pp. 156-178.

Dhavalikar, M.K., "The Beginning of the Mahayana Architecture at Ajanta," in M.S.Nagaraja Rao(ed), Mandhu – M.N.Deshpande Felicitation Volume, Delhi, 1981, pp. 131-138.

Dutt, Sukumar, *Buddhist Monks and Monasteries of India*, London, 1962

Fabri, Charles, "Frescoes of Ajaòþâ," *Marg* 9, no.1(1955)：pp. 61-76.

Fergusson, James, "On the Rock-cut Temples of India," *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*. 8(1846)：pp. 30-92+10 pls.

Fergusson, James and Burgess, James, *The Cave Temples of India*, Delhi：Oriental Books Reprint 1969.

Foucher, Alfred Charles, "Preliminary Report on the Interpretation of the Paintings and Sculptures of Ajanta," *Journal of Hyderabad Archaeological Society* for 1919-20, ed., 1921.

"Lettre d'AJaòþâ,"17(1921)：pp. 201-245.

Ghosh,A., AjantaMurals：*An album of Eighty-five Reproductions on Colour*, New Delhi：Archaeological Survey of India, 1967.

"Two Early Brahmi Records from Ajanta," *Epigraphia Indica*. 37（1968）：pp. 241-244.

Gokhale, B.G., *Buddhism in Maharashtra – A History*, Bombay, 1976

Goloubew, V., "Documents pour servir l'etude d'Ajaòþâ：Les Peintures de la Première grotte," *Ars Asiantica* 10（1927）.

Goyal, Shankar, "The Progress of Vâkâþaka Historiography," *In The Age of* Vâkâþakas, Ed, by Ajay Mitra Shastri, New Delhi：Harman Publishing House, 1992：pp. 397-408.

Goyal, Shri Ram, *A History of Imperial Guptas*, Allahabad：Central Book Depot, 1967.

Griffiths, John, *The Paintings in the Buddhist Cave Temples of Ajanta*, 2vols, London, 1 896'97,

Gupta, Chandrashekar, "The Authorship of Ajanta Cave 17 to 20," *In the Art of Ajanta*, Ed.by Ratan Paflmoo et.al. New Delhi：Books and Books, 1991：pp. 100-104.

Haldar, Asit Kumar,"The Buddhist Caves at Bagh," *Burlington Magazine*, London, 1923.

"The Paintings of Bagh Caves," *Rupam*, No.2, Calcutta. 1921.

Herringham, Christiana Jane Powell Lady, *Ajanta Frescoes*, reprinted, Aryan Books International, New Delhi, 1998.

Khandalavala, Karl, *The Development of Style in Indian Painting*, Bombay, 1974.

"The History and Dating of the Mahayana Caves of Ajanta," *Pathik*. 2-1（1990）：pp. 18-21.

"The Chronology of Caves16, 17, 19, 26 and 2 at AJaòþâ and Ghatotkacha Cave." *In the Art of Ajanta*, Ed. by Ratan Parimoo et,al,（New Demi ： Books and Books, 1991）：pp. 105-129.

Khare, M.D., *Bagh Ki Guphayen*, Bhopal, 1971.

Krishna, Anand, "An Exceptional Group of Painted Buddha Figures at Ajaòþâ," *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 4,（1981）：pp. 96-100.

Lüders, Heinrich, "ÂryaÚûra's Jâtakamâlâ and the Frescoes of Ajaòþâ," *Indian Antiquqry*, Trans. By J. Burgess. 32（1903）：pp. 326-328.

Malandra, Geri H., "The Date of the Ajaòþâ Cave 27 Inscription," *Wiener Zeitschrift für die Kunde Sudasiens*. 26（1982）：pp. 37-46.

Mitra, Ashok, *The Ajanta and Bagh Caves：Panorama of Indian Painting*, New Delhi, 1971.

Mitra, Debala, *Ajanta*, New Delhi：Archaeologica1 Survey of India, 1980.

Nagaraju, S., *Buddhist Architecture of Western India*, Agam Kala Prakashan, Delhi, 1981.

Nandagopal, Choodamani, "Dance Forms in the Art of Ajaòþâ with reference to Amaravati and Bagh," *In The Art of Ajanta*, New Perspectives, Parimoo, Ratan and others（eds.）, pp. 356-365. New Delhi：Books and Books, 1991.

0kada, A. and Nou, J.L., Ajanta, Paris,1991.

Parimoo, Ratan and others（eds.）, *The Art of Ajanta*, New Perspectives, 2vols., New Delhi, 1991.

Sarkar, H., *Studies in Early Buddhist Architecture of India*, New Delhi, 1966.

Sanyal, Narayan, *Immortal Ajaòþâ*, Calcutta：Bharati Book Stall, 1984.

Schlingloff, Dieter, "Prince Sudhana and the Kinnari," Indologica Taurinensia 1（1971）：pp. 155-167.

"Das Lebensrad in Ajaòþâ," Asiatische Studien. 25（1971）：pp. 322-334.

"Jatakama!a-Darstellungen in Ajaòþâ," *Wiener Zeitschrift für die Kunde Sudasiens und Archiv für indische Philosophie* 16（1972）：pp. 55-65.

Studies in the Ajanta Paintings：Identifications and Interpretations, South Asia Books, 1988.

Singh, Madanjeet, India-Paintings from the Ajanta Caves, UNESCO, World Art Series, New York, 1954.

Soper, Alexander C., "Early Buddhist Attitude towards the Art of Paintings," *Art Bulletin* 32（June 1950）：pp. 147-151.

Spink, W.M., *Ajanta to Ellora*, Centre for South and Southeast Asian Studies：University of Michigan, 1967.

"Ajaòþâ's Chronology：The Problem of Cave Eleven," *Ars Orientalis*. 7（1968）：pp. 155-168.

"Ajaòþâ's Chronology：The Crucial Cave," *Ars Orientalis*. 10（1975）：pp. 143-169, plates 1-16.

"Bagh ： A Study." *Archives of Asian Art* 30（1976-1977）：53-84.

"Ajaòþâ's Chronology：Cave 1's Patronage and Related Problems," In Chhavi-2（=Rani Krishnadasa Festschrift）. Banares：Bharat Kala Bhavan, 1985：103-116, flgs. 22-37.

"Ajaòþâ's Chronology：Politics and Patronage," In Kâladarœana. Ed. by Joanna G. Williams, New Delhi：Oxford and IBH Publishing in collaboration with the American Institute of Indian Studies, 1981：pp. 109-126.

"Ajaòþâ's Chronology：Cave 7's Twice Born Buddha," lnStudies in Buddhist Art of South Asia, Ed.by A.K. Narain, New Delhi：Kanak Publications, 1985：pp. 103-116, figs. 22-37.

"Ajaòþâ's Chronology：Solstitia1 Evidence," *Ars Orientalis*.15（1985）：pp. 97-119.

"AJaòþâ's Paintings：A Checklist for the Dating," *In Dimensions of Indian Art：Pupul Jayakar Seventy*, Ed. by Lokesh Candra and Jyotindra Jain, Delhi：Agam Kala Prakashan, 1986：pp. 457-67.

"The Vâkâþaka's Flowering and Fall." In *The Art of Ajanta*, Ed. by Ratan Parimoo et.al.（New Delhi：Books and Books, 1991）：pp. 71-99, figs8-18.

"A Recently Discovered Buddha Image at Aurangabad." In *Rata Chandrika：Panorama of Oriental Studies*（*Shri R. C. Agrawala Festschrift*）, pp. 189-96. Edited by D. Handa and A. Agrawal. New Delhi：Harmon Publishing House, 1989.

"The Achievement of Ajaòþâ," In *The Age of Vâkâþakas*, Ed. by Ajay Mitra Shastri, New Delhi：Harman Publishing House, 1992：pp. 177-202.

"The Archaeology of Ajaòþâ," *Ars Orientalis*. 21（1992）：pp. 67-94.

Ajanta：History and Development. 6 Volumes（*Handbook of*

Oriental Studies), Leiden, 2005.
1：*The End of the Golden Age*. Leiden, 2005.
2：*Arguments about Ajanta. Leiden*, 2006.
3：*The Arrival of the Uninvited*. Leiden, 2006.
4：*Painting, Sculpture*, *Architecture*：*Ajanta*：*Year by Year*. Leiden, 2008.
5：*Cave by Cave*. Leiden, 2006.
6：*Shrines*, *Cells*, *Solstices*. Leiden, 2008.
"A New Vakataka Chronology". In *The Ananda-Vana of Indian Art*（*Dr. Ananda Krishna Felicitation Volume*）edited N. Krishna and M. Krishna, New Delhi, 2004

Stem, Philippe, "De l'amour humain à l'amour mystique dans les fresques d' Ajaòþâ," *L'Amour de l'Art* 6-7（1947）：pp. 291-299.

Taddei, Maurizio, "The Dîpankara-Jâtaka and Siddhârtha's yMeeting with Râhula：How Are They Linked to the Flaming Buddha?," *Annali de Instituto Universitario Orientali*. 52（1992）：pp. 103-107.

Thapar, Romila, "The Social Role of Craftmen and Artists in Early India," In *Making Things in South Asia*：*The Role of Artist and Craftman*, Ed. Michael Meister, pp. 10-17. Philadelphia：Department of South Asia Regional Studies, University of Pennsylvania, 1988.

Vasant, Suresh, "Dîpankara Buddha at Ajaòþâ," ln The Age of Vâkâþakas. Ed. by AJay N/litra Shastri. New Delhi：Harman Publishing House, 1992：pp. 209-21, figs. 48-55.

Weiner, Sheila L., Ajanta：Its Place in Buddhist Art, Berkdey, 1977.

Williams, Joanna, "A Unfinished'Chaitya Hall-Junnar, Manmodi 39" *Ars Orientatis*, vol.8, 1970, pp. 185-190.

Wilson, John, "Memoirs of the Cave Temples and Monasteries and other ancient Buddhist, Brahmanical and Jaina Remains of Western India, *Journals of the Bombay Branch of Royal Asiatic Society*, vol.III 1948-50, pp. 36-107, pp. 189-190.

Yazdani, G., Ajanta：The Color and Monovhrome Reproductions of Ajanta Frescoes Based on Photography, 4 volumes, London：Oxford university Press, 1930-35.
（ed）. *The Early History of Deccan*, New Delhi：Oriental Reprint, 1982.

Zin, M.（2003）：Ajaòþâ - Handbuch der Malereien 2：Devotionale und ornamentale Malereien?, 2volsjviesbaden

上野照夫「アジャンター第 1 番洞佛画の性格」『密教研究』89, 1943 年.
『インドの美術』東京 , 1964 年 , pp. 90-101.

小野玄妙「印度アジャンター窟殿壁画の本生図像」『佛教之美術及歴史』東京 , 1916 年 , PP. 259-303. 所収

肥塚隆・宮治昭編『世界美衝天全集東洋編 13 インド巾』小学館 , 2000 年

定余計次「インド仏教絵画の成立一古代初期における仏教と絵画の関係」『美学』160, 1990 年 , pp. 47-59.
「インド仏教絵画の展開－壁画の変転と礼拝謝の成立－」『佛教藝術』214, 1994 年 , pp. 75-131.
「インド美術の一貫性－彫刻・絵画に見られる主題と表現の特性」『美学』183, 1995 年 , pp. 1-11.
「アジャンター第 17 窟の＜五趣生死輪＞壁画　各区画の主題比定と諸問題」『西南アジア研究』42, 1995 年 , pp. 20-43.
「アジャンター第九窟・第十窟壁画　制作年代の問題を中心に」『東方学報』70, 1998, pp. 441-505.
『アジャンター壁画の様式的研究』（平成八～平成十年度科学研究費袖肋金研究成果報告書）1999
「インド仏教石窟における金剛手菩薩の成立－説一切有部との関係を中心に－」『西南アジア研究』57, 2002 年 , pp. 13-44.

譚村専太郎「アヂャンタ洞窟の壁画写に就いて」『美術旬報』160, 1918 年.

静谷正雄「印度仏教姉銘にみるシャーキャビクシュについて」『印度学位教学研究』2（1952）：pp. 104-105.

高田　修『印度・南海の佛教美術』東京 , 1943 年 , pp. 110-133.
「アジャンター壁画の佛敦説話とその描写形式について」『文化』20-1, 1956 年（『佛教美術史論考』, 東京 , 1969 年 , pp. 164-191 所収）
「インドの石窟寺院」『佛教芸術』41, 1959 年 , 前掲言 , pp. 89-119 所収 .
『アジャンタ　石窟寺院と壁画』平凡社 , 1971 年.

高田　修・大村次郷『アジャンタ壁画』日本放送出版協会 , 2000 年

瀧　精一「印度あじやんた石窟寺の壁画」『国華』322-325, 1917 年.
「アヂャンタ壁画の複写に就て」『審美』8-9, 1919 年 .
「アジャンタ 1 番洞窟天井画波斯人酒宴図に就いて」『国華』342, 1918 年.

塚本啓祥『インド仏教佛銘の研究 I』平楽寺書店 ,1996 年

平岡三保子「インドの生死縮図：アシャンツー壁面の作例について」『曼荼羅と輪廻』（立川武蔵編）所収 , 1993 pp. 270 "296.

逸見梅栄『印度仏教美術考・建築篇』東京 , 1928 年 .

町田甲一編『アジャンター石窟寺院』朝日新聞社 , 1987 年 .

松本文三郎『印度の佛教美術』東京 , 1920 年 , pp. 358-381.

柳　宗玄・宮治　昭『アジャンター窟院　世界の西域』講談社 , 1981 年 .

Fig.1 Bedsa Cave Distant View

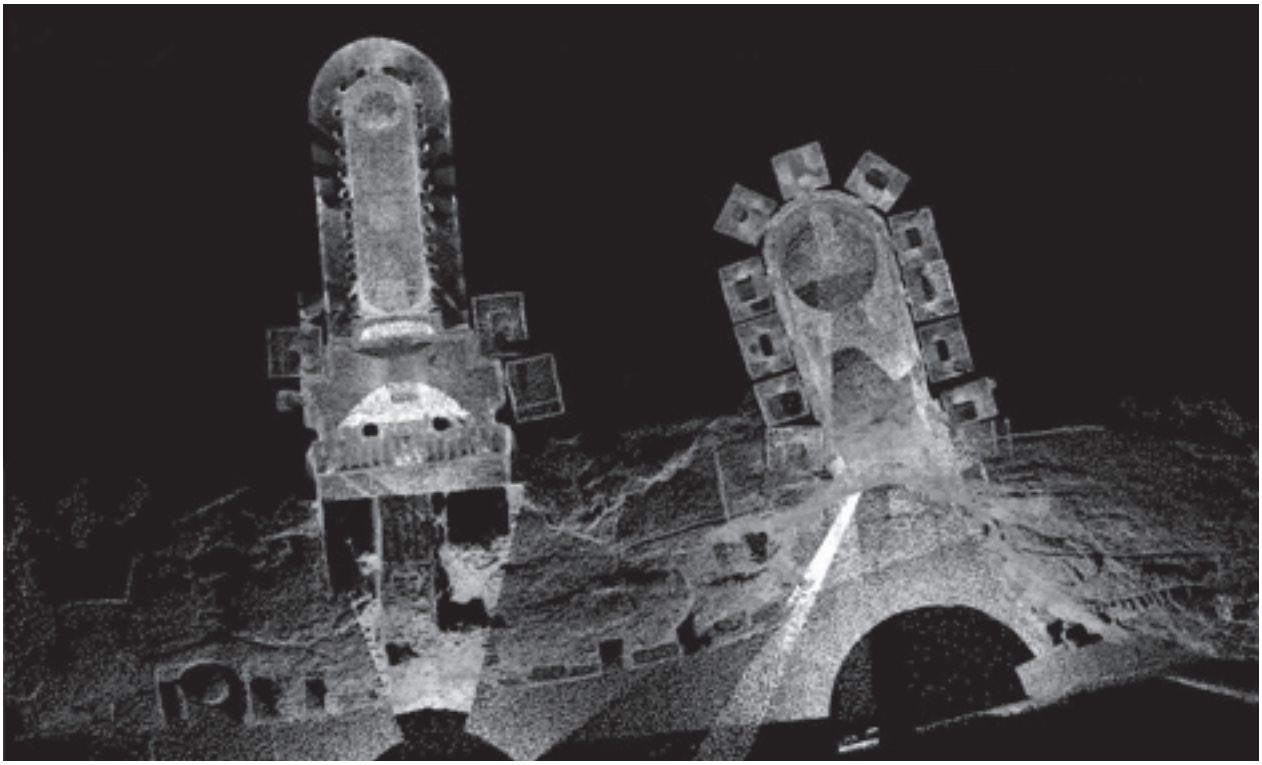

Fig.2 Bedsa Site Plan Data

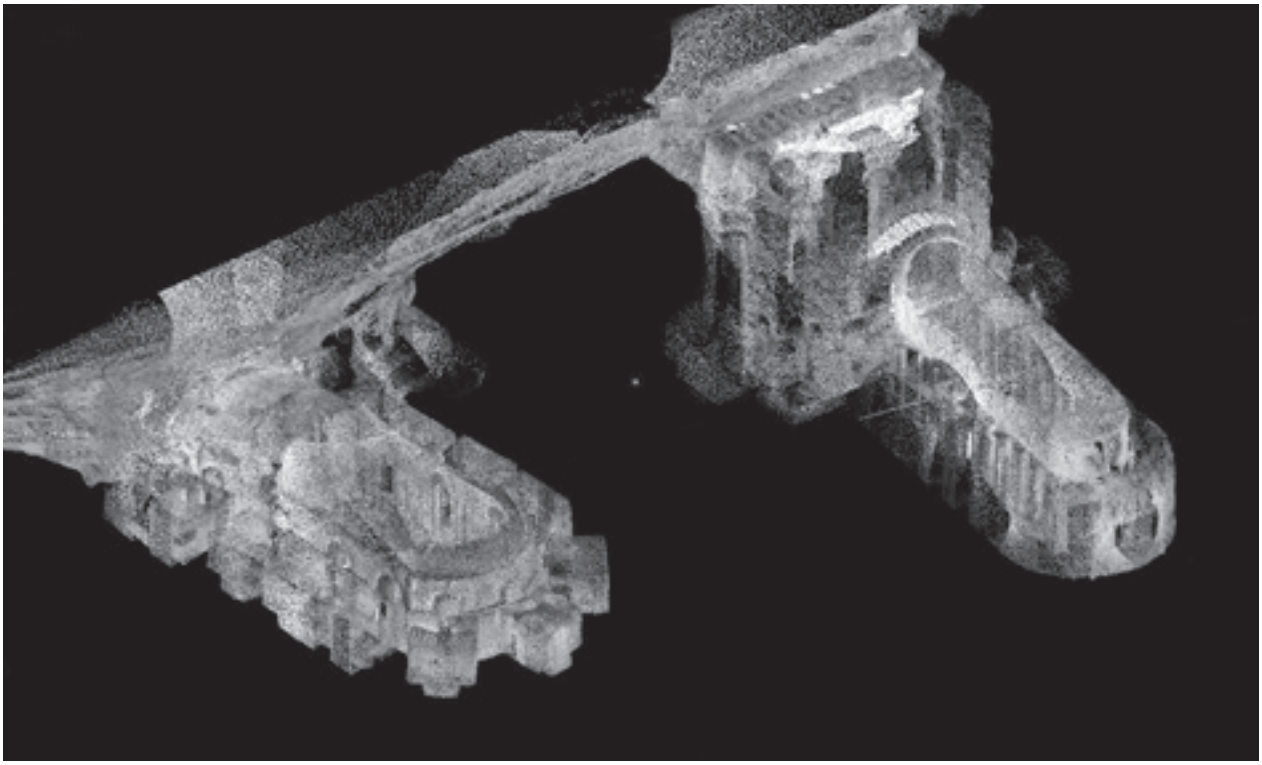

Fig.3 Bedsa Site Perspective View Data

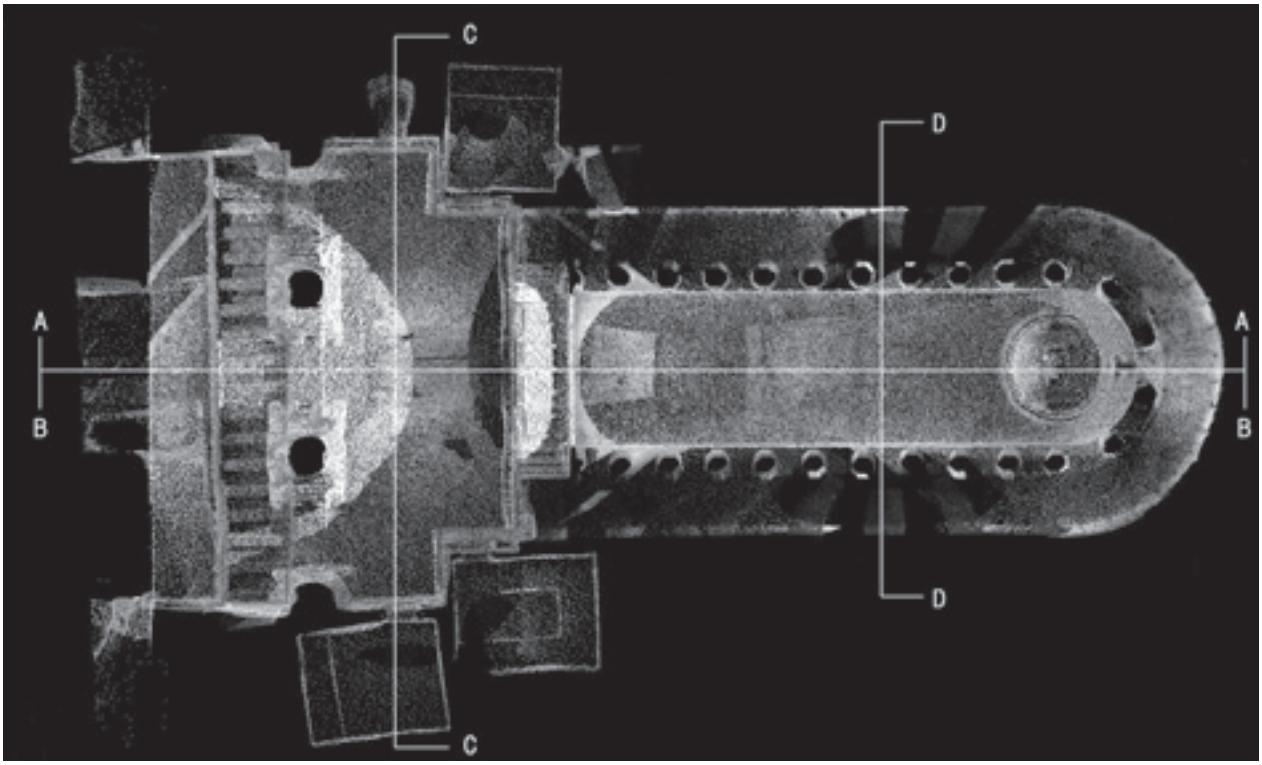

Fig.4 Bedsa Caitya Cave Plan Data

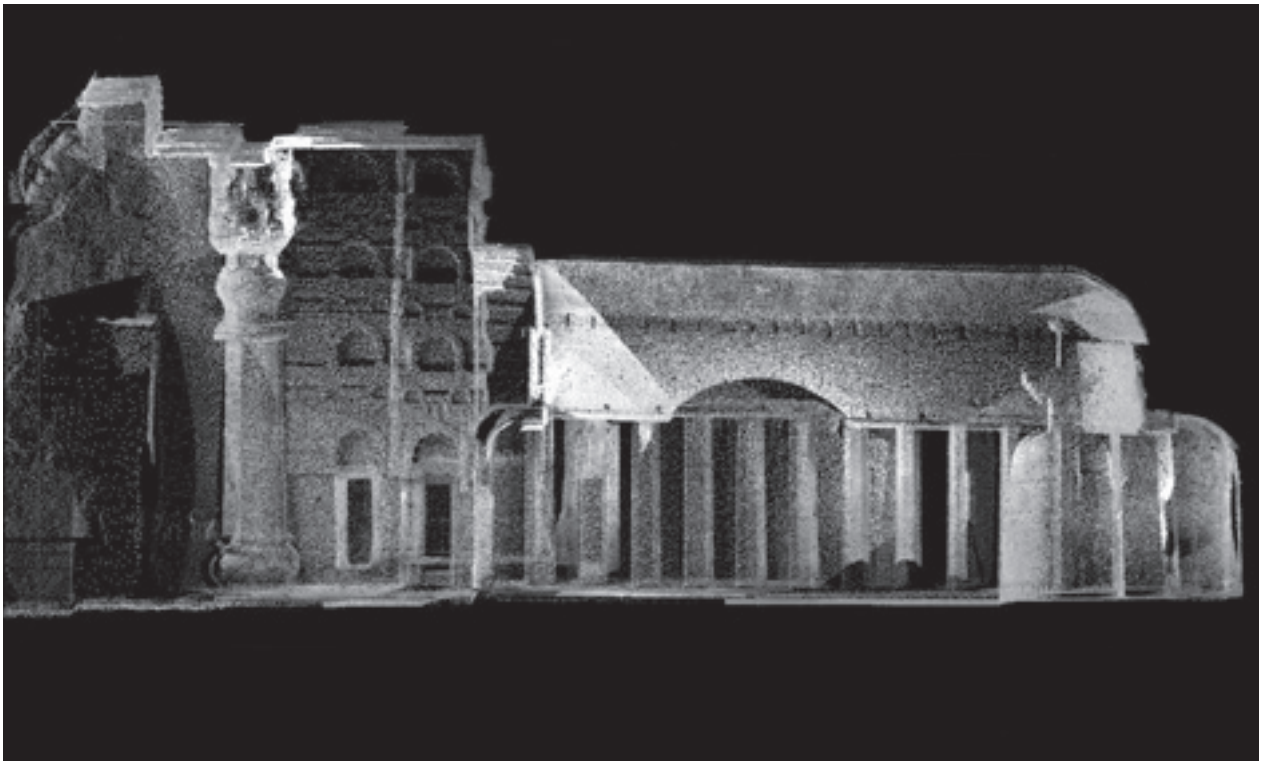

Fig.5 Bedsa Caitya Cave A-A Section Data

Fig.6 Bedsa Caitya Cave B-B Section Data

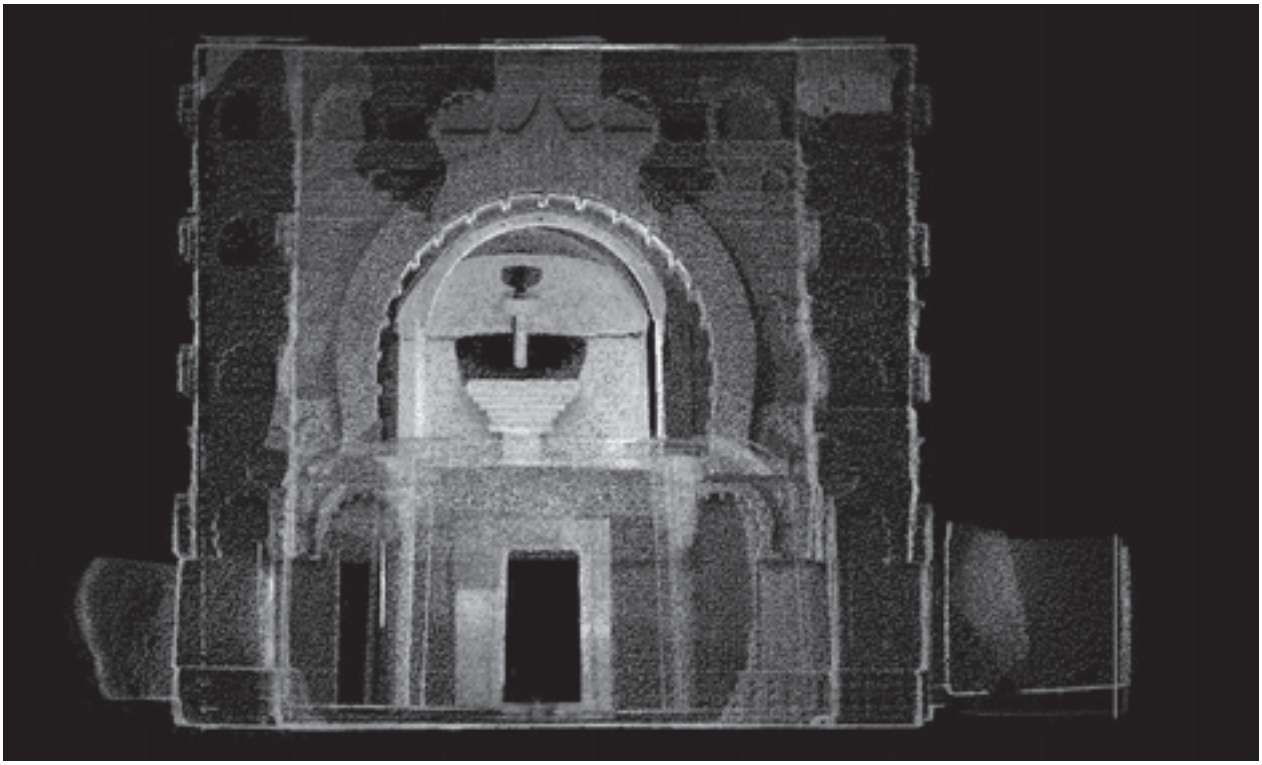

Fig.7 Bedsa Caitya Cave C-C Section Data

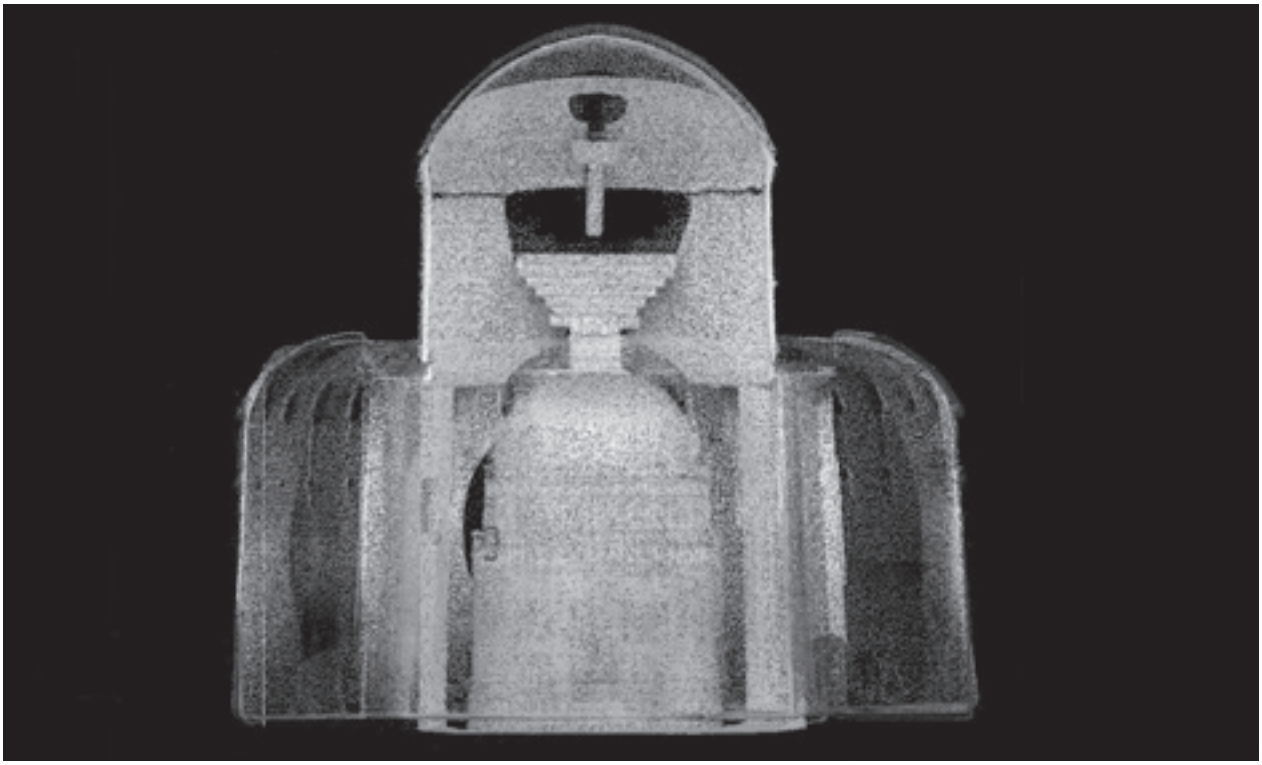

Fig.8 Bedsa Caitya Cave D-D Section Data

Fig.9 Bedsa Caitya Cave Façade

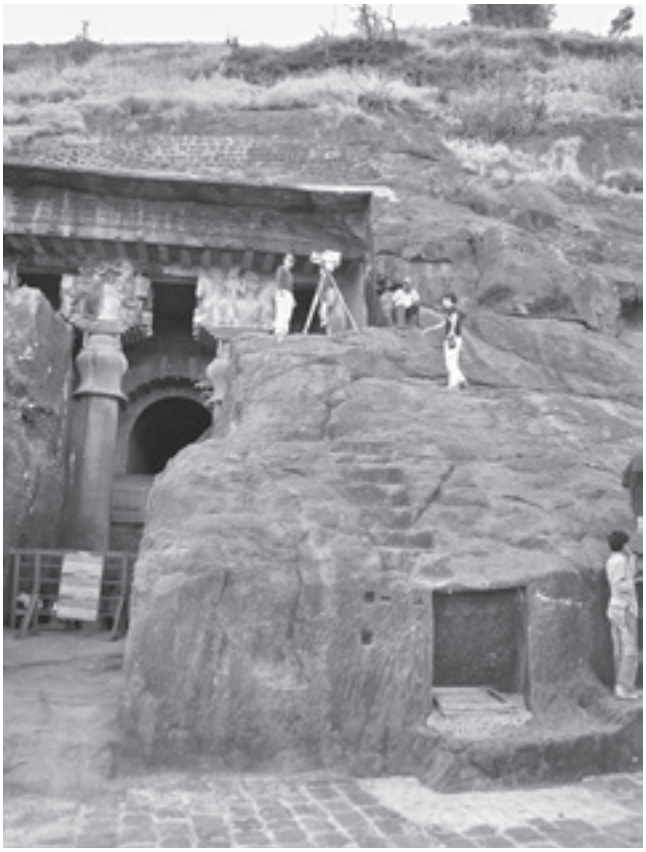

Fig.10 Bedsa Caitya Cave Façade

Fig.11 Bedsa Caitya Cave Porch Capital

Fig.12 Bedsa Caitya Cave Façade

Fig.13 Bedsa Caitya Cave Porch Right

Fig.14 Bedsa Caitya Cave Porch Left

Fig.15 Bedsa Caitya Cave Caitya Window

Fig.16 Bedsa Caitya Cave Porch Door

Fig.17 Bedsa Caitya Cave Porch Left Door

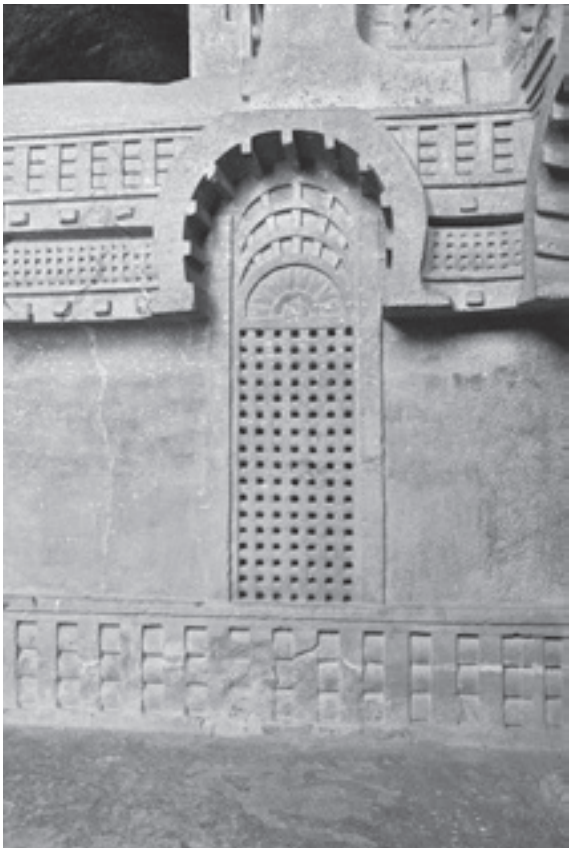

Fig.18 Bedsa Caitya Cave Porch Right Window

Fig.19 Bedsa Caitya Cave Porch Left Cell

Fig.20 Bedsa Caitya Cave Porch Left Cell

Fig.21 Bedsa Caitya Cave Porch Left Cell

Fig.22 Bedsa Caitya Cave Interior

Fig.23 Bedsa Caitya Cave Caitya Window

Fig.24 Bedsa Caitya Cave Caitya Window

Fig.25 Bedsa Caitya Cave Ceiling

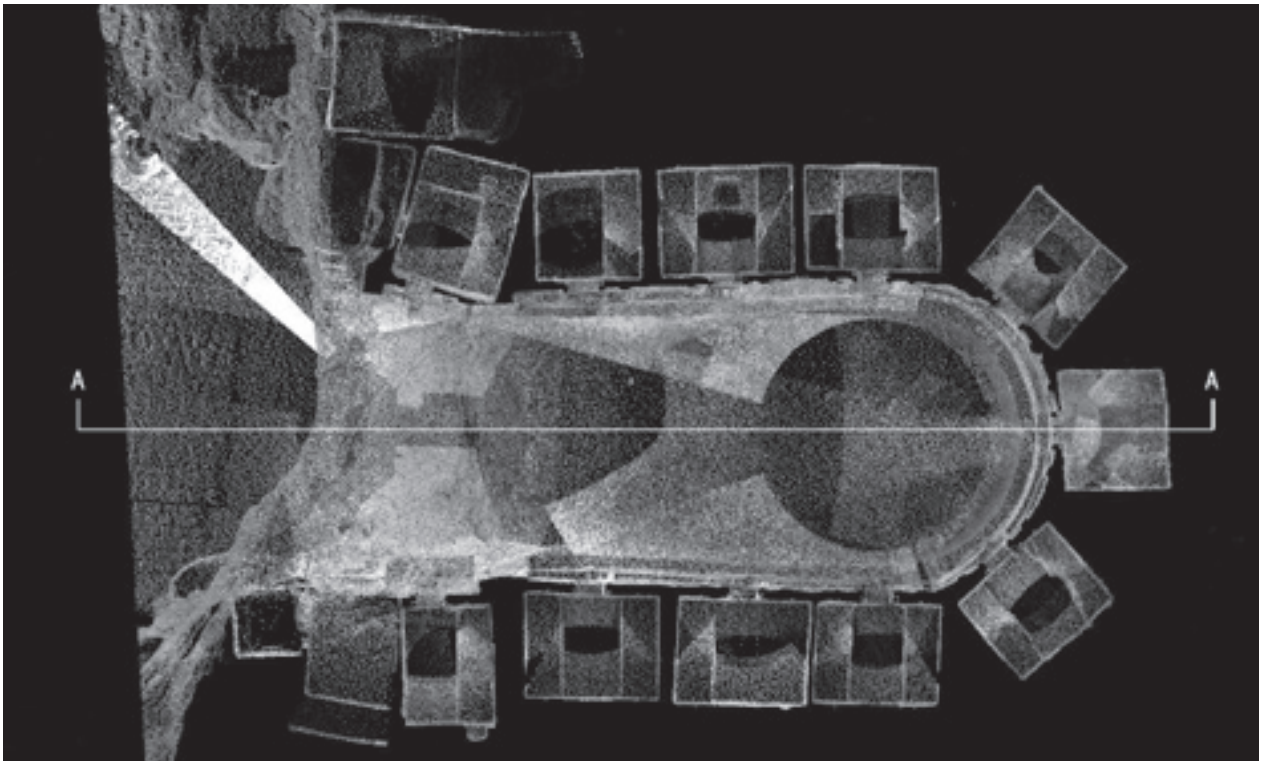

Fig.26 Bedsa Vihara Cave Plan DataBedsa Vihara Cave Plan Data

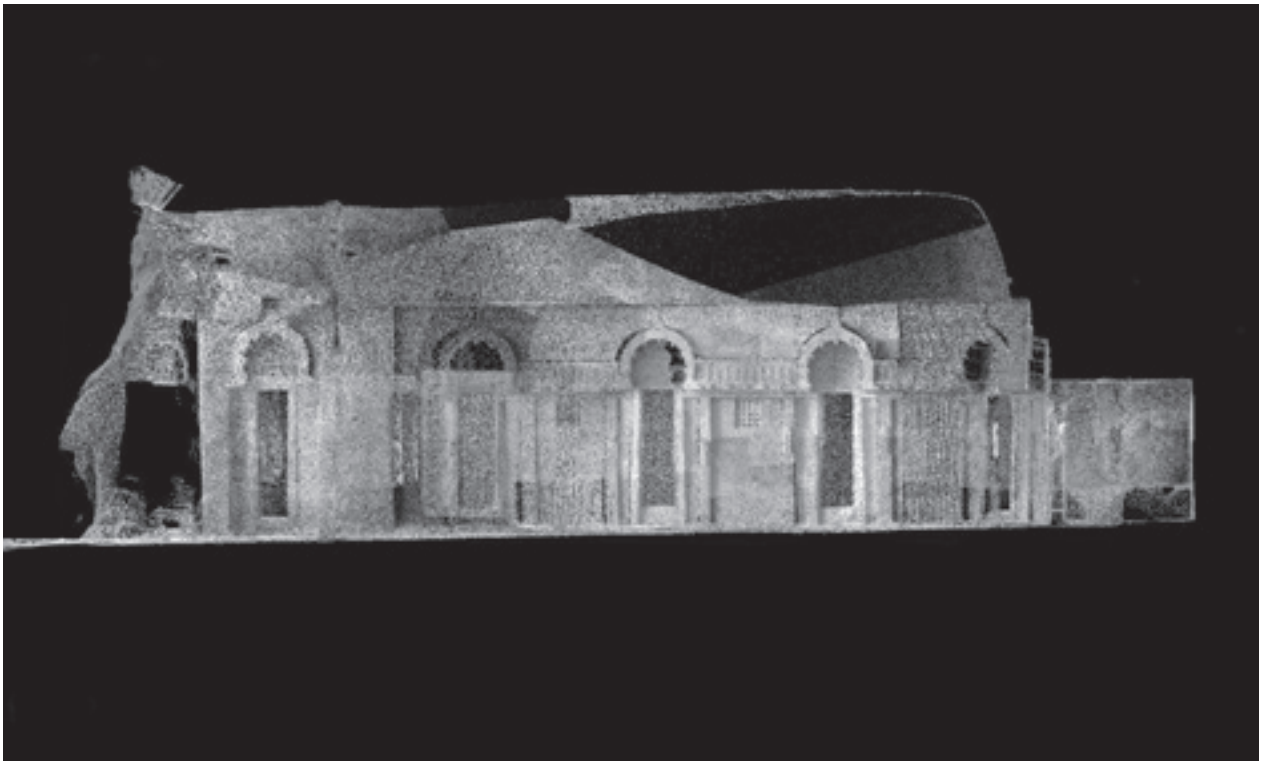

Fig.27 Bedsa Vihara Cave A-A Section Data

Fig.28 Bedsa Vihara Cave Façade

Fig.29 Bedsa Vihara Cave Interior

Fig.30 Bedsa Vihara Cave Interior, L1 - L3

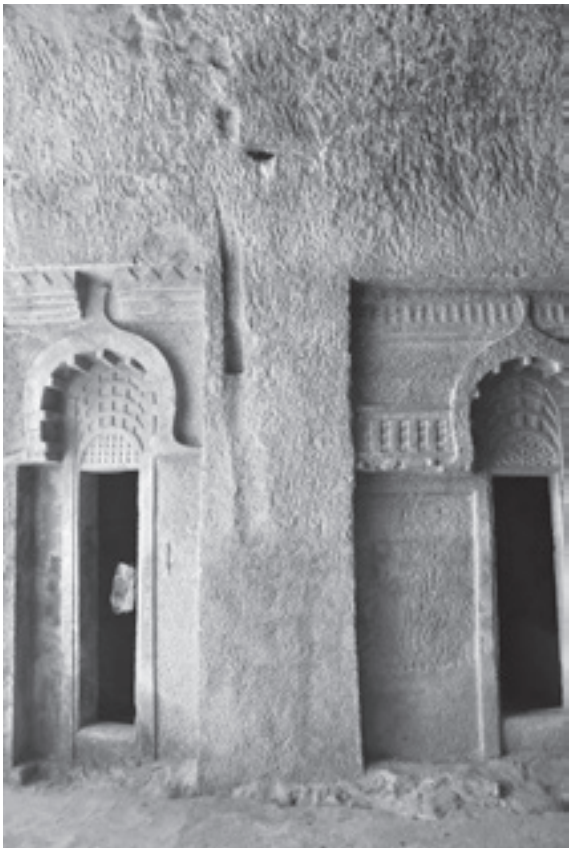

Fig.31 Bedsa Vihara Cave Interior, PL - L1

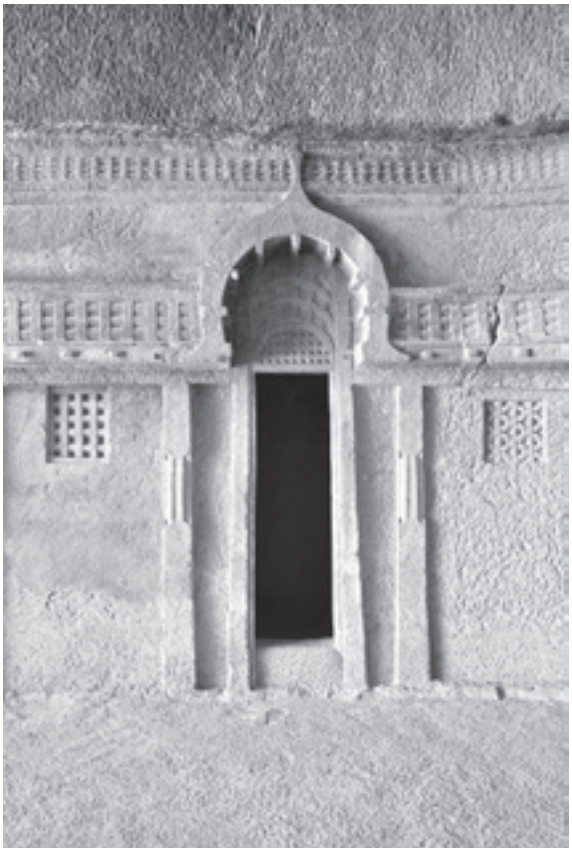

Fig.32 Bedsa Vihara Cave Cell L3

Fig.33 Bedsa Vihara Cave Cell L3, Door Device

Fig.34 Bedsa Vihara Cave Cell L3, Stone Bed

Fig.35 Bedsa Vihara Cave Cell L3, Stone Bed

Fig.36 Bedsa Vihara Cave Interior, L4-5

Fig.37 Bedsa Vihara Cave Interior, L4-5

Fig.38 Bedsa Vihara Cave Cell L5

Fig.39 Kuda Site View

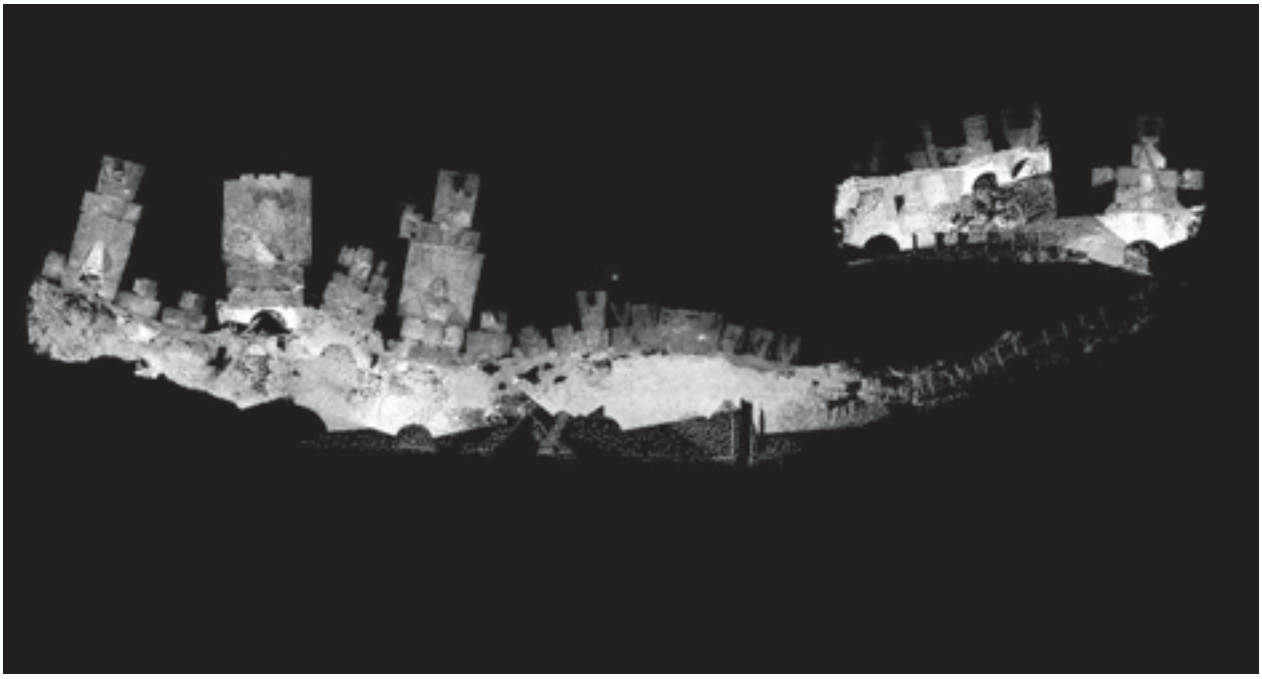

Fig.40 Kuda Caves Site Plan Data

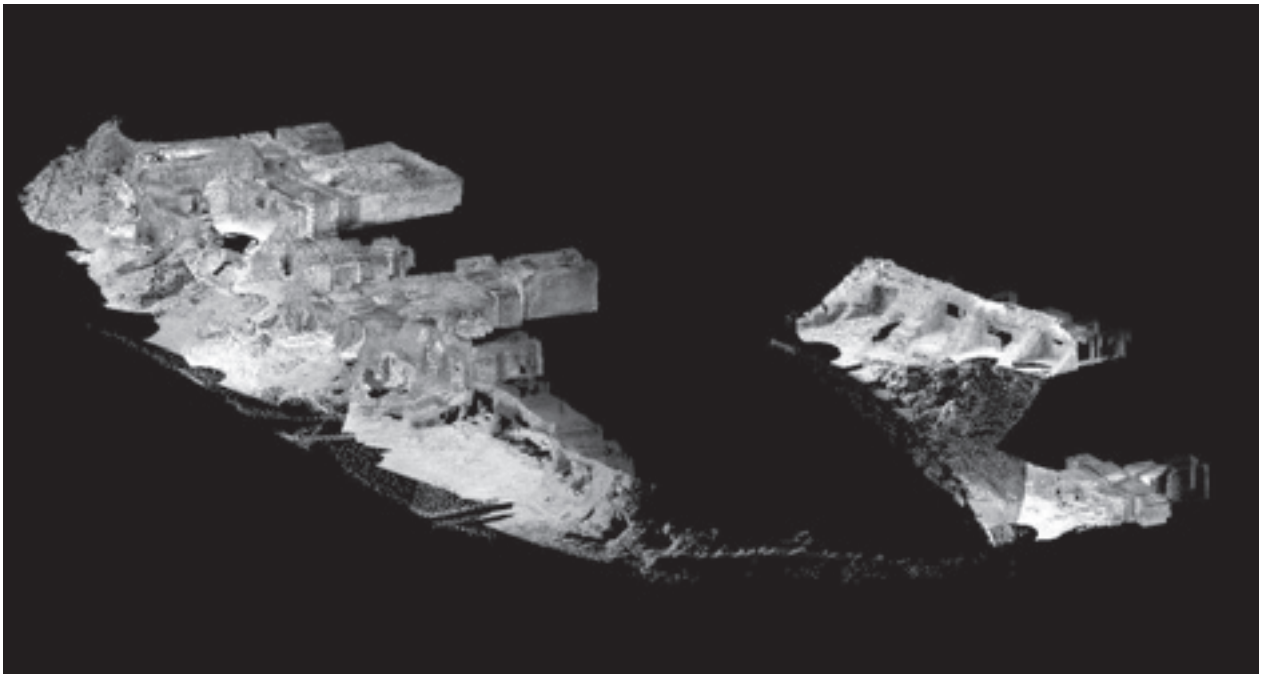

Fig.41 Kuda Caves Perspective View Data

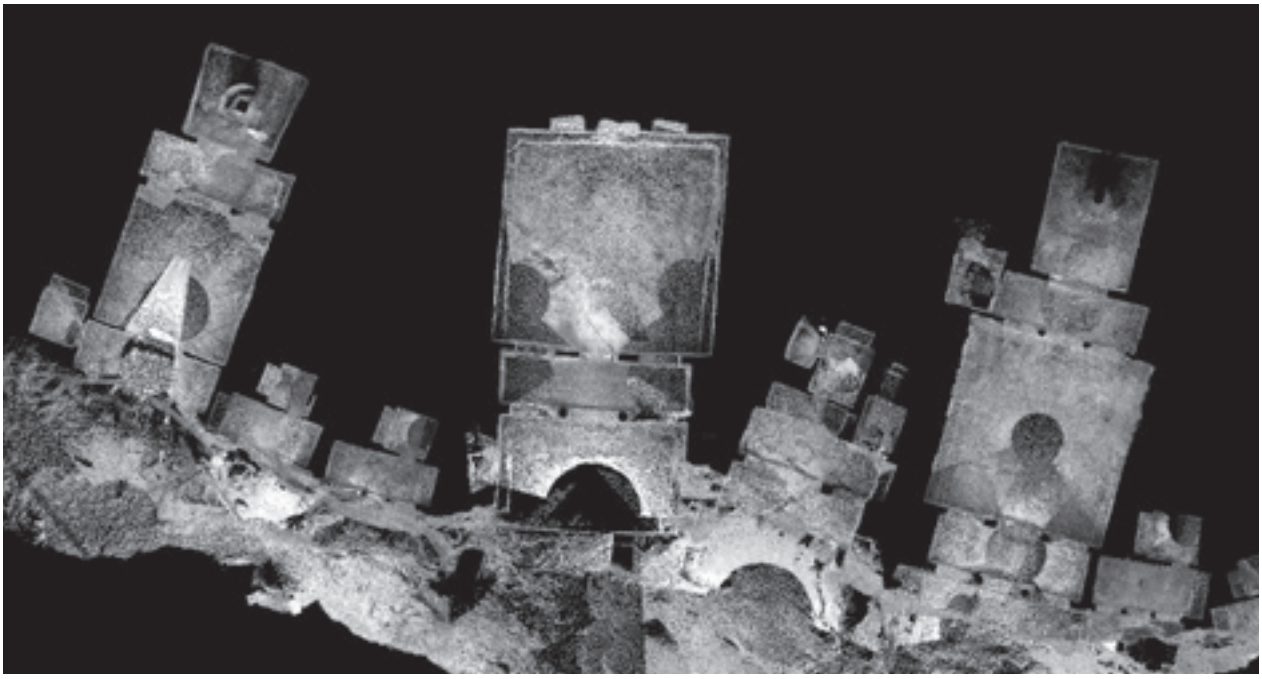

Fig.42 Kuda Caves 1 - 7 Plan Data

Fig.43 Kuda Caves 5 - 14 Plan Data

Fig.44 Kuda Caves 15 - 19 Plan Data

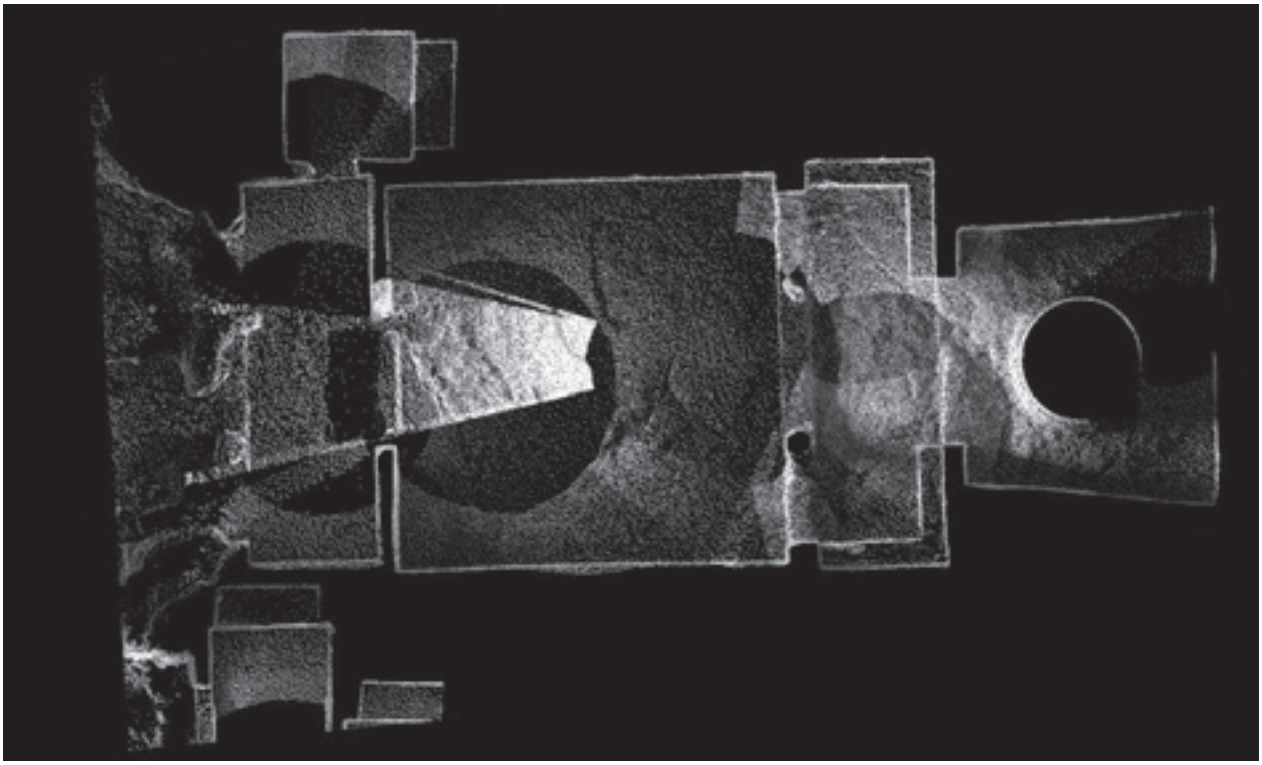

Fig.45 Kuda Cave 1 Plan Data

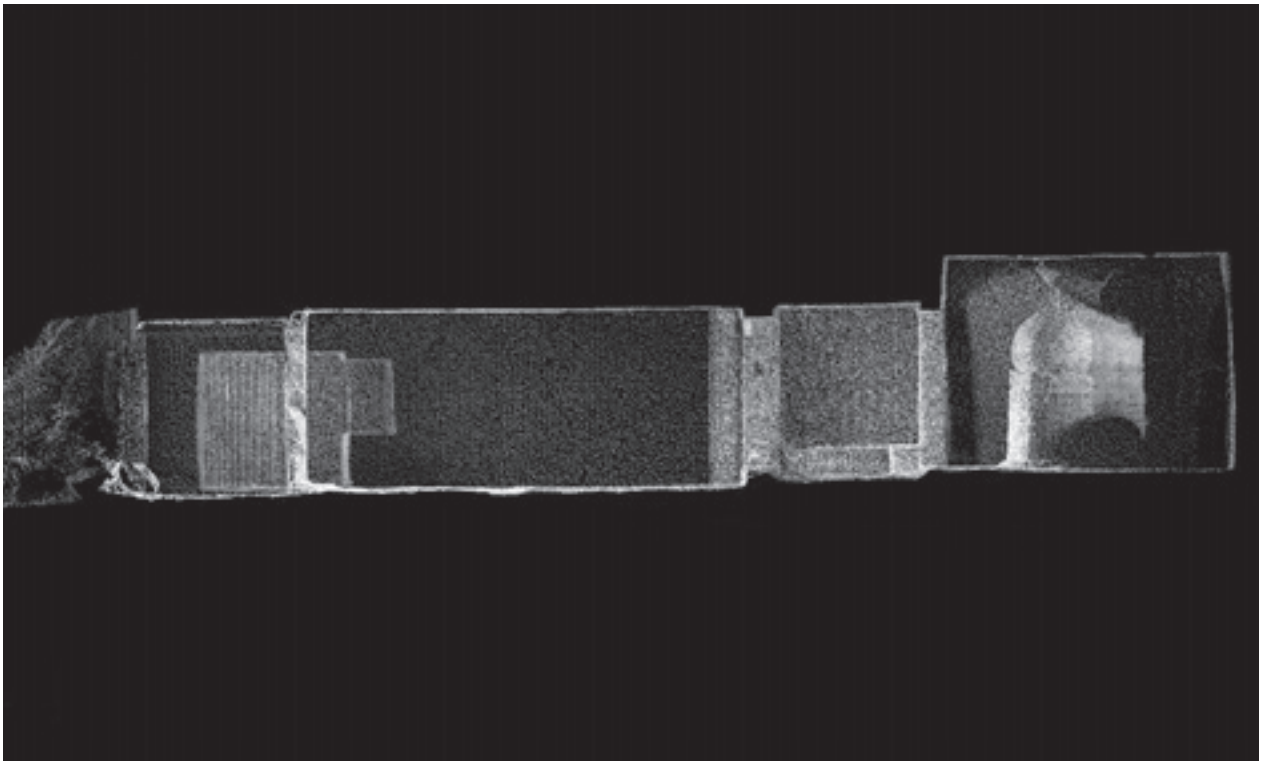

Fig.46 Kuda Cave 1 Section Data

Fig.47 Kuda Cave 1 Façade

Fig.48 Kuda Cave 1 Interior

Fig.49 Kuda Cave 1 Sanctum

Fig.50 Kuda Cave 2 Façade

Fig.51 Kuda Cave 2 - 6 Façade

Fig.52 Kuda Cave 3 Façade

Fig.53 Kuda Cave 3 Façade, Stupa

Fig.54 Kuda Cave 3 Porch Right

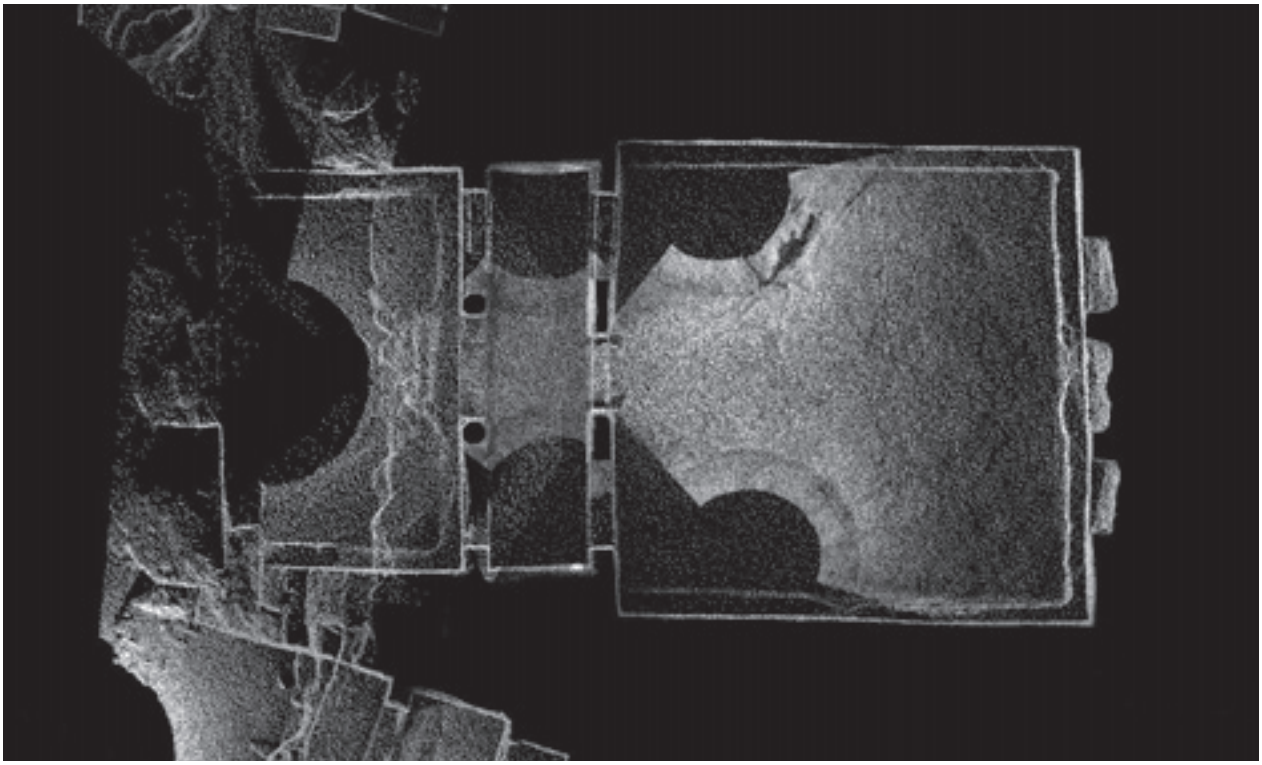

Fig.55 Kuda Cave 4 Plan Data

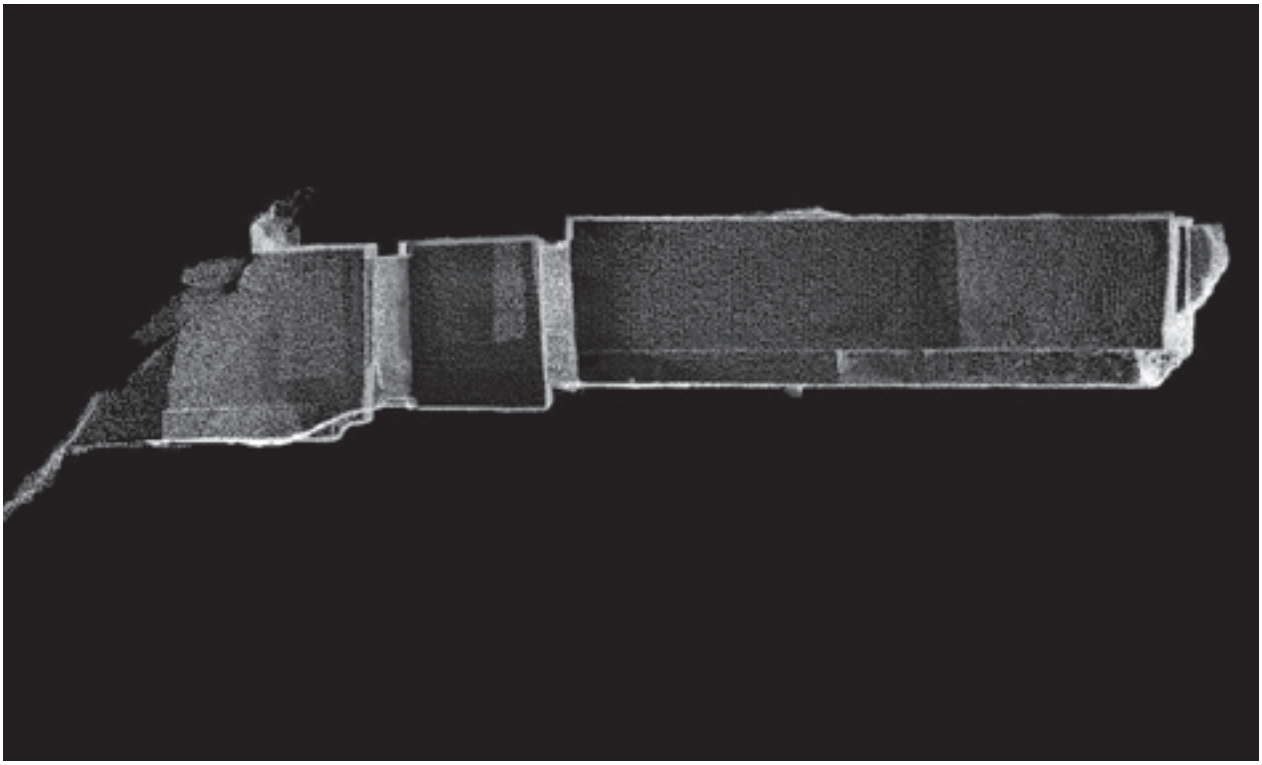

Fig.56 Kuda Cave 4 Section Data

Fig.57 Kuda Cave 4 Façade

Fig.58 Kuda Cave 4 Interior

Fig.59 Kuda Cave 4 Façade, Reiling

Fig.60 Kuda Cave 5 Façade

Fig.61 Kuda Cave 5 Left Cell

Fig.62 Kuda Cave 5 Right Cell

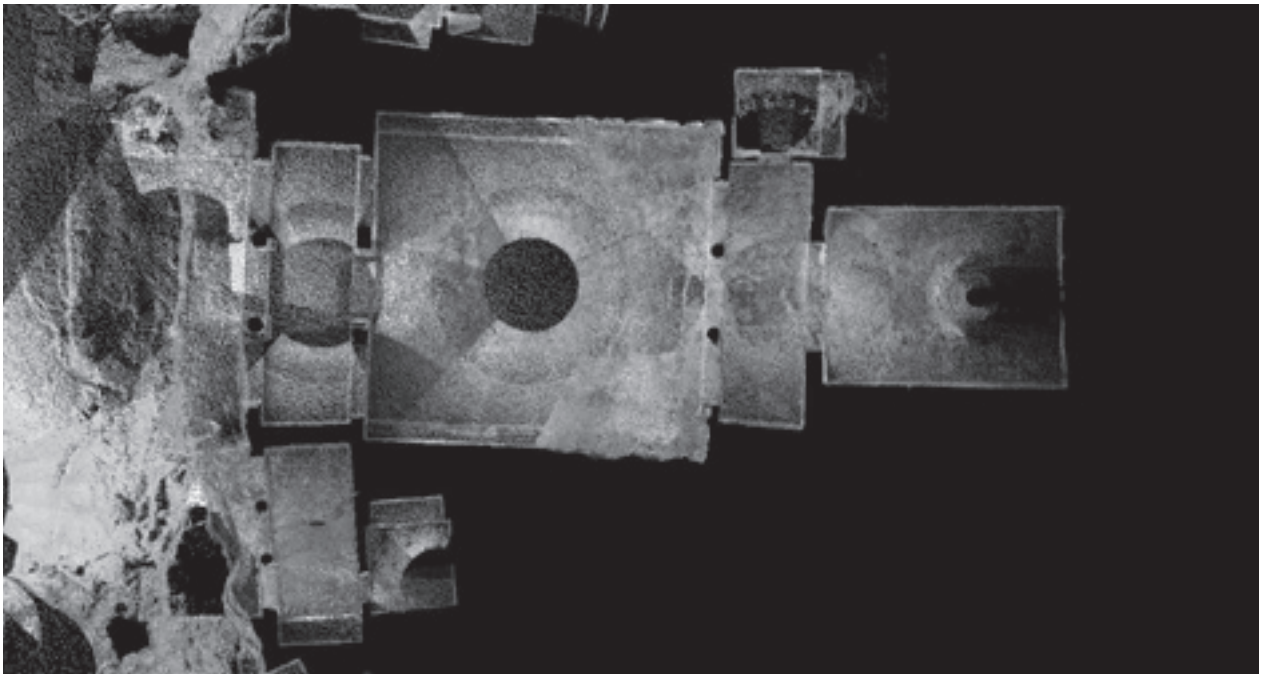

Fig.63 Kuda Cave 6 Plan Data

Fig.64 Kuda Cave 6 Section Data

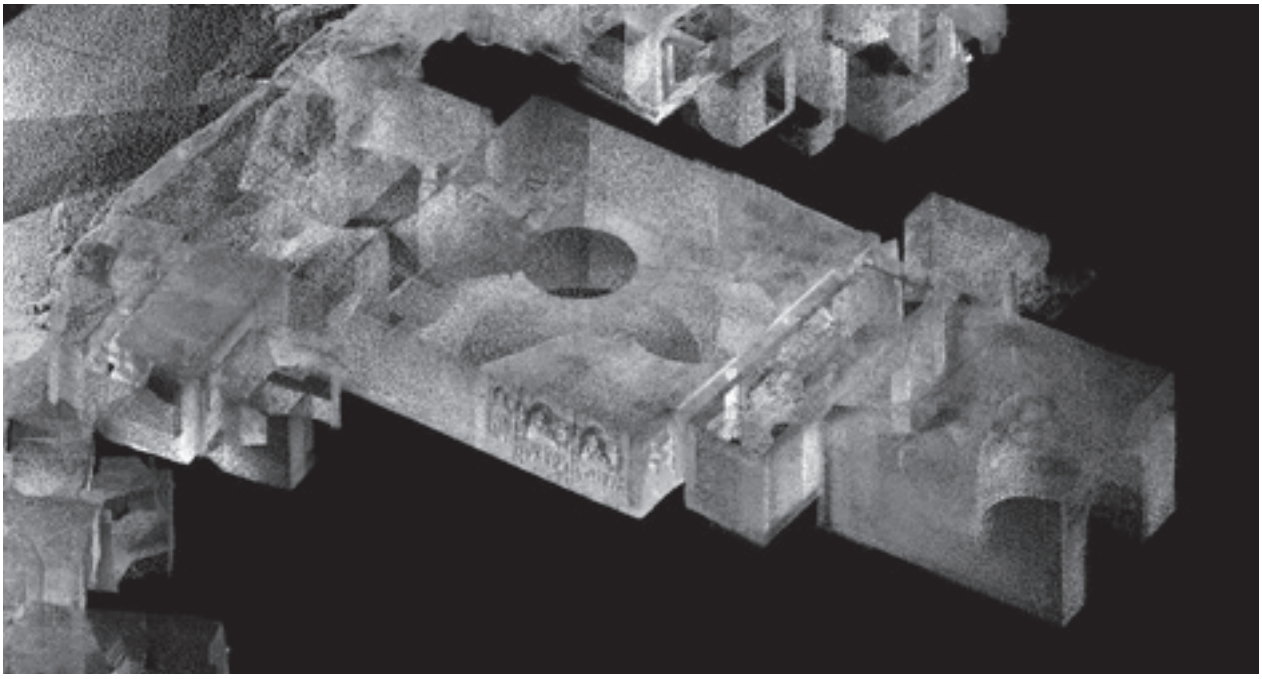

Fig.65 Kuda Cave 6 Perspective Data

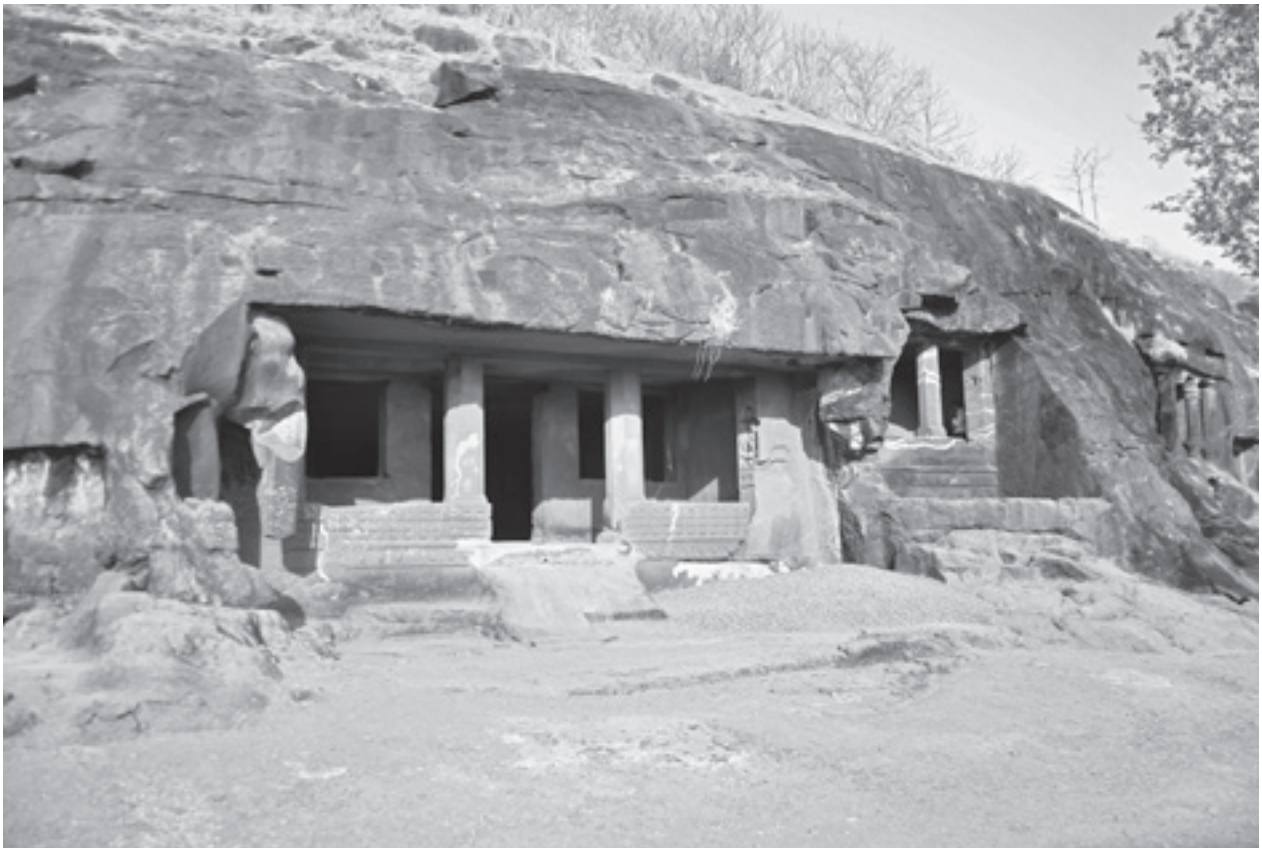

Fig.66 Kuda Cave 6 Façade

Fig.67 Kuda Cave 6 Porch Left

Fig.68 Kuda Cave 6 Interior

Fig.69 Kuda Cave 6 Interior Right Wall Relief

Fig.70 Kuda Cave 6 Interior Left Wall

Fig.71 Kuda Cave 6 Antechamber

Fig.72 Kuda Cave 6 Sanctum

Fig.73 Kuda Cave 6 Sanctum

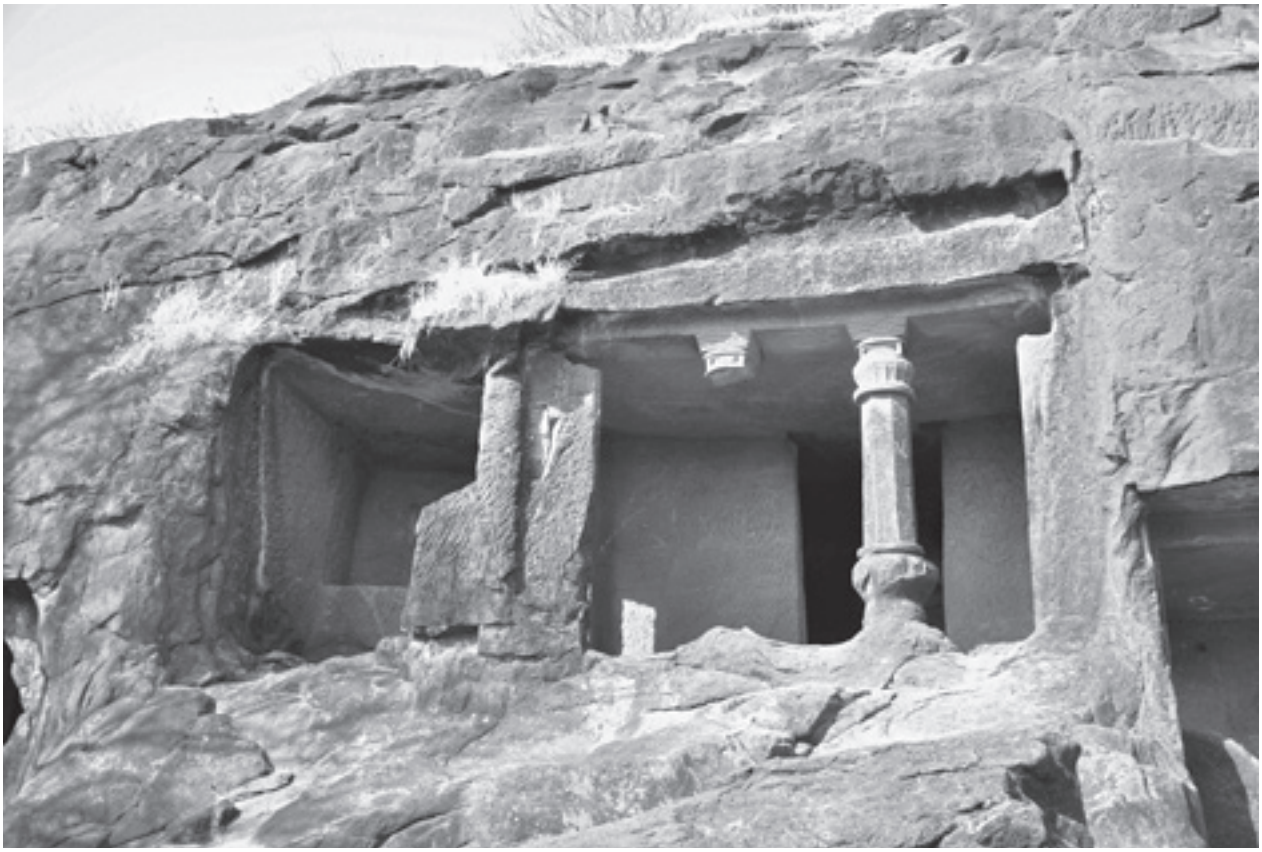

Fig.74 Kuda Cave 9 Façade

Fig.75 Kuda Cave 9 Porch Right

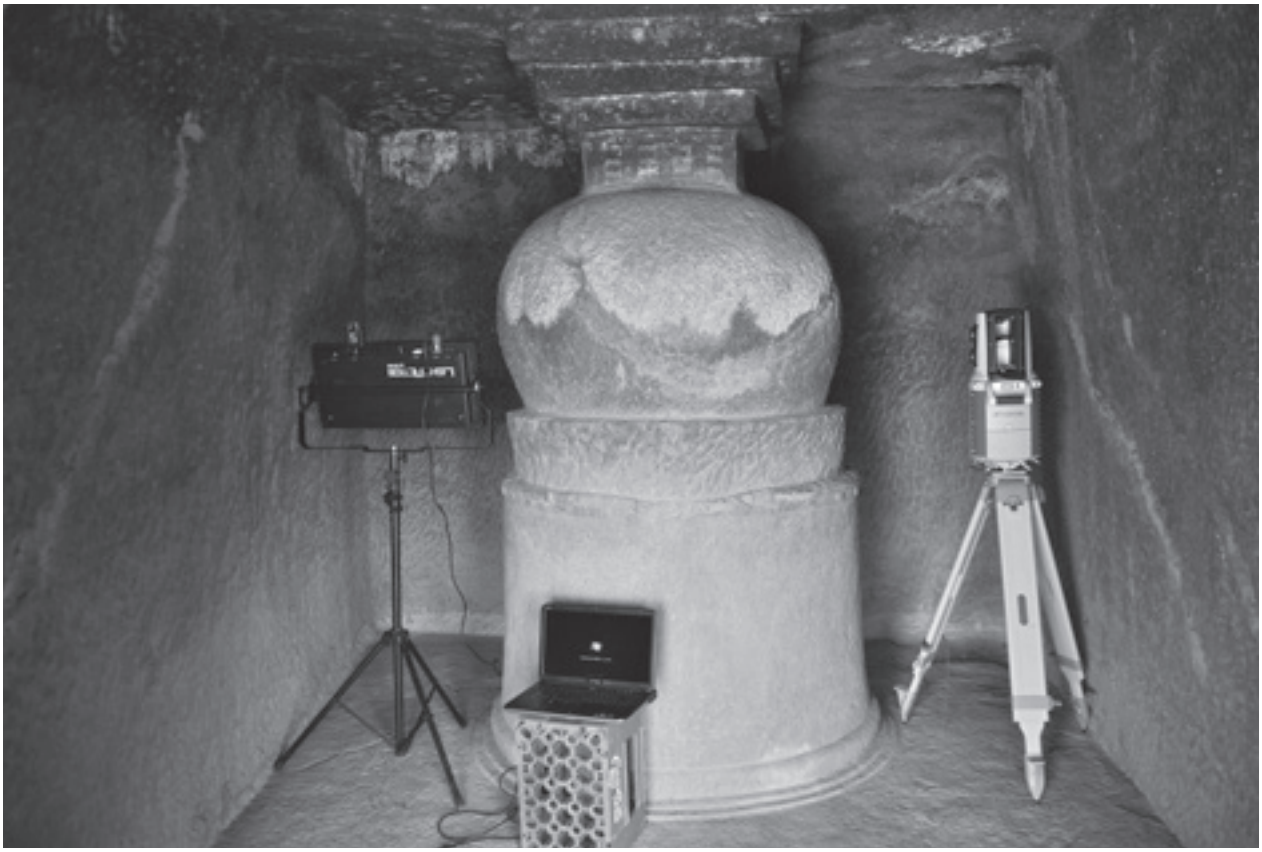

Fig.76 Kuda Cave 9 Interior

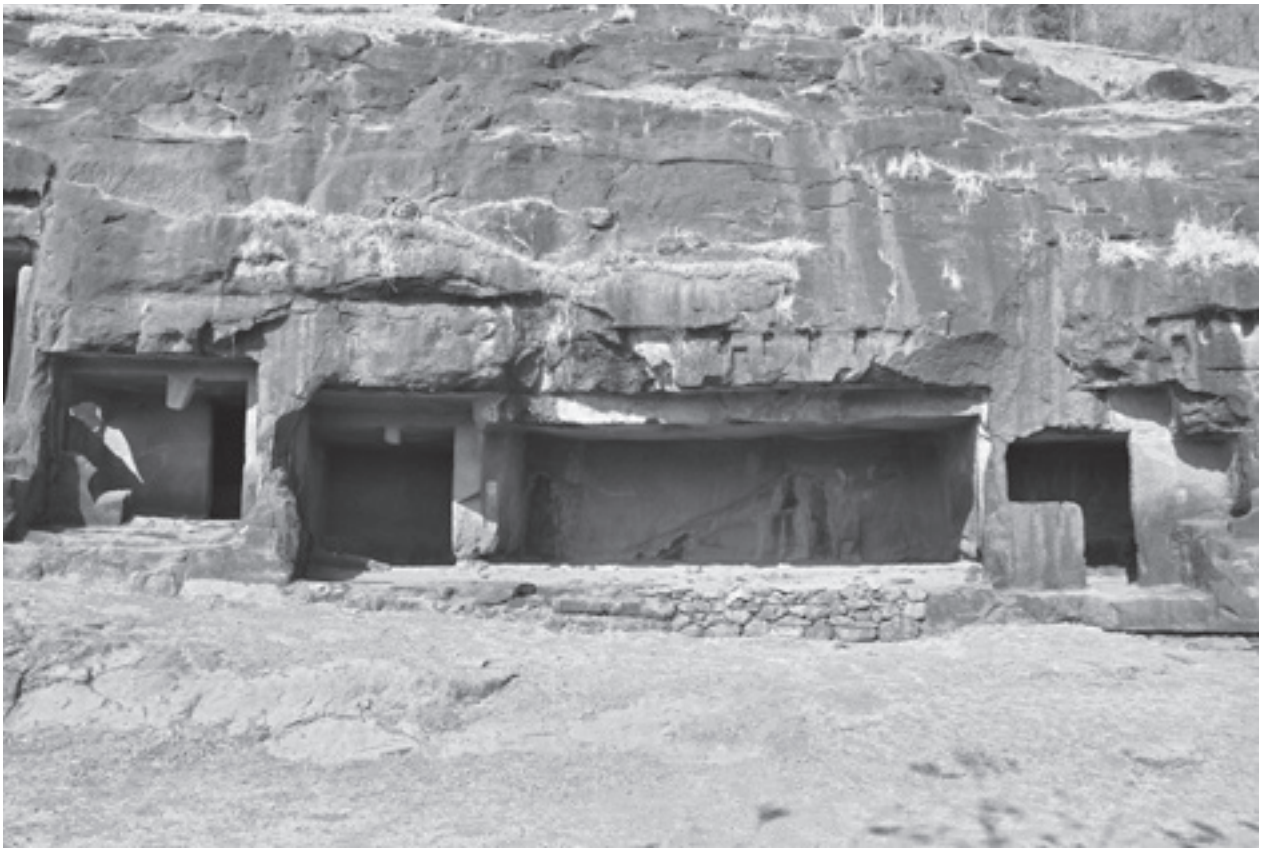

Fig.77 Kuda Cave 10 Façade

Fig.78 Kuda Cave 12-14 Façade

Fig.79 Kuda Cave 15 Façade

Fig.80 Kuda Cave 15 Interior. Sanctum

Fig.81 Kuda Cave 16 Façade

Fig.82 Kuda Cave 16 Porch Left

Fig.83 Kuda Cave 16-19 Façade

Fig.84 Kuda Cave 17 Façade

Fig.85 Kuda Cave 17 Porch Right

Fig.86 Kuda Cave 18 Façade

Fig.87 Kuda Cave 18 Porch Left

Fig.88 Kuda Cave 19 Façade

Fig.89 Kuda Cave 19 Porch Left

Fig.90 Kuda Cave 19 Porch Right

Fig.91 Ajanta Caves Distant View

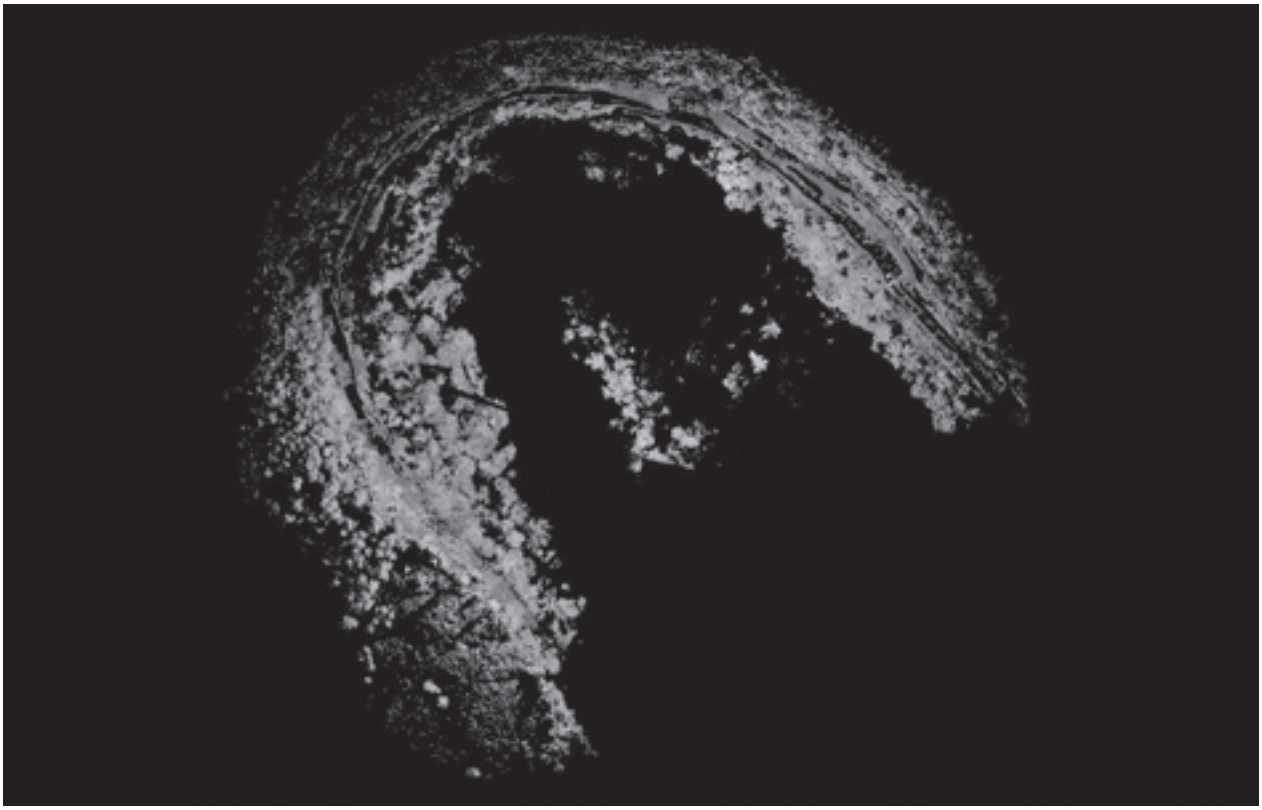

Fig.92 Ajanta Caves Site Plan Data

Fig.93 Ajanta Caves 21-26

Fig.94 Ajanta Caves 21 - 27 Perspective Data

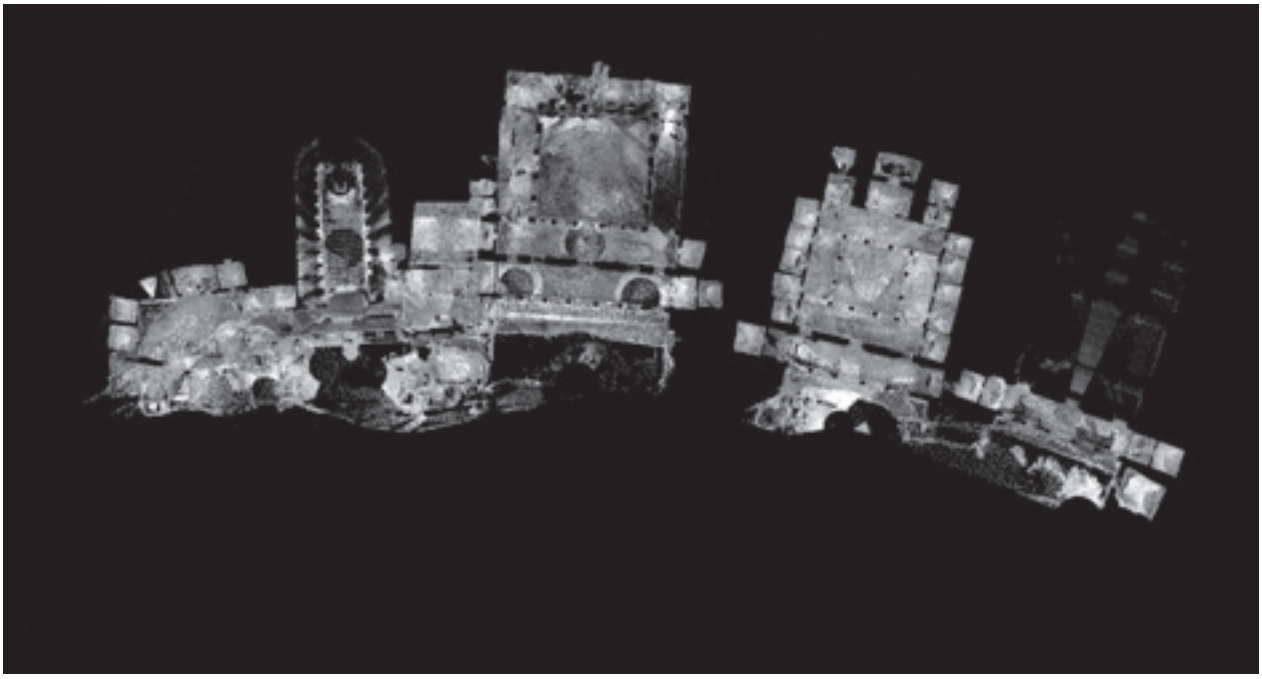

Fig.95 Ajanta Caves 21-27 Plan Data

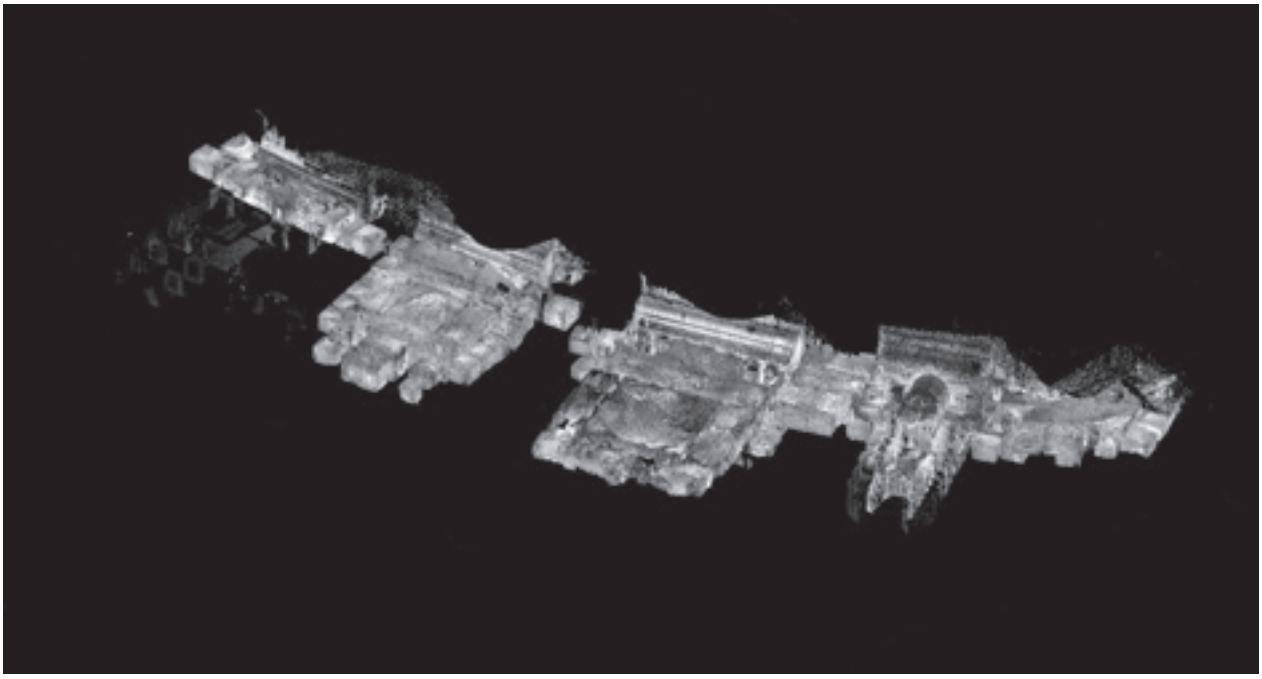

Fig.96 Ajanta Caves 21 - 27 Perspective Data 2

Fig.97 Ajanta Caves 21-23 Section Data

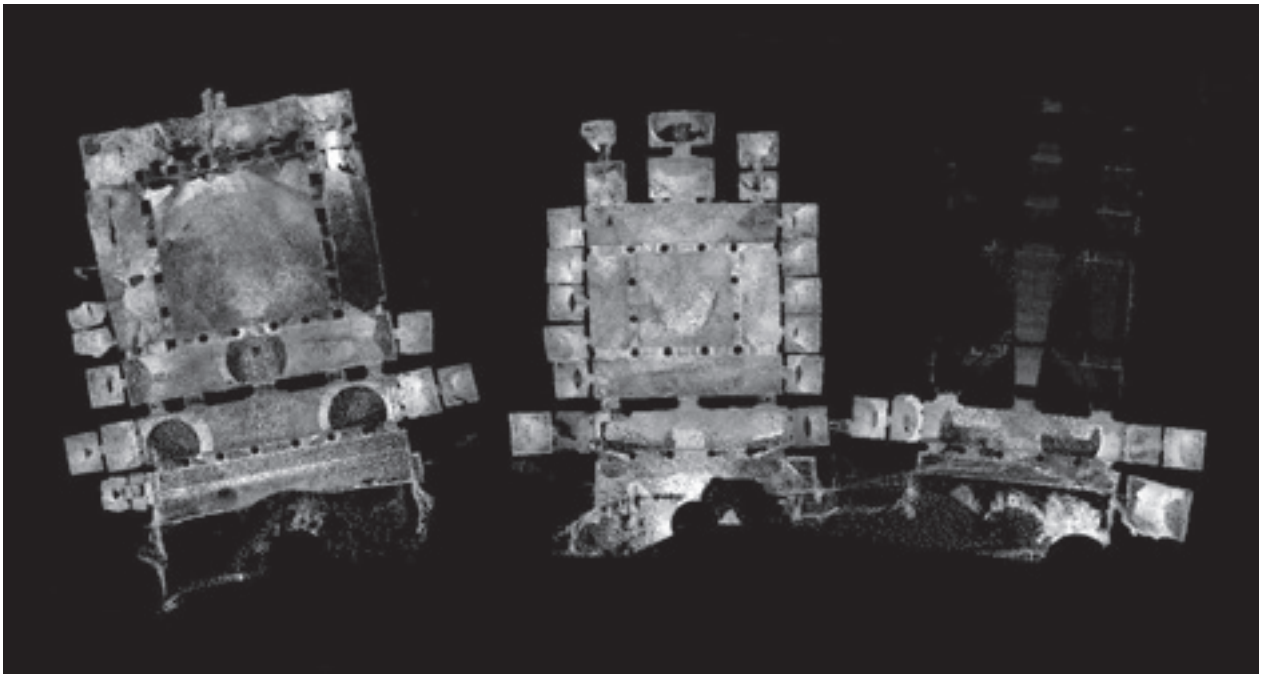

Fig.98 Ajanta Caves 21-24 Plan Data

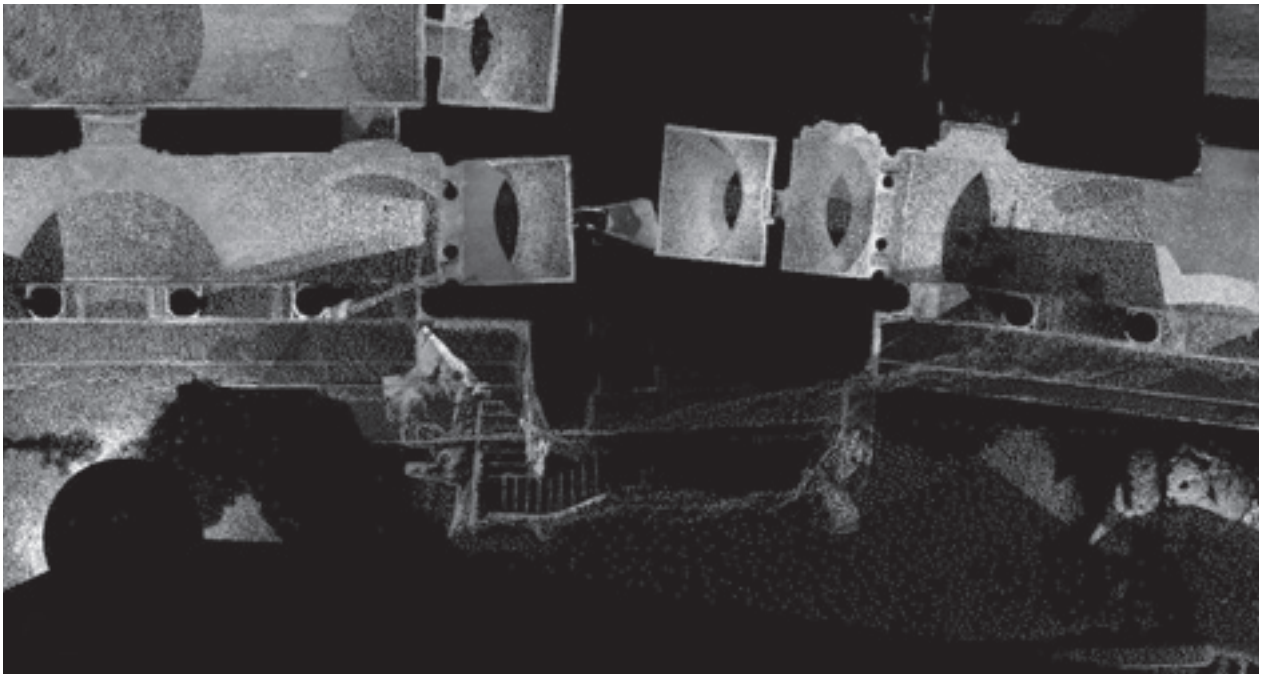

Fig.99 Ajanta Caves 21-23 Porch Plan Data

Fig.100 Ajanta Caves 23-24 Section Data

Fig.101 Ajanta Cave 21 Façade

Fig.102 Ajanta Cave 21 Porch Door

Fig.103 Ajanta Cave 21 Interior

Fig.104 Ajanta Cave 21 Porch Left

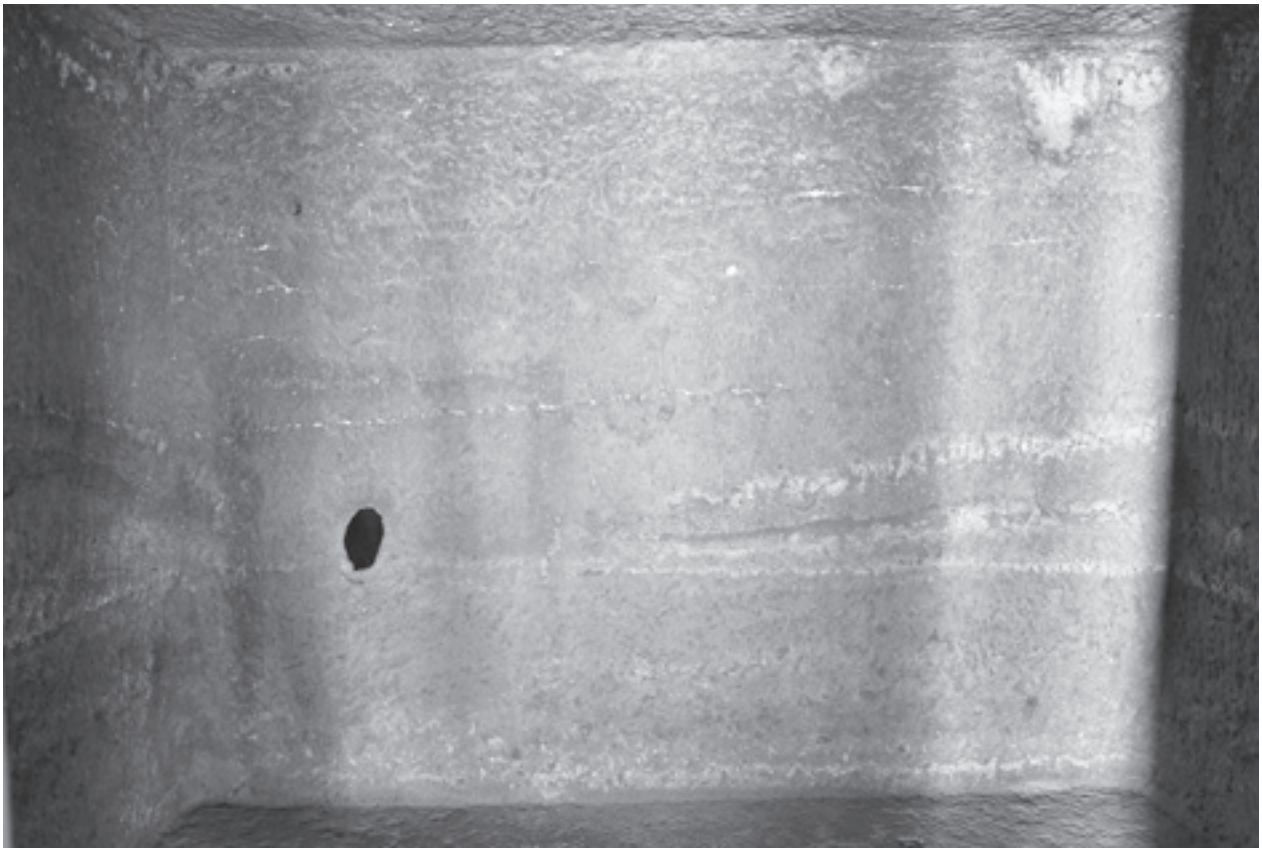

Fig.105 Ajanta Cave 21 Porch Left Cell

Fig.106 Ajanta Cave 21 Porch Right

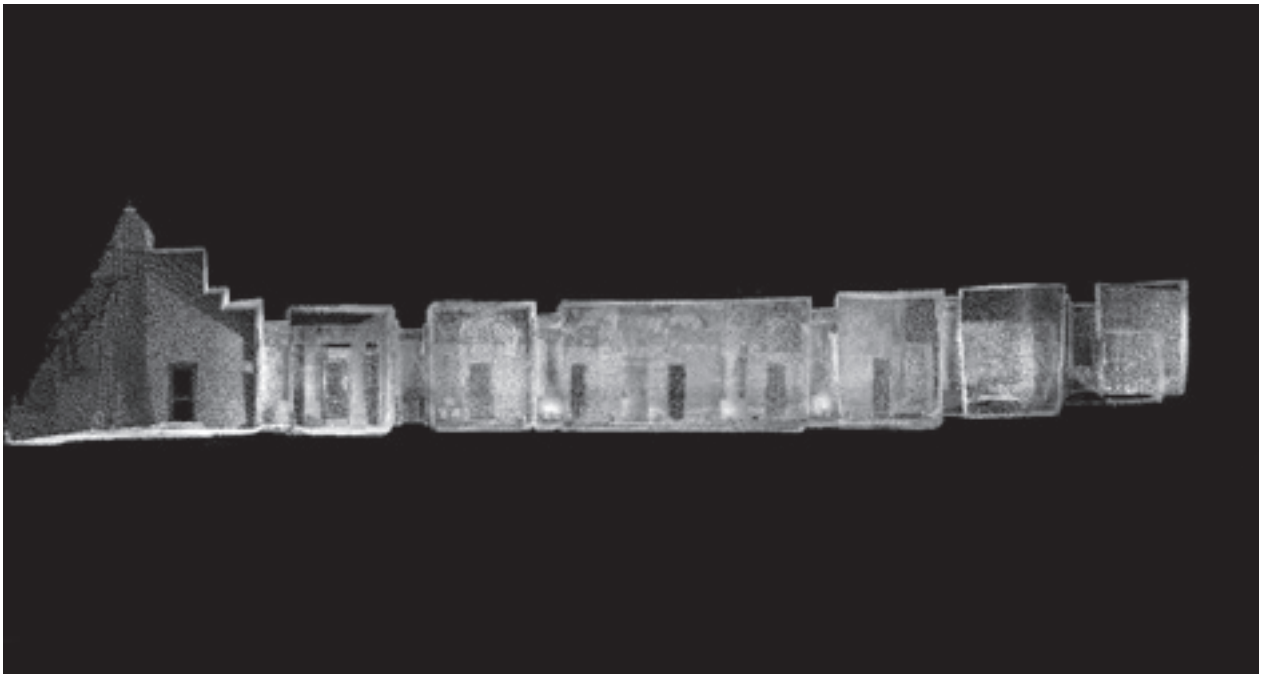

Fig.107 Ajanta Caves 23 Section Data

Fig.108 Ajanta Cave 23 Facade

Fig.109 Ajanta Cave 23 Porch Door

Fig.110 Ajanta Cave 23 Porch Left

Fig.111 Ajanta Cave 23 Porch Right

Fig.112 Ajanta Cave 23 Porch Right Cell

Fig.113 Ajanta Cave 23 Interior

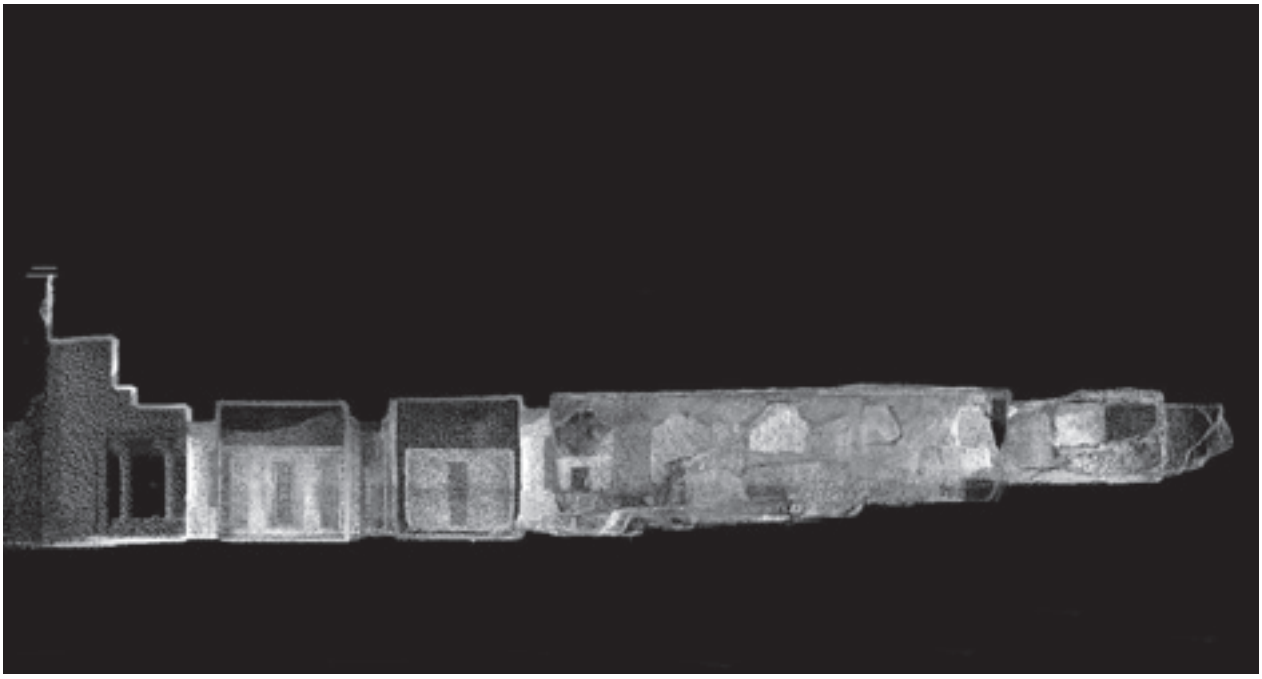

Fig.114 Ajanta Caves 24 Section Data

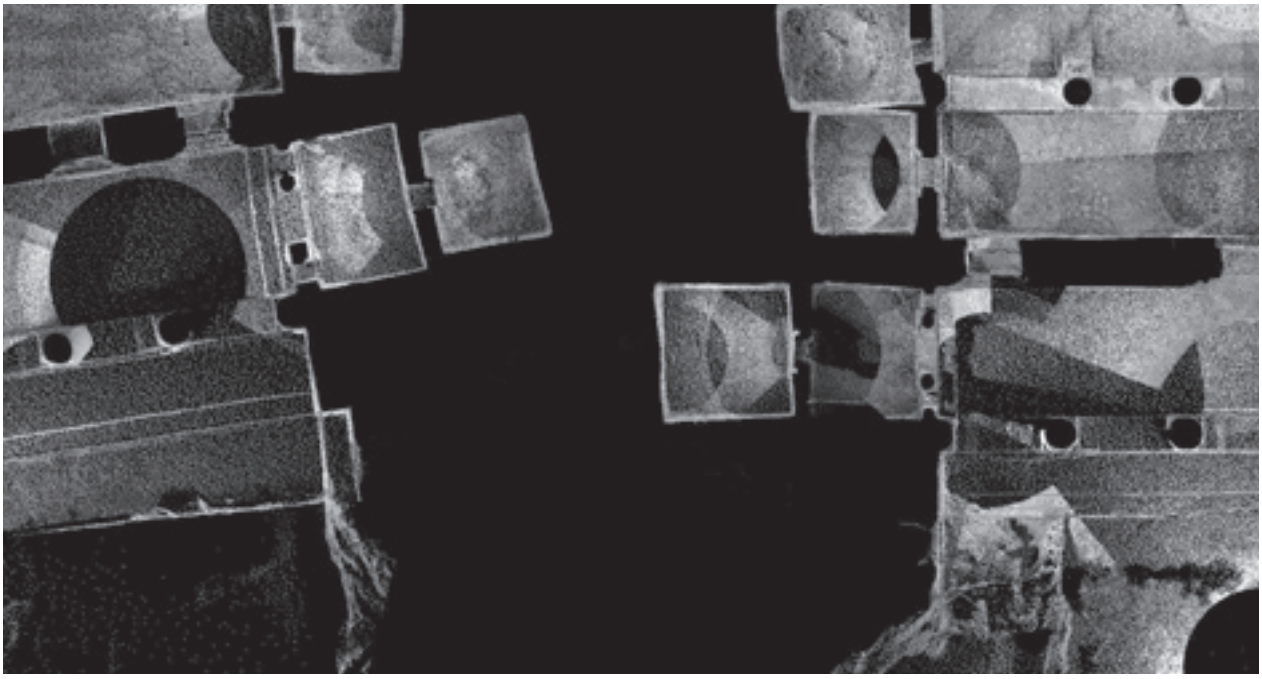

Fig.115 Ajanta Caves 23 - 24 Porch Plan Data

Fig.116 Ajanta cave 24 Façade

Fig.117 Ajanta cave 24 Porch Door

Fig.118 Ajanta cave 24 Porch Left

Fig.119 Ajanta cave 24 Porch Right

Fig.120 Ajanta cave 24 Interior, Hall

Fig.121 Ajanta cave 24 Interior, Left Aisle

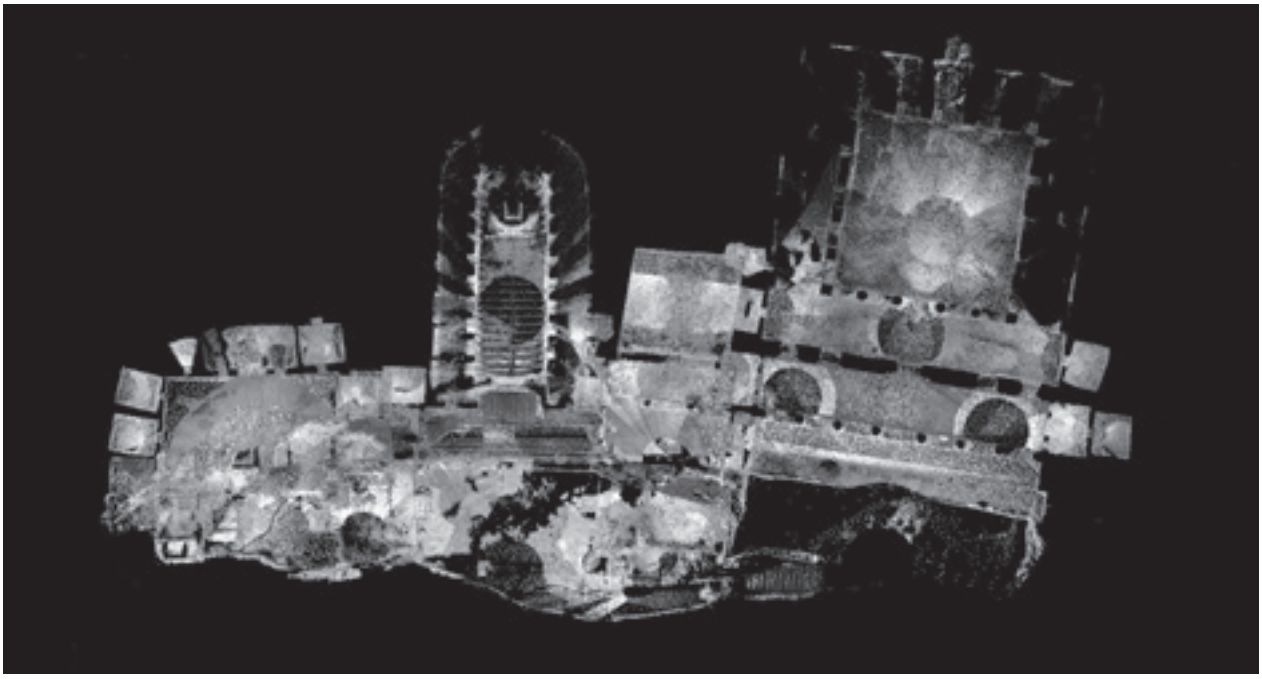

Fig.122 Ajanta Caves 24 - 27 Plan Data

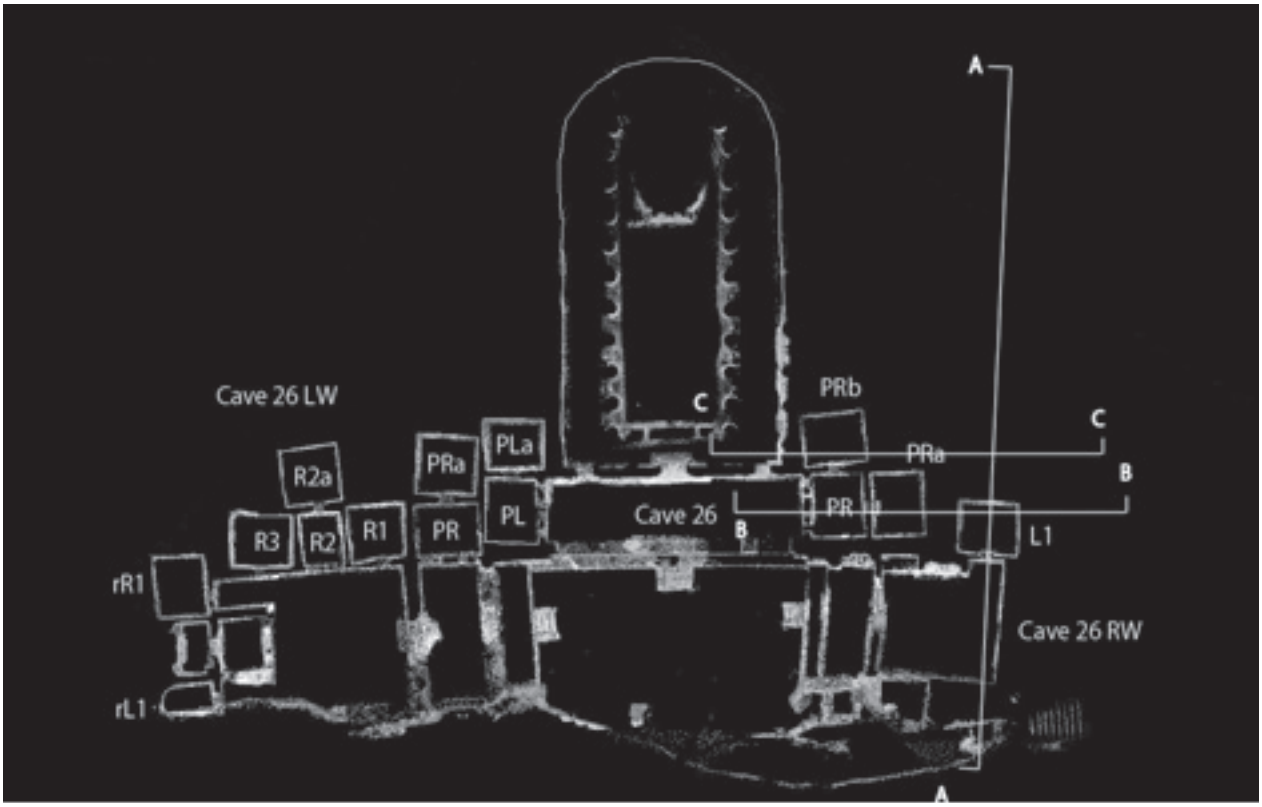

Fig.123 Ajanta Caves 26 Complex Plan Data 1

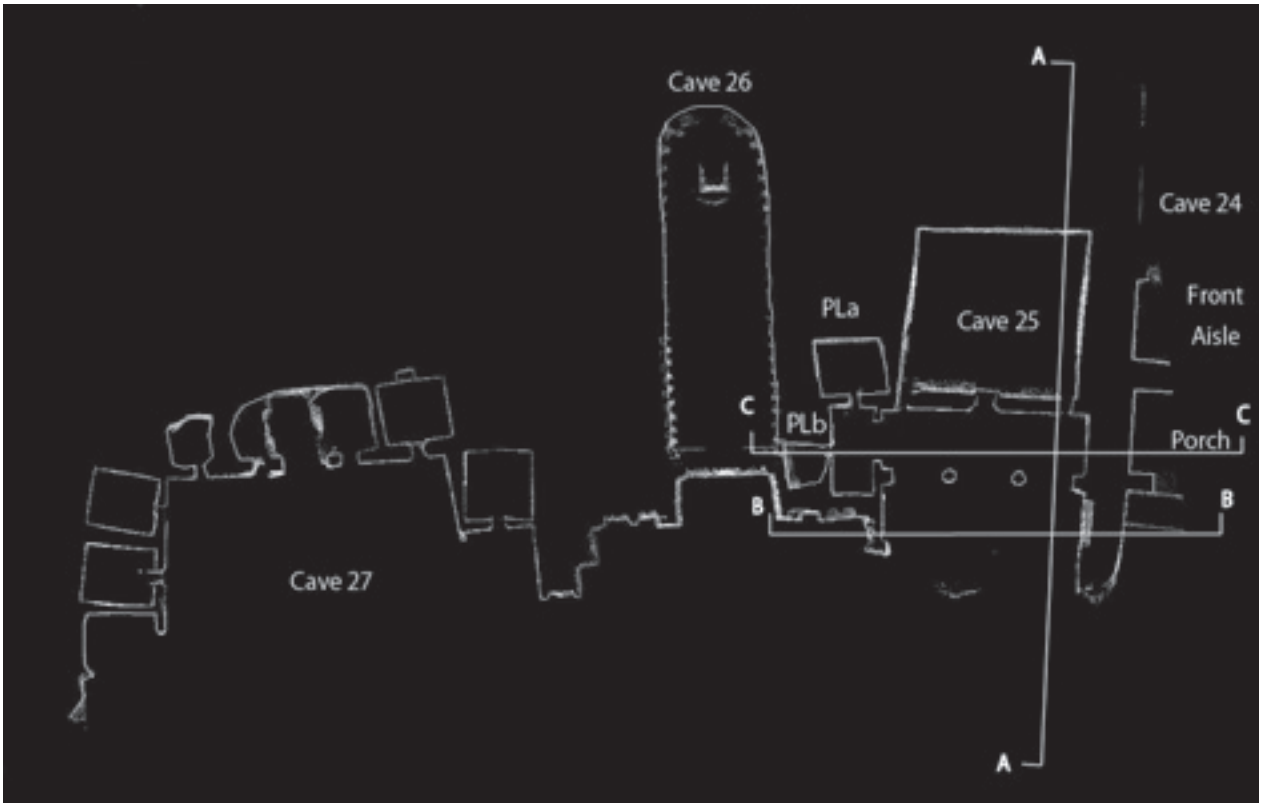

Fig.124 Ajanta Caves 26 Complex Plan Data 2

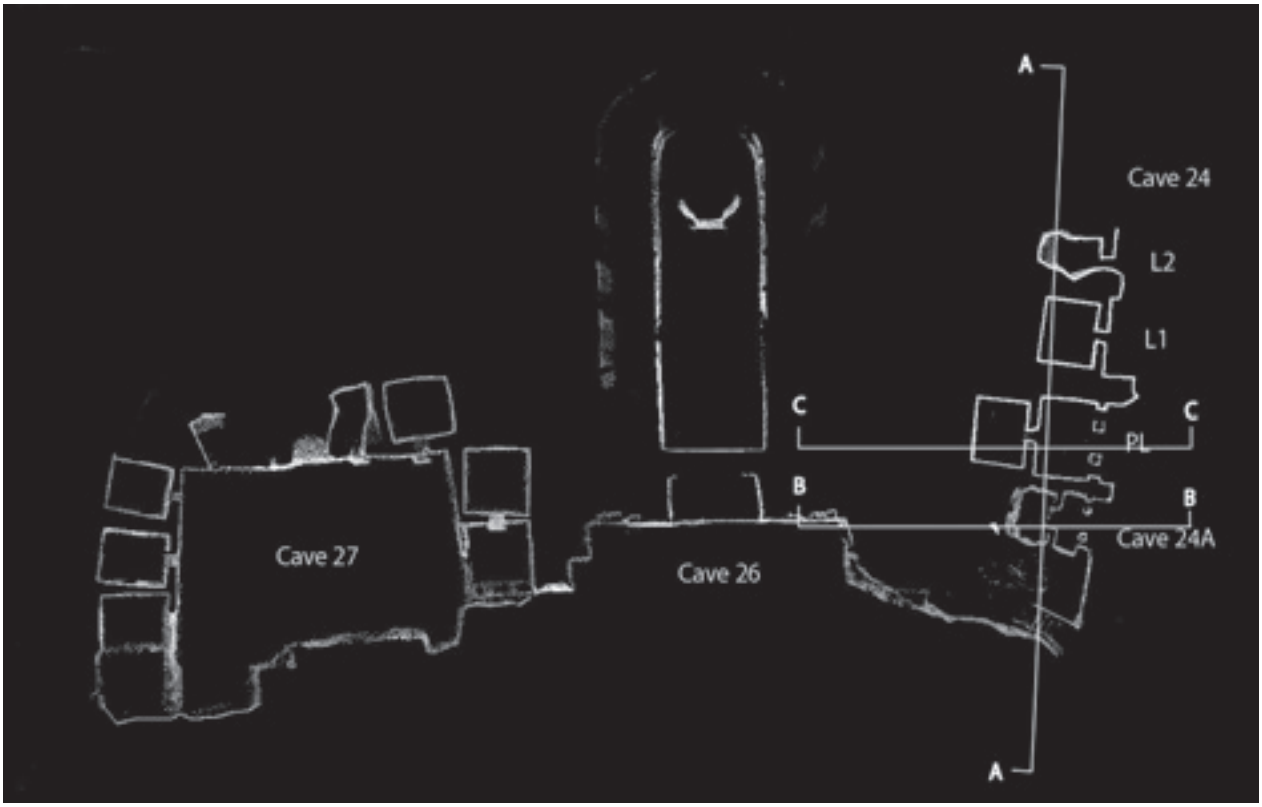

Fig.125 Ajanta Caves 26 Complex Plan Data 3

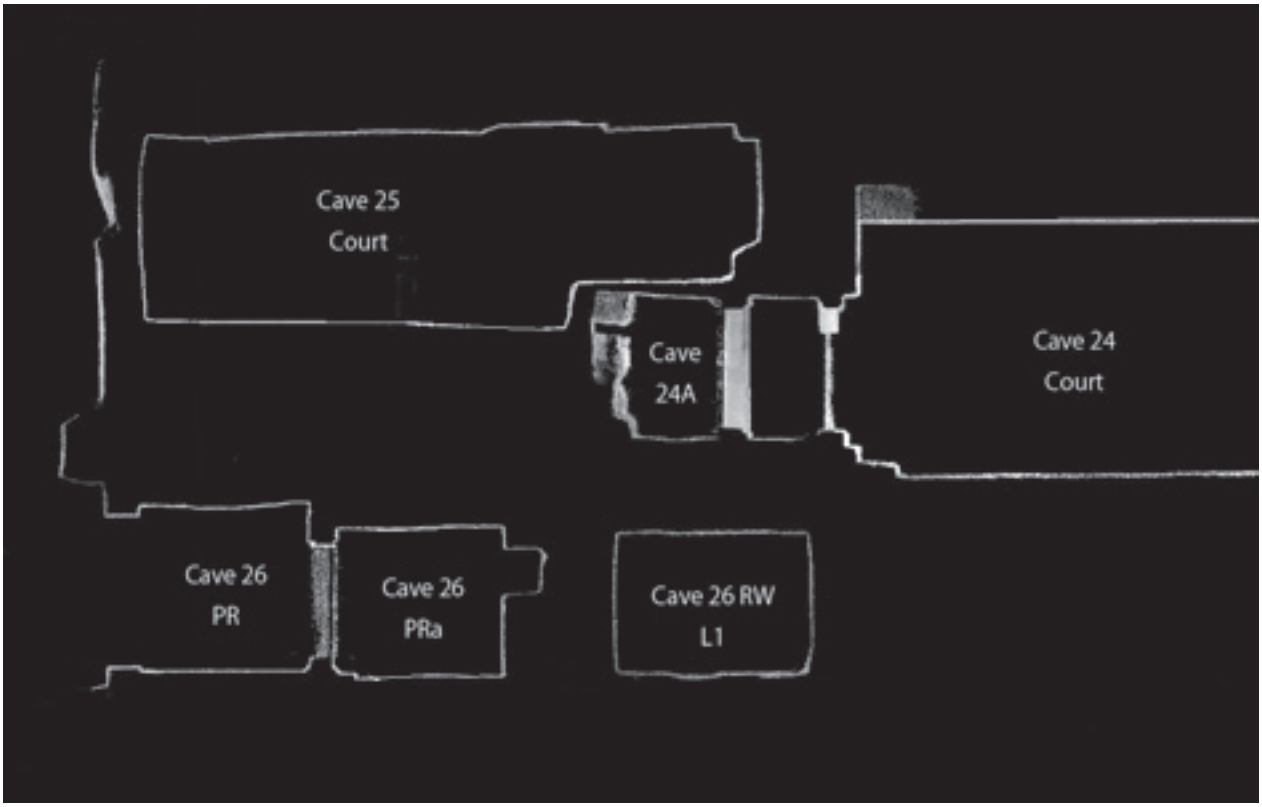

Fig.126 Ajanta Caves 26 Complex A-A Section Data

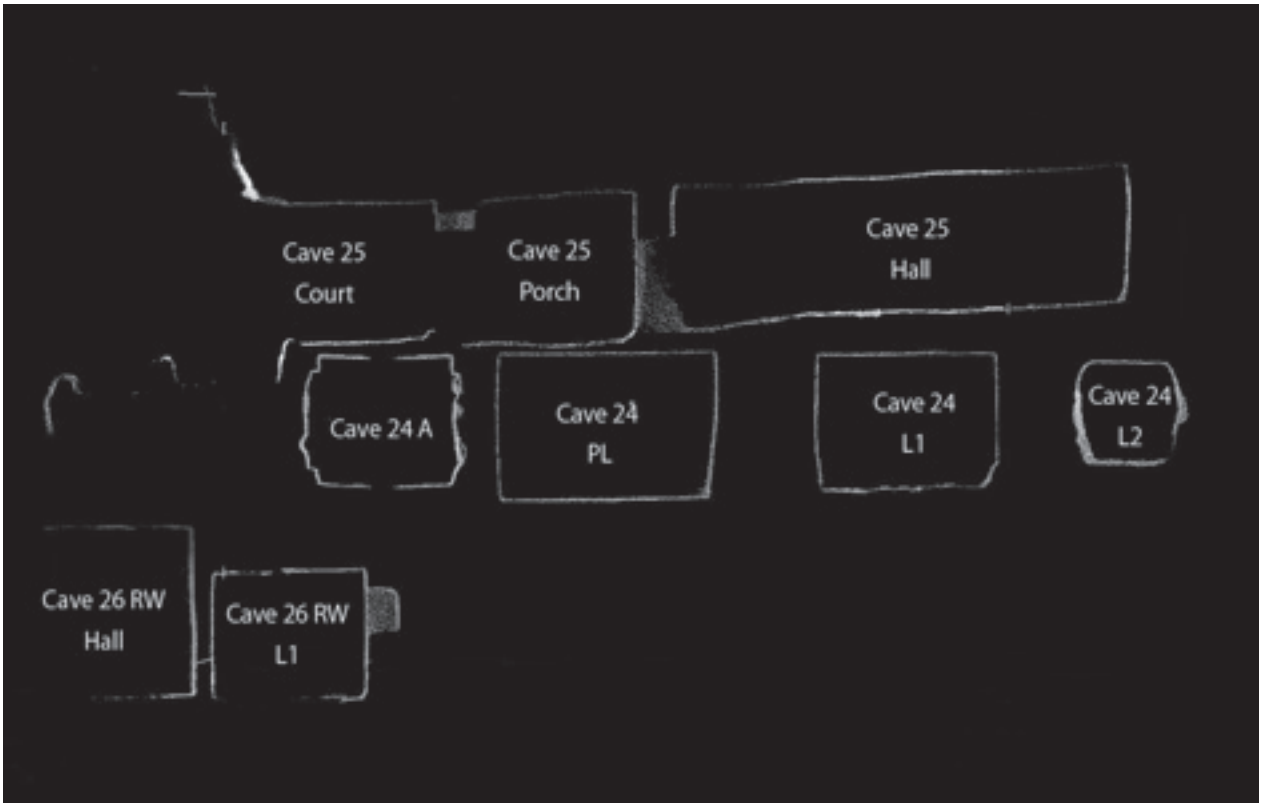

Fig.127 Ajanta Caves 26 Complex B-B Section Data

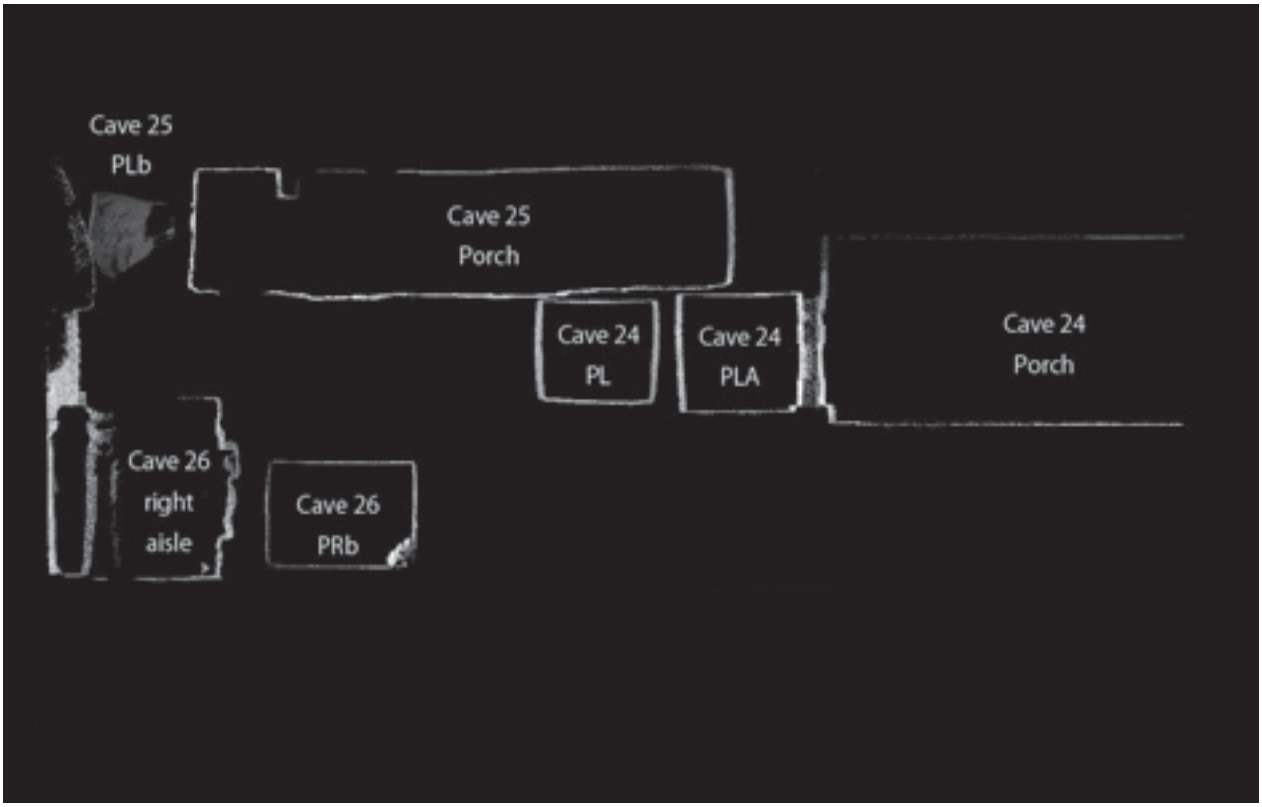

Fig.128 Ajanta Caves 26 Complex C-C Section Data

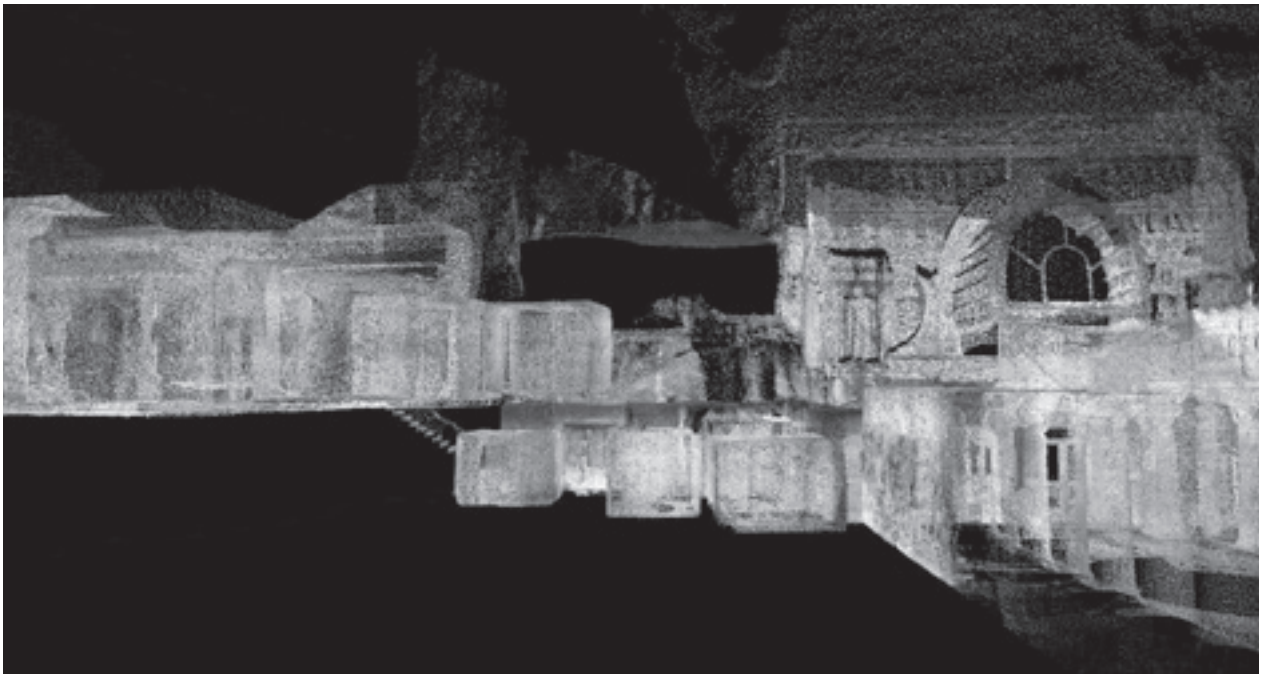

Fig.129 Ajanta Caves 26 Complex Perspective Data 2

Fig.130 Ajanta cave 24A Façade

Fig.131 Ajanta cave 25 Distant View

Fig.132 Ajanta cave 25 Court

Fig.133 Ajanta cave 25 Court, Pedestal

Fig.134 Ajanta cave 25 Porch Left

Fig.135 Ajanta cave 25 Interior

Fig.136 Ajanta Cave 26RW Interior

Fig.137 Ajanta Cave 26 Façade

Fig.138 Ajanta Cave 26 Interior, Hall

Fig.139 Ajanta Cave 26 Interior, Left Aisle

Fig.140 Ajanta Cave 26 Interior, Right Aisle

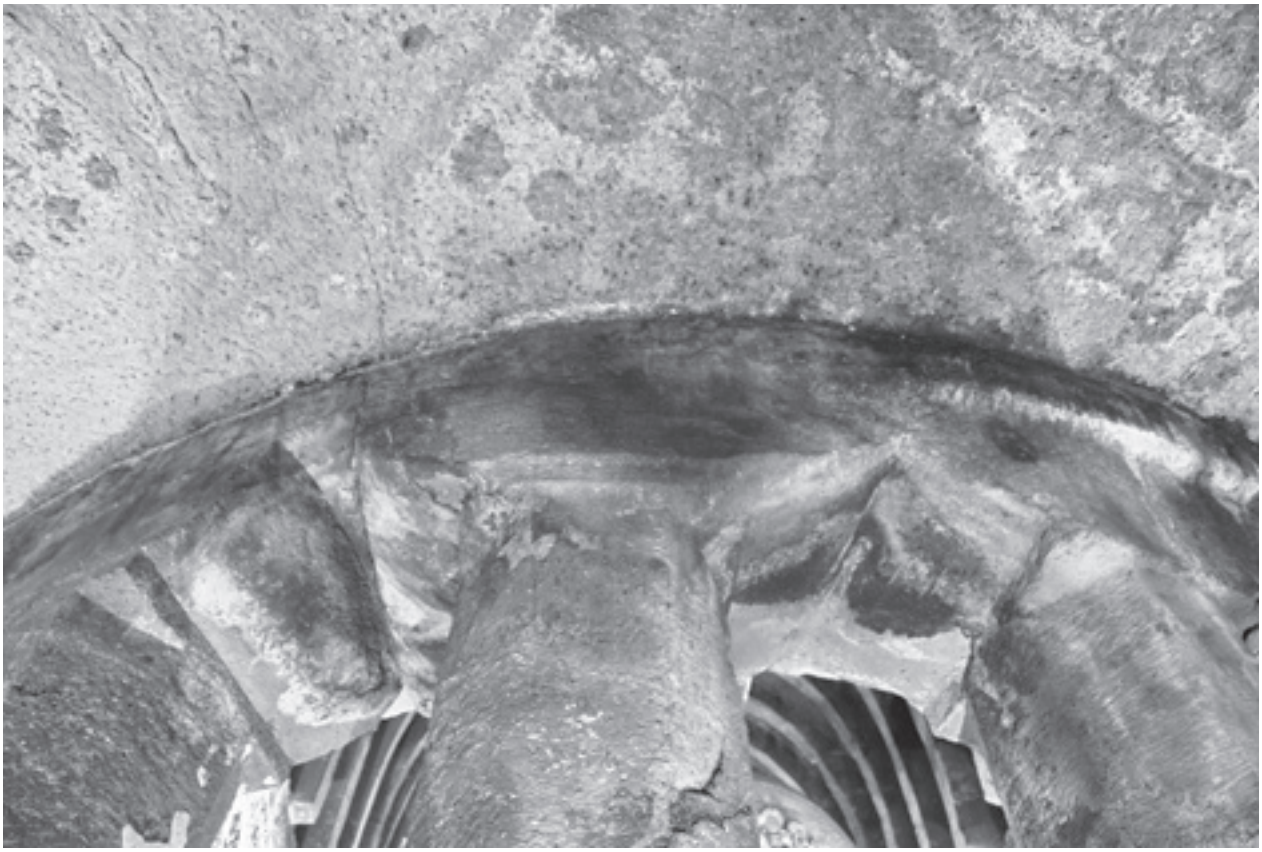

Fig.141 Ajanta Cave 26 Interior, Back Aisle

Fig.142 Ajanta Cave 26 Interior, Ceiling

Fig.143 Ajanta Cave 26, Porch Left

Fig.144 Ajanta Cave 26, Porch Right

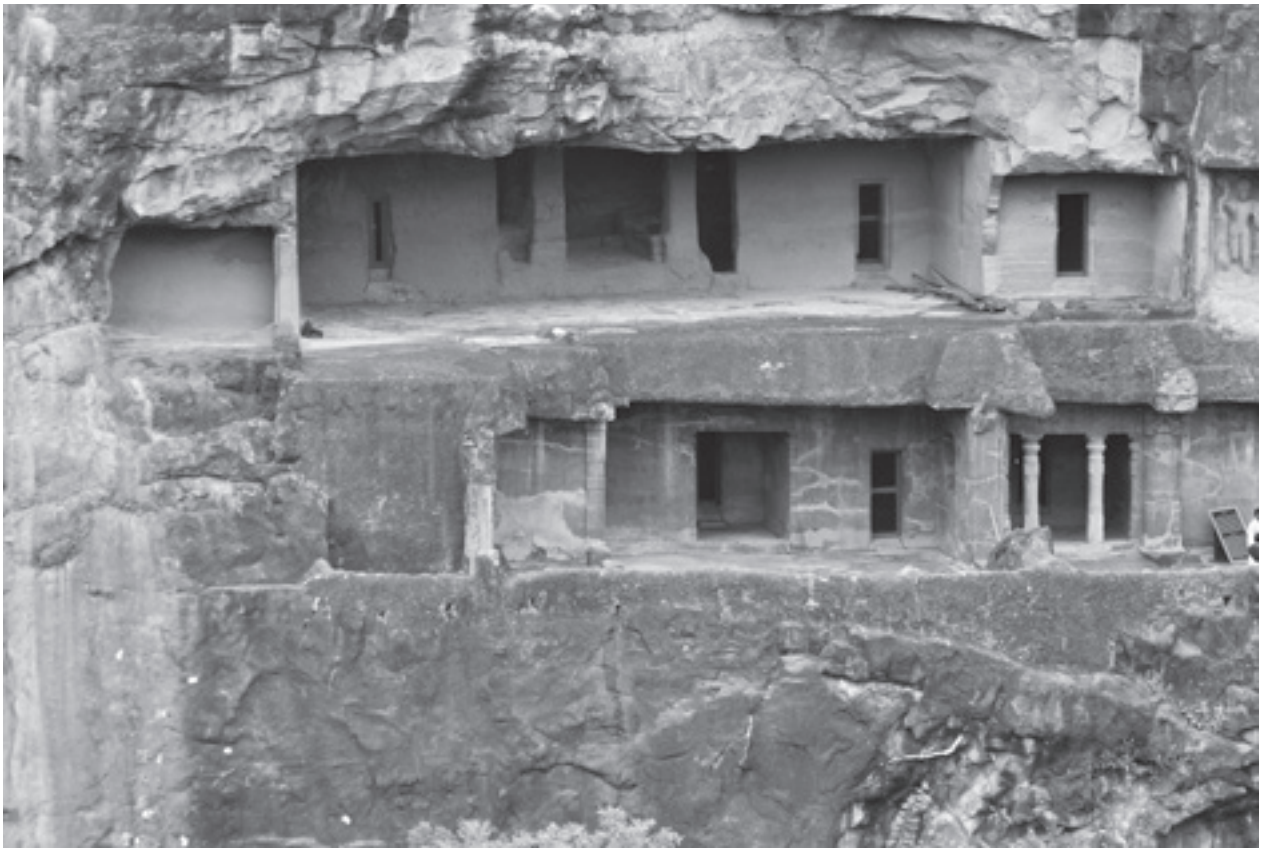

Fig.145 Ajanta Cave 26LW Distant View

Fig.146 Ajanta Cave 26LW Façade

Fig.147 Ajanta Cave 27 Interior

Fig.148 Ajanta Cave 27 Porch Right

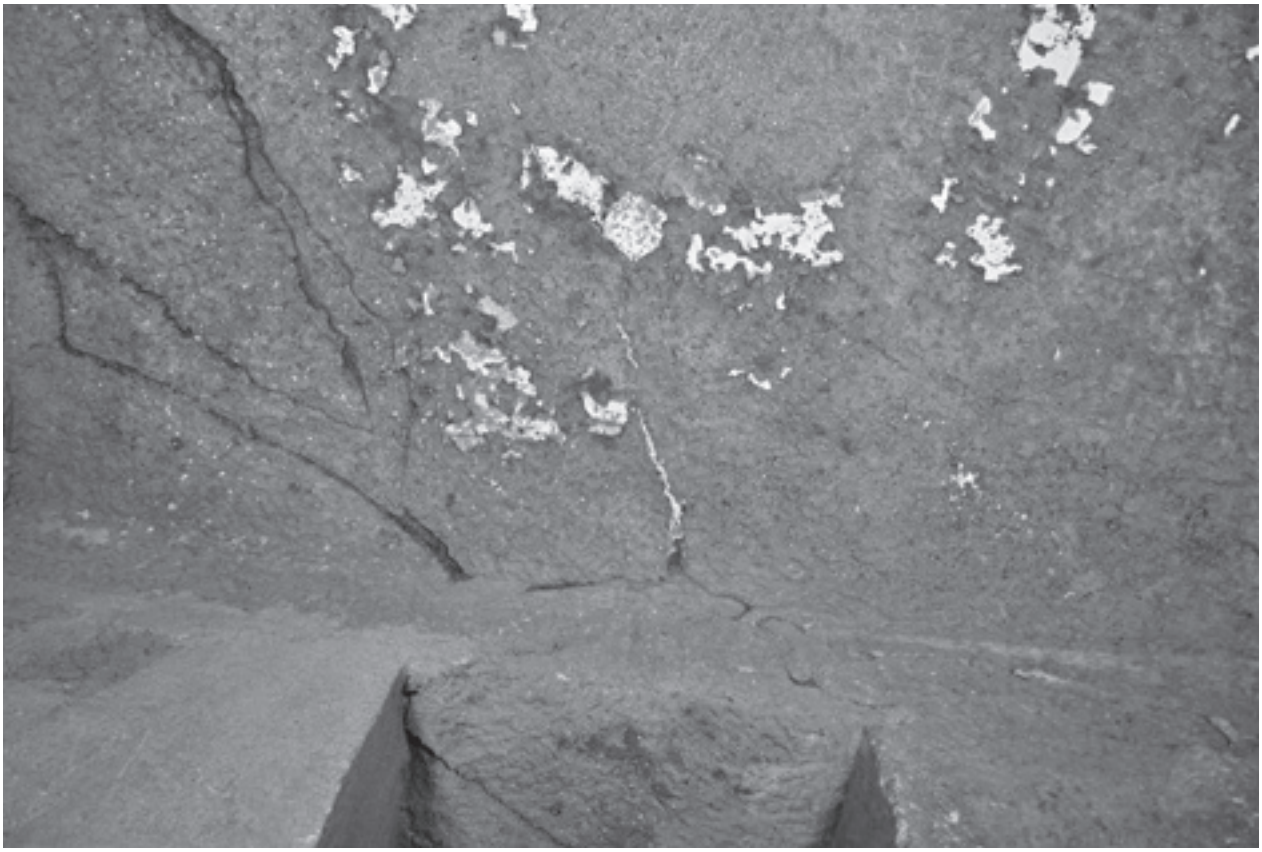

Fig.149 Ajanta Cave 27 Porch Right Cell, Ceiling

Fig.150 Ajanta Cave 27 Porch Cell, Interior